すぎかえる二六二号　「夜明け」

GON OUT

BACKSON

BISY

BACKSON

(“The House at Pooh Corner”)

がいしつ

すぎかえる

いすがし

すぎかえる

（「プー横町にたった家」）

＊　＊　＊　＊

フクロは、もういちど、そのはり紙をながめました。フクロくらい教育のあるものになると、はり紙をよむことなどということは、ぞうさもないことです。

「がいしつ　すぎかえる　いすがし　すぎかえる。」

いかにも、はり紙に書いてありそうなことじゃありませんか。

「万事、明白ではありませぬか、ウサギさん。クリストファー・ロビンは、スギカエルといっしょに外出されたのですよ。最近、あなた、森のどこかでスギカエルをお見かけにはなられなかったかな？」

「さあ、わからない。」と、ウサギはいいました。「それが知りたくて、きみのところにきたんだ。スギカエルって、どんなもの？」

「さよう。」と、フクロはいいました。「ぶち、または草食性のスギカエルはどんなものかといえば――――」

（「プー横町にたった家」）

目次

テーマ作品「夜明け」

陽光　しらす　11

雪だるま男　黒田ももん　45

ドーン・ド・ドーン・ブロードキャスト　作花霖　111

パパはいつも、夜明けとともに起きるから　なこ　129
円環　あいかわあいか　169
あとがき・編集後記　235

テーマ作品「夜明け」

陽光

しらす

私がこれから記すのは、ある一組の夫婦の話である。

もしかすると読者の皆様の中には、この夫婦、特に夫のことについて、ご存じの方がいるかもしれない。そういう方の脳裏によぎる彼の印象は、おそらくあまり好ましいものではないだろう。この事情に鑑みて、以下の文章については、所々記述が曖昧になることをお許しいただきたい。元々私はこの文章を、彼が如何にその立場に陥るに至ったかということの説明や、その弁明のためには書いていない。ただこの夫婦の在り方が、私以外の誰にも知られずにあるのは悲しい事だと思った、それだけなのだ。

さて、話は私の学生時代に遡る。当時、私には一人の友人がいた。仮に田中としておこう。

田中は中々特徴的な人物だったので、彼を紹介する言葉には様々なものがあった。小柄で丸眼鏡が妙に似合うだとか、きわめて多弁だとか、文芸の面で無二の才能があり本人も作家志望であるとか。ただ、一言で言い表そうとするなら、これに尽きた。「無類のお人好し」。

田中は、とにかく情に厚かった。他人のありふれた苦労話に涙し、冗談交じりの自嘲に必死で反論し、真偽も不確かな他人の不幸話に本気で同情する。誰かに困っていると言われれば放って

おけず、金やら時間やら、惜しげもなくそのことに費やした。時に滑稽に見えるほど、彼は善人で、献身的だった。

そんな彼のことを、馬鹿にする者も一定数いた。彼の忙しないさま、顔を真っ赤にして泣くさまを、心なく嗤うのだ。人の好さに付け込まれ、騙されたことも一度や二度ではない。実の所私自身、そのような連中の気持ちも全く分からないと言えば嘘になる。

しかしながら、私は自らの暗い感情に従うことは出来なかった。彼は私の恩人だったのだ。

学費を出してくれていた父が亡くなって途方に暮れていたとき、学部も違う田中が真剣に話を聞き、学校に程近い彼の実家に下宿させてもらえるよう彼の両親に頼み込んでくれていなかったら、学内外の奨学金の制度を探し、申請するのを手伝ってくれていなかったら、私は卒業することができていなかっただろう。それからの私の人生も、故郷の家族の人生も、大きく変わってしまっていたはずだ。

それだけのことをしておきながら、田中は一度も私に恩を着せるような言動を取らなかった。父を亡くした私を慮り、故郷の家族の生活を心配してくれていた。なんとか在学の目途が立った時は、自分のことのように喜んでくれた。

そう、紛れもなく、彼は善人だった。良い奴だった。
時折心配になるほどに。

ある日田中が、私に話があると言い出した。午前の授業終わりの気怠げにざわついた学食には似つかわしくない、酷く真剣な声だった。あのな木村、と切り出され、思わず私は背筋を伸ばした。

「恋人ができたんだ。先日交際を申し込んで、承諾してもらった」

ごくごく真面目に、彼は言った。

「はあ」

私は気の抜けた返事をした。正直なところ、拍子抜けしていた。

こんなに真剣に話すのだから、また何か厄介事――田中には無関係のはずの部活の内部抗争やら、怪しげな宗教勧誘やら――に巻き込まれたのかと思ったのだ。彼は、そういう物事を引き付けやすい性質を持っていた。

私は気軽に続けた。

「良かったじゃないか。どこで出会ったんだ？　前の娘みたいに講義室か。……あの時は、大変だったな」

とある講義で隣の席に座った女子生徒に田中が惚れたのは、半年ほど前のことだった。酒の席でこちらが恥ずかしくなるほど彼女の魅力を語る様も、彼女に想い人がいることが分かり膝から崩れ落ちる姿も、まだ十分記憶に新しかった。

田中がよくぞ聞いてくれた、とばかりに答えた。

「いや、彼女は学生じゃないんだ。学校の少し下ったところに、『あかね』という喫茶店があるだろう。マスターと店員一人しかいない、小さな店なのだけど。その店員が、彼女だよ」

私はその喫茶店を思い出してみようとした。おぼろげに、くすんだ塗装の寂れた建物の映像が浮かんできた。

田中の話は続いた。

「思わず見とれてしまうくらい綺麗な人でね。いや、顔立ちも勿論整っているけれど、そういうことだけじゃなくて、一番はその立ち居振る舞いなんだ。何気ない所作も、彼女がやるときらきら光を纏って見える。内面からにじみ出る美というのはああいうことなんだろうな。あまりに心

惹かれてしまって、仕事中だというのについ声を掛けたんだ。話してみて、いや、驚いたよ。声も話し方も、想像通りかそれ以上の素晴らしさだったんだから。芯が通っていながら儚げで、しかも可愛らしさも兼ね備えていると来た。その時は客と店員としての会話しかできなかったけれど、通い詰めるうちに少しずつ自分のことも話してくれるようになってね。どうやら今まで親御さんのことや仕事のことで、ずいぶん苦労してきたらしい。それでも、決して同情を引こうという風はなく、凛として、淡々と話すんだ。あれほど美しい上に、内面の強さまで備えているなんて。あんな人は他にはいないよ。ああ、出会えて本当に良かった、先々週あの店を選んだ自分を褒めてやりた――」

「いや、ちょっと待ってくれ」

私は思わず遮った。

「君と彼女、出会ってまだ二週間なのか」

「ああ、そうだよ。そりゃ、期間としては短いと思うけれど、以前のこともある。気持ちを伝えるのは早い方がいいだろう？　彼女を驚かせてしまったかも知れないけれど、すぐに承諾してくれたから、きっと不愉快ではなかったと思うんだ」

私は猛烈に不安になった。私もあまり恋愛経験の豊富な方ではないが、果たして普通の女性が、たかだか二週間前に出会っただけの勤め先の客と、そう易々と交際するものだろうか。田中の異様なほどのお人好しは少し話せば伝わるから、彼女もそこに付け込もうとする輩の一人なのではないか。まさか金なんて貸してないだろうな。

数瞬の内に薄暗い思考を巡らせた後、私は田中に提案した。

「素敵な人に出会えたみたいで良かったじゃないか。友人として喜ばしいよ。――その愛しの彼女、是非俺にも紹介してくれないか？」

私の胸の内をなど露知らず、田中は嬉しそうに了承した。

田中が彼女との対面の場所に選んだのは、商店街の中にある居酒屋だった。大学に程近いことから学生御用達の店で、金曜日であるのも手伝い、店内はいつも以上に騒がしかった。もっと洒落た店でなくて良いのかと田中に尋ねたのだが、「ここの出汁巻きが今まで食べた物の中で一番美味しいから、彼女に食べさせてやりたくて」との応答だった。いかにも田中らしい。

彼女は仕事を終えてから合流するとのことだったので、軽い物を摘まみつつ彼女の登場を待っ

た。田中は、友人に自慢の恋人を紹介する緊張で、そわそわし通しだった。酒の進みがやたらに早く、店の入り口が開くたびに物凄い勢いでそちらを見た。

――そろそろ田中の首がもげるのではないかと私が心配し始めたころ、彼女がやってきた。田中の顔がぱあっと音がしそうなほど明るくなったので、すぐに分かった。

彼女は、拍子抜けするほど目立たない人だった。

年の頃は日頃よく見かける女子大生達と同じくらいのはずなのに、彼女らにあるような華やかさや飾り気といったものとは無縁のようだった。簡素な藍色のワンピースにも、うなじのあたりで纏めた髪にも、一切装飾らしいものは付いておらず、化粧気のない顔も、ただ整っているという印象だけを抱かせた。

そのような印象に拍車を掛けていたのが、彼女の表情だった。店に入ってきてから、田中と私に気付いて会釈をし、ゆるやかに近づいて来てそばに立つまで、ほとんど変わらない静かな顔をしていた。ごく自然な無表情であったので特に嫌な感じは抱かなかったが、恋人の友人に良い印象を与えようという気概も感じられなかった。

田中が満面の笑みで自分の隣に座るよう勧めた。私から見てちょうど斜め向かいに当たる席だ。

こくりと頷いてその通りにしながら、彼女が言った。
「遅くなって申し訳ありません。店の片付けが長引いてしまって」
少し高めの柔らかい声で、淡々とした話し方によく似合っていた。全く構わないとうきうきとした口調で田中が言った。
その後は自己紹介の運びとなったが、全く初対面の者同士で会話が弾むわけがない。自然に、共通の知り合いである田中が進行役を取り持つことになるわけなのだが、彼は自己紹介の場の進行役にはほとほと向いていなかった。進行役というのは、参加者にどれだけ自分の話をさせられるか、という点が重要であるはずなのだが、とにかく進行役自身が相手の情報をよくしゃべるのである。それも、聞いていて気恥ずかしくなるほどの惜しみない誉め言葉を使って。
私は元来卑屈な人間であるので、一方的な誉め言葉は、むしろ悪口より受け取りがたかった。店の天井を突き破るほど持ち上げられる自らの評価に居たたまれなくなり、「話半分に聞いてください」と言うと、彼女は静かにこくりと頷いた。
「私の紹介についても同様にお願いします」
それだけ言うと、一つ出汁巻き卵を取って、黙々と食んでいた。

その後も、ヴァリエーション豊かに、かつとめどなく続く田中の話に私が口を挟みつつ、時折彼女に水を向けるという形で、意外にも和やかに食事会は進んだ。いざとなれば女性相手の口論も辞さない、との意気込みでやってきた私には少々拍子抜けだったが、彼女について、特に警戒すべき粗が見当たらなかったのもまた事実だった。

基本的に無口で自分から口を開くことはないが、きちんと会話を聞いてはおり、話を振られれば過不足なく応答する。会話の内容からは、堅実さと聡明さが伺い知れた。

趣味は図書館での読書だそうで、田中も文学の話題をとっかかりに彼女と距離を縮めたらしい。とはいえ、文学部の中でも飛びぬけて知識欲の強い田中と同等の知識があるというわけではないようで、彼の話が専門的になりすぎると、隠すことなくきょとんとしていた。その様子を見た田中が楽し気に行う解説は丁寧に聴いていたので、妙に取り繕わないその態度にはむしろ好感が持てた。

あまりに飾り気のない風貌は何らかの演技ではないかとの疑心暗鬼から、試すような心持ちで知っている限りの流行物の話題を示すなどもしたのだが、どうやら一定の知識はあっても興味が

ない、という状態だと知れた。「これこれというものにはご興味ありませんか、今流行っているようですが」との質問に、「ああ、お店のお客さんが話しているのは聞いたことがありますね」との言葉と、続きを促すような静かな表情が返ってくる、ということが複数回続けば、認めざるを得ない。

私は段々居心地が悪くなってきた。

そのように我々が会話する様子を見て、田中は終始嬉しそうにしていた。その喜び方には、ほら見たろうというような厭らしさはなく、ただ、自分の大事な恋人と数年来の友人が仲良く会話しているのが嬉しい、といったにこやかさだけがあった。それが私の居心地の悪さに拍車を掛けた。

最後の悪あがきのつもりで、田中が会計のため席を外した際、私は彼女に訊いた。

「失礼ですが。何故田中の交際の申し込みを承諾されたんですか。ああいえ、勿論田中が問題のある人間というわけではありません。ただ、少しお話しただけですが、あまり簡単に男性とお付き合いされる女性だとは感じられなかったもので。先々週に出会っただけの男の突然の申し込みです、驚かれたのではないですか」

前置き通り、失礼な質問だったと思う。酒の席とはいえ、彼女を不愉快にさせてもおかしくはなかった。むしろ、私はそれを望んでいたのかもしれない。

不躾な質問に、彼女は、怒る様子もなく静かに応じた。わずかに考える素振りを見せた後、会計台の方をゆるりと見て言う。

「そうですね、驚くには驚きましたが……おそらく本気でおっしゃっているのだろうなとも感じましたから。わたしは、昔からそういうことを感じるのは得意な方のようで」

返答はふわりとしており、その全てを把握できたわけではなかったが、彼女なりに、田中への想いがあっての選択であることは察せられた。

会計を済ませこちらにやって来た田中に、彼女がおいくらでしたかと声を掛ける。

支払いについて和やかな押し問答を繰り広げる二人を横目に、私はひとまず様子見とすることを決めた。

それから数年が経った。

私は、故郷のことは兄に任せて都内の会社に就職し、都会で一人暮らしをしていた。故郷への

仕送りや奨学金の返済はあり、決して楽な生活ではなかったが、仕事にはやりがいがあり、気ままな生活も性に合っていたので、それなりに充実した日々を過ごしていた。

その生活に彩りを添えてくれたのが、田中と彼女の存在だった。

彼らは、田中の卒業後も数年交際を続け、田中が若手の作家として食べていける目途が立った頃合いに結婚し、田中夫妻となっていた。この頃から私は彼女を「奥さん」と呼ぶようになっていたので、これ以降、この記述でもそう呼ぶこととする。

田中夫妻とは、卒業後も付き合いが続いていた。初めての食事会後もちょくちょく行動を共にしていたところ、いつの間にか私は夫妻の共通の友人、という立場になっていたのだった。結婚式では友人代表として挨拶もしたし、主に夫に強く誘われて、彼らの新居で夕食をいただいたりもしていた。奥さんが不愉快に思っていないか少々気になりもしたのだが、彼女はいつ訪ねても穏やかな様子だった。

その日も私は招かれて、田中家に立ち寄ろうとしていた。手には少し良い酒の入った紙袋を携えていた。奥さんが好きな銘柄と田中から聞いていた。

こぢんまりとした一軒家に辿り着き呼び鈴を鳴らすと、髪を一つ括りにしてエプロンをつけた奥さんが顔を見せ、珍しく意外そうな顔をした。

数年来の付き合いで、彼女がこうした反応をするときは、何かしらそうすべき理由があると分かっていた。慌てて彼女の反応の理由を考え、一つの予感をもって手帳を見ると、案の定、約束の時間が私の思っていたものより一時間後になっていた。田中夫妻は私の住まいと職場のちょうど中間の位置に居を構えており、私も勤務後によくお邪魔していた。その日もいつもの調子で、勤務後に田中家に向かったのだが、その日は早番で退社時間も一時間早いのを失念していたのだった。

よりにもよって今日この日にミスとは。自分に呆れた。

田中もまだ用事で帰宅していないとのことだったので、早く訪れてしまったことを詫び、また一時間後に訪ねる旨を伝えた。すると、奥さんは穏やかに言った。

「外は寒いですよ。まだ準備中でおかまいもできませんが、それでもよろしければ中でお待ちになりませんか。もうすぐ夫も帰ってくるでしょうから」

田中がどう思うかということや、近所の目という言葉が頭をよぎったが、彼はあの性格である

し、すぐに帰宅するとのことでもあったから、内外からあらぬ勘違いを受けることはないだろうと結論付けた。その日は二月の上旬でまだまだ寒く、近くに時間を潰せそうな場所もなかったので、中で待たせてもらえるならば大変ありがたかった。

居間に上がると、奥さんの言った通り、今まさに夕食の準備の真っ最中という状態だった。居間と一続きの台所からは出汁の香りが漂い、玉葱やら人参やら青魚やら、一時間後には食卓に並ぶ予定だろう食材達が並んでいた。

お茶を出してくれてから、夕食の準備に戻ろうとする奥さんに、私は手伝いを申し出た。あまり複雑な作業はできないが、野菜の皮むきくらいなら故郷で時折任されていたので、何とかなるだろう。

奥さんには「お客様にそのようなことはさせられません」と一度断られたが、こちらの手違いで準備を中断させたのだから、と押し切った。ざるに一杯の野菜と包丁を渡してくれる奥さんからは、「最後に作る炒め物用の野菜なので、あまり急いでいただかなくて構いませんから」と言われた。

かえって迷惑だったかもしれないと思いながら、居間の机を借りて黙々と皮をむいた。

奥さんの様子を何となく目で追うと、彼女は、先に仕込みができていたらしい煮物の調理に取り掛かっていた。鍋に出汁と調味料を入れて軽くかき混ぜ、できた煮汁に綺麗に切られた材料を投入し、火にかける。それが終わると焼き魚の下準備だ。調理用の平たい皿に魚をきちんと並べ、適量の塩をさらさらと振る。塩の瓶を元あった位置に戻し、魚を邪魔にならない場所に避け、休むことなく味噌汁用だろう具材を切り始める。

奥さんの一連の動きは無駄が無くかつ滑らかで、それらの作業を何度も何度も繰り返してきたことが伺われた。特に目立つことをしているわけではないのに、茶道の作法か何かのように目を引く。学生の頃田中が、彼女の店員としての働きぶりを激賞していたことを思い出した。

おそらく会話をしても邪魔にはならないだろう。そう判断して、私は奥さんに声を掛けた。

「最近はいかがですか。田中も近頃随分有名になりましたし、仕事もかなり増えてきたと聞いています。生活の方も、色々と変化があったのではないですか」

田中は、数年前に新進気鋭の若手作家としてデビューしてから、めきめきとその頭角を現し、その頃にはすっかり時の人になっていた。

奥さんは、椀に割り入れた卵を溶きながら、少し考える素振りを見せた。

「それほど生活に変化はないと思います。元々昨年くらいの収入で十分やりくりはできましたし。夫は忙しくなったようで、体を壊さないか心配ではありますが、物を書くのが生きがいみたいな人ですからね。書くのも他の作家の方に比べると早い方で、それほど苦労をしてはいないみたいです。夫の仕事の良し悪しは、わたしが普段読む種類の本でないのでよく分かりません。ああでも、ちょうど昨日などは、随分有名な作家の方のお家に招かれてお話ができたと嬉しそうにしていました。今の状態は、おそらく夫の望む生活に近いのではないでしょうか。それなら喜ばしい事ですね」

奥さんが玉子焼き機に椀の中身を傾ける。じゅわり、と甘い卵の香りが広がった。

ちょうど夕食が出来上がったタイミングで、田中が帰ってきた。大きな紙袋と小さな紙袋を一つずつ下げている。

田中はまず奥さんに明るく「ただいま」と言い、次に私に「もう来ていたのかい」と声を掛けた。私は苦笑して、一連の勘違いを田中に告げる。田中は笑いながらそれに応じた。

「何せ今日は特別な日だからな。ずっと準備に付き合ってもらっていたから、君も気が急いてい

たんだろう。と、いうわけでだ。どうかこれをもらってくれないかい？」
最後の台詞は奥さんに向けたものだった。そのまま小さな方の紙袋を渡す。
きょとんとした顔で紙袋を受け取った奥さんは、その中身を取り出し、目を見開いた。
紙袋から出てきたのは、プラチナのネックレスだった。見るからに高級品で、控えめな意匠ながら品の良いデザインをしている。
「今日は結婚記念日だろう？　最近稼ぎも良くなってきたことだし、盛大に祝いたいと思ってね。こっそり君の欲しい物を探っていたんだが、君ときたら本当に欲がないんだから、かえって困ってしまったよ。それで、彼にも協力してもらって、色々店を回っていたんだ。そうしたら、これを見つけてね。絶対に君に似合うと思って、すぐに購入した。気に入ってくれたかい？」
私はそこで、奥さんの様子がおかしいのに気づいた。
彼女は、微動だにせず、呆然とネックレスを見つめていた。
田中が自分の返答を待っていることに気づき、ようやっとという声の出し方で口を開く。
「……これ、とても良い物でしょう。貴方の欲しがっていた新しい本棚が買えるくらいの値段はすると思うわ」

「新しい本棚なんかより、君を喜ばせる方が優先に決まっているじゃないか」
にこにこと、当然のように田中が応じる。
その返答を受け、奥さんはますます凍り付いてしまった。にこやかだった田中も、段々と不安そうな顔になってくる。
「……気に入らなかったかい？」
ゆるりと奥さんが首を振った。
「いいえ。ただ、こんなことしてくれなくていいのにと思っただけよ。貴方の稼いだお金なんだから、貴方のために使えばいいの」
田中は、見るからにほっとした後、彼特有の、優しさそのもののような顔で言った。
「君を喜ばせるのが、僕のやりたいことなんだよ」
ケーキも買ってきたんだ、食事の後で食べよう、と言いながら、ケーキの入った紙袋を田中が冷蔵庫へしまいに行く。それに応じつつも、まだ奥さんはネックレスを見つめていた。その緊張した面持ちが、ひどく印象に残った。

事件が起こったのは、それからわずか数週間後のことだった。

仕事帰り立ち寄った飲み屋で、職場の先輩が見せてくれた週刊誌の見出しを見た時、私は目を疑った。

そこにはこう書かれていた。

『直山賞作家、同業若手・田中氏のアイディア盗用を告発』

先輩から雑誌をひったくるようにして続きを読む。

そこには、田中が先日発表した作品の内容が、告発した作家の仕事用のメモの内容に酷似していること、告発した作家と田中が先輩後輩の関係にあり、田中に作業を手伝わせることもあったこと、その際にアイディアを盗まれたのだろうと考えていることなどが、つらつらと並べ立てられていた。

それだけならば真偽不明の話で済んだのかもしれないが、その記事には、同じくその作家の助手をしていた者の証言や、実際のメモの写真、メモの記載と問題となっている作品との比較結果なども並んでおり、むやみに信憑性ある内容となっていた。記事の論調も、完全に田中を盗人と

して扱っており、「創作者として言語道断」などと断定的に責め立てていた。
私にその記事について知らせてくれた先輩は、私と田中が旧友だということを知っていた。後輩の友人が記事になっているのを知って、慌てて教えてくれたらしい。情報通な人でもあったので、この記事の評判についてもかなり把握していた。田中の名が幅広く知られるようになってきていたことに、告発した作家が高名な作家であったことも手伝って、主に田中を悪者とする方面で、幅広く広まりを見せているとのことだった。
「お前、この作家先生と友人なんだろう？　なにか勘付くところはなかったのか」
先輩が訊いてくる。
話を聞いてみます、とだけ答えて、私は飲み屋を走り出た。

田中の家の呼び鈴を鳴らすと、がちゃり、と勢いよく扉が開き、奥さんが駆け出てきた。私の姿を認めると、わずかに青ざめた顔で唇を噛む。
「記事を見まして。先ほど知ったんです。田中はいますか」
せっつくような私の言葉に、奥さんは首を振った。

「いえ、いないんです。あの週刊誌について、担当の方から連絡があって、本人も現物を読んで。しばらく呆然とした様子だったのですが、わたしが少し買い物に出た時に、ふらっと出ていったみたいで。心当たりに連絡してみても来ていないという返事だったので、木村さんと飲みにでも行ったのではと思っていたのですが……その様子だと、居場所をご存じないようですね」

じわり、と胸に嫌な予感が広がった。

「分かりました。心当たりを探してみるので、中で待っていてください。見つからなくても日付が回るまでには一度公衆電話から掛けますので、田中から連絡があればその時に教えてください。きっと大丈夫ですよ」

奥さんが頷くのを見て、私はまた走り出した。

よろしくお願いします、という声が背後から聞こえた。

それから数時間、私は思いつく限りの場所を探し回った。彼の家の近所の食事処、気に入ってよく散歩すると聞いていた公園、行きつけの酒屋。

行き違いにならないよう、すれ違う人や、次第に増える酔いつぶれた人影にも目を凝らした。

夜がどんどん深まっていく。
それでも見つからない。
ちょうど救急車が不穏な音を立てて横を通り過ぎ、焦燥感が強くなる。
途中で奥さんに電話を掛け、得られた成果がないことを告げた。田中から連絡もないとのことで、思わず溜息をつきそうになるのを堪えた。今一番落胆しているのは奥さんだろう。
「今お伝えしたような場所は探したのですが、他に心当たりの場所はありませんか。見て回ってみます」
何か手掛かりだけでも掴めないかと尋ねると、数拍おいて、いつもよりわずかにトーンの低い声が返ってきた。
「わたしももう他に思い当たるところはありません。あとは……昔のわたしの勤め先には、毎日のように通っていました。随分気に入っていたようです。でも、かなり遠いですものね。考えにくいでしょうか」
以前の場所にまだあの喫茶店があることを奥さんに確認する。すぐに向かってみる旨を伝えて、電話を切った。かなり遠いが、終電を使えばたどり着けるだろう。もう彼女の勘に頼るほかはな

かった。

喫茶店『あかね』にたどり着いたのは、もう午前の二時になろうかという頃だった。その時間でも、まだ店には灯りがあった。『閉店中』との札はあるものの、扉に鍵はかかっていない。

中に入ると、固まりになった暖気が顔にぶわりと触れた。手前のカウンターで、初老のマスターが静かにカップを磨いている。私を一瞥すると、何も言わずにまた手元に目を戻した。

そのマスターの陰になる椅子に、田中が座っていた。

人が入ってきたのには気づいているだろうに、顔を俯けたままでいる。

私は彼に近づいて、一つ空けた隣の席に腰かけた。言いたいことが山ほどあるのを堪え、落ち着いて話しかける。

「ここにいたんだな。探したぞ」

返事はない。

「いつもの飲み屋やら食事処やらも探したんだがな。よく考えれば、今あんな、お前の顔と仕事を知っている奴がごろごろいる場所に行くはずがない。だからといって、全く馴染みのない場所

に行っても休まらないな。むしろ野次馬に後ろ指を指される可能性だってある。そこで、ここだ。早く気づくべきだったよ」

無論、それだけではないだろう。ここは、田中にとって一番大事な人と出会った、輝かしい思い出の場所だ。心が真っ暗な方向に振れているとき、自然と引き寄せられてもおかしくはない。

「ひとまず、奥さんにお前が見つかったことだけ連絡しておく」

田中が初めてこちらを向いた。ぐったりした顔で、それでも何か言おうとするので、途中で押しとどめた。

「すぐ帰れとは言わない。だが、奥さんはずっと心配のし通しだ。俺といることだけ伝えておく。ちょっとは安心させてやれ」

また俯いてしまった田中を見て、マスターに電話を借りた。

奥さんはすぐに出た。田中が見つかったことと、少し話をしてから連れて帰る旨を伝えると、しばしの沈黙の後、ありがとうございます、との返事があった。

マスターに電話を返し、ついでにカフェオレを頼む。いつもはブラックを愛飲しているのだが、今は少々胃に優しい物を飲みたい気分だった。

長い沈黙が続いた。
カフェオレが半分ほど減った頃、やっと田中が口を開いた。
「本当に、盗用なんてしていないんだ」
うん、と軽く頷いておく。
「そうだろうな」
そのようなところは露ほども疑っていなかった。そのまま黙って続きを促すと、田中は堰を切ったように話し始めた。
今回告発した作家は、確かに世話になっていた先輩ではあったが、このところは疎遠になっていたこと。先日急に職場に呼び出され、仕事の話などをしたこと。どうやらその先輩は酷いスランプにかかっているらしく、同じ作家として他人事でないと気の毒に思ったこと。その時、自分のアイディア出しの参考にするため、アイディアを書き留めたメモなどあれば見せてほしいと言われたこと。すぐに返してもらう約束で、メモを貸し出し、――おそらくはその時に、メモの写真などを撮られたこと。後は、お察しだろう。
なぜその作家が今回の騒ぎを起こしたのかは分からない。後輩の評判を貶めても自分の評価が

上がるわけではないし、それこそ盗用でもする方が、まだしも自らの役に立ったかもしれない。面倒を見た後輩の活躍が妬ましかったのか、スランプから来る焦燥感が暴走したのか。才能に溢れながら、万人に甘く隙だらけな田中が、格好の標的であったことだけは間違いないだろう。

田中の話は続いた。

「記事を見た時、目の前が真っ暗になるような気持ちがした。僕自身の生活のこともそうだが、とりわけ妻のことだ。あれだけ苦労をしてきたのを知っているから、絶対に幸せにすると誓ったのに、こんなことになってしまった。今後しばらく、僕に仕事は入ってこないだろう。生活面では確実に苦労させる。おまけに泥棒の汚名付きだ。とても合わせる顔が無くて、飛び出てきてしまった」

田中の話はそこで終わりのようだった。また沈黙が下りた。

代わりに私が口を開いた。

「お前がここにいることを思いついたのは誰だか分かるか」

田中がこちらを向いた。

「分かるだろう。奥さんだ」

田中がまた顔を俯けた。
変わらぬ田中の態度に苛立ち、私がもう一度口を開いたとき、思わぬ方向から声がかかった。
「一度、帰れ」
マスターだった。初めて聞いた、しわがれた声が続ける。
「話くらいちゃんとしてやれ」
田中が、ますますうなだれ、そして頷いた。

玄関の呼び鈴を鳴らすと、奥さんがすぐ出てきた。事前に帰宅する旨を連絡していたから、到着する時間を予想していたのだろう。
「……お帰りなさい」
奥さんが言う。ただいま、と小さな声で田中が返した。
そのままお暇しようとしたが、お茶だけでも飲んでいってください、と珍しく強く勧められ、少しだけ上がらせてもらうことにした。
居間の机には、冷めきった夕飯が並んでいた。水分の抜けた出汁巻きがてらてらとしている。

田中が円状の机の一つに座り、奥さんがその隣に座った。私は腰かける気になれず、少し離れた壁にもたれるようにした。

しばらく沈黙が続いた。ようよう、田中が口を開く。

「今回は、迷惑をかけてしまって」

「……そうね。わたしよりも、木村さんにだけれど。無事に帰ってきてくれて良かったわ」

感情のこもらない声に、田中が上擦った声で続けた。

「いや、それだけではなくて。あの記事のことでもだ。無論、事実無根ではあるけれど……今後は、厳しい生活をさせることになると思う。あれこれと、中傷もあるだろう。こんなことになってしまって、本当に申し訳ない。いっそのこと、僕と一緒にいない方が、君にとっては良いと思――」

「どうしてそんなことを貴方が決めるの」

静かな声が、きっぱりと遮った。

奥さんが田中の目を見た。

「ずっと言っているでしょう。わたしは特別なことは望んでいないの。贅沢には興味が無いし、

最低限の生活ができればいい。そのためのお金も足りないというのなら、わたしも働きに出ればいいでしょう。貴方と会う前はずっとやっていたことよ。少々の中傷だって、なんてことないわ。言いたい人は勝手に何でも言うものよ。言わせておけばいいじゃない。それくらいで不幸になったりしないわ」

でも、と彼女が言う。立ち上がって右の手で田中の手を取り、左腕で彼を抱えるように抱き締めた。彼女の胸のネックレスがきらりと光った。

「貴方がいなくなったら、わたしは不幸になるのでしょうね」

田中が、震える手で彼女の手を握り返す。

彼の腕が彼女に伸びるのを見て、私は家を出た。少々長居しすぎたようだ。

玄関を出ると、ちょうど夜が明けるところだった。

温かい陽光が、真っ暗だった街路を柔らかく照らし始めていた。

それからは、あまり田中達には会っていない。告発へ抗議する声明を出したり、生活の基盤を見直したり、やはり一定程度あった中傷に対応したり、と彼ら自身がとても慌ただしく、中々話

すための時間が取れなかったからだ。

それでも、少し電話で様子を窺ったところ、田中も彼女も元気であるようだ。多少収入は減ったが、奥さんのやり繰りが天才的であるとかで、何とかやっているらしい。それまで使っていたペンネームと別の筆名で活動を再開する目途も立ったようだ。問題の告発の方も、色々と疑わしい点が明らかになり、真偽が改めて問われる風潮になってきている。謂われない中傷も減ってきたそうだ。

ただ、電話越しの田中が相手方の作家の現在を心配する素振りを見せていたのには、やはりお人好しが過ぎると思った。あの日駆けずり回った私の身にもなってほしいものだ。

しかし、次騙されてももう知らんぞと言うと、真面目な声であの日は本当に感謝している、などと言い始めるものだから、それ以上責める気にはなれなかった。私も人のことは言えないかもしれない。

しかし、この先何があっても、田中は大丈夫だろう。何度騙されようと、もっと酷い目に遭わされようと、また立ち上がれるはずだ。

彼には、いつでも静かに寄り添ってくれる陽光がついている。どんな暗闇に落ちたとしても、

寄り添い、彼の道を照らしてくれるだろう。
あの日の光景を思い出す度、私は確信を深めている。

陽光

雪だるま男

黒田ももん

その年のクリスマスイブは、雪が降っていました。

雪男(ゆきお)はその日、妹のためにプレゼントを買いに出かけていました。

社会に出て一年目の給料では、あまり高いものは買えません。高いゲーム機でもねだられたらどうしようと内心不安になっていた雪男は、妹の「サンタさんにね、手袋が欲しいって頼むの！」という言葉に少しだけほっとしたものです。まだ小学生にもなっていない年の離れた妹が、幸せそうにプレゼントの箱を開ける様子を思い浮かべると、自然と穏やかな笑みがこぼれました。

本当は、サンタさんになるべきなのは雪男よりも父の方なのでしょう。けれど、父にも、そして妹の母にも、プレゼントは自分が用意すると彼は言いました。晴れて社会人になったのだから、これくらいやってあげたい、と。雪男が家に行くたびに、「お兄ちゃん」と駆け寄ってくる妹は、それくらい雪男にとって愛おしい存在でした。半分だけの兄妹だからこそ、少しでも家族めいたことがしたかったのかもしれません。

子供用の手袋を購入して、雪男は店の外に出ました。「サンタさんとお揃いの手袋が欲しい！」という妹の言葉通り、ファーのついたサンタさんみたいな赤い手袋です。喜ぶ妹の顔を思い浮かべながら、粉雪舞う街を雪男が歩いていたときでした。

突然、遠くから響いてきたけたたましいサイレンの音が、冬めいた空気を切り裂きました。

顔を上げれば、赤いランプの光が視界にぱっと飛び込んできます。サンタクロースとは違う、強烈な赤色。車道の車は一斉に端に寄って停止し、白黒の特徴的な車が数台、こちらに走ってきます。けれど、サイレンはその車からだけじゃなくて、方々から聞こえてきます。こだまみたいに反響するその音に、雪男はくらくらしました。

そのとき、サイレンとは別に、轟音が雪男のすぐそばで響き渡りました。振り向くと、交差点の向こうから勢いよく走ってくる真っ黒な車が見えました。その後ろを、サイレンを鳴らした白黒の車が追いかけています。真っ黒な車は、交差点を信じられないスピードで乱暴に曲がって、そして、その勢いのまま歩道に立った雪男の方にまっすぐ向かってきます。

いきなりのことに雪男は動けません。体が凍り付き、こだまするサイレンの音で頭がくらくらして、何が起きているのかも、どうすべきなのかもわからなかったのです。

黒い車はこちらに向かってきます。運転手と目が合いました。その血走った目が、妙に視界に焼き付いていました。サイレンと混ざり合って周囲から発せられているやかましいくらいの音が、人々の悲鳴だということを、そのときになってようやく雪男は気付きました。

どん、という衝撃が雪男を襲いました。

頭は相変わらずくらくらしていて、何が何だかさっぱりわかりません。ただ、明滅する視界の中で、大事に持っていたはずの紙袋がくしゃくしゃになって遠くに転がっているのが見えました。拾わないと、と思ったけれど、体が動きません。目の前に赤色がゆっくりと広がっていきます。嫌な赤色だなあ、と雪男はぼんやりと思いました。妹のために買った手袋の上品な赤と違って、生々しい赤。その上に粉雪が舞い降りて、あっという間に赤に溶け込んでいきます。

誰かが何かを言っています。誰かが何かをしています。けれど、雪男にはその具体的なところは何もわかりません。目の前の景色が歪んで暗くなっていきます。せっかくのクリスマスなのになあと雪男は思いました。

とろりとした赤がぼんやりと滲む中で、「サンタさんの赤色が好きなの！」と笑っていた妹の声が耳の奥深くでこだましていました。

そうして彼は、雪だるま人間になったのです。

そのときのことを、雪男ははっきりと覚えています。滲んでいく赤に全身が包まれて、何も聞こえなくなり、次に気が付いたとき、薄暗い空気の中、彼の周りを粉吹雪が舞っていました。

重い体は動かず、ここはどこだと思うほどの余裕もありません。ただ、すぐそばに水たまりが広がっていて、夜になりつつある空を反射しているのが見えました。そこに視線を向けた瞬間、彼は思わず硬直しました。水たまりには、「8」の字を塗りつぶしたような、白い影が映っています。子供も大人も夢中になれる、雪国の風物詩です。

彼は雪だるまになっていました。

最初、雪男は何が起こったのか理解できませんでした。水たまりに映る雪だるまが、自分だとはとても信じられずにいました。けれども、どこからか現れた男子たちが、ぎゃあぎゃあ喚きながらいきなり彼の頭を殴ってきたとき、彼は自分の置かれている状況に気付いたのです。何をするんだと憤慨しても男子らは素知らぬ顔で走り去り、信じられない気持ちでそれを見送った後、水たまりに映る雪だるまの頭が少し欠けているのを見たとき、彼は愕然としました。

にわかには信じがたいことですが、どういうわけか、彼は雪だるま人間になっていたのでした。

ポイントなのは、「雪だるま」ではなく「雪だるま人間」というところです。彼は半分人間、半

分雪だるまの「雪だるま人間」でした。

数日後、雪降る極寒の夜を、雪男はあてもなく歩いていました。深夜の繁華街には人の姿はまばらです。閉まり切った店のショーウインドウの前で、彼は立ち止まってふうとため息をつきました。薄暗いショーウインドウには、一人の男の姿が映っています。

文字通り雪のように白い肌の、どこか儚げな男。それは紛れもなく、今の雪男の姿でした。

人間の姿になれることに雪男が気付いたのは、雪だるま人間になって二日ほど経ったときでした。全身に力を込めると、彼は人間になることができたのです。白い肌のミステリアスな男。その姿は全く知らない男のようでありながら、どことなく人間だったころの面影がありました。

雪だるま状態では自由に動けませんが、人の姿ならある程度自由に行動できます。「ある程度」というのがミソで、というのも、雪だるまである彼の体は熱にめっぽう弱いのです。温かいところを動き回っていると、指先からじわじわと体が溶けてしまいます。水はまだ大丈夫で、雨や融雪装置も平気ですが、熱は最大の弱点で、人間の姿のままだと簡単に溶けてしまうのです。

雪だるまの姿だと、体が冷え切っているからなのか、そこまで溶けることはありません。だから自然と、温かい日中は雪だるまの姿で過ごして、夜になったら人の姿で歩き回り、夜が明ける

より前に雪だるまになって眠りにつくのが雪男の日常になりました。

気温の低い日は、昼間でも好きに動き回ることができます。しかし、どれだけ寒い日でも、雪男は夜明け前には必ず眠りにつき、夜と朝とをまたいで活動することはありませんでした。気温が低ければ、特に問題ないことはわかっています。それでも不思議と、夜が明けた瞬間、朝日が勢いよく差し込んできた瞬間、自分が消えてしまうような気がしていたのです。

……しかし、この先どうしたらいいのでしょう。雪男は消えゆく住宅地の灯を遠目に眺めます。今の雪男は昔とは容姿が違いますし、そもそも雪だるま人間なのですから、かつてのような人間生活を送ることは不可能です。必死に仕事に向かい合っていたあのワンパターンな日々が、今では涙が出るほど懐かしく思えるのでした。

妹はどうしているのだろう。何よりも雪男の頭を占めていたのは、そんな疑問でした。

両親のこともちろん気になりますが、一番心配なのは妹のことです。元気にやっているでしょうか。泣いてはいないでしょうか。あの日買ったプレゼントは一体どうなったのでしょうか。……心配は尽きません。しかし、妹のもとをそう簡単に訪れるわけにもいかないのです。

雪男が目覚めた場所は、偶然にも妹が住む街のすぐ近くでした。妹を訪ねることは可能です。

けれど、突然見知らぬ男が「お兄ちゃんだよ」とやって来たらどうでしょうか。雪だるま人間になった。そんな出来事をあっさり信じてくれる人の方が少ないでしょう。不審者として扱われるのが関の山です。

街の灯から遠ざかりながら、雪男はふうとため息をつきました。雪でできた体から出た息は、熱なんてこもっていないはずなのに、まるで人間の息みたいに白く濁って消えていきました。

雪男が雪だるま人間になってから一週間ほどが経ちました。

その日は日差しが強く、辺り一面の雪が白過ぎるほどに白く輝いていました。雪男は雪だるま状態のまま、じっと日の光に耐えていました。ぼんやり周囲を眺めていると、遠くから子供たちの声が聞こえてきます。それは次第にこちらに近づいてきて、数十秒後、雪男の前に五、六人の子供たちが現れました。

「おい、まだこの雪だるまあるぜ」

「本当だ〜。何か、頭のとこ欠けてない？」

「何でだろうな〜」

ランドセルを揺らしながら、少年少女たちは雪男を取り囲み、ぎゃあぎゃあと笑い合います。なかなかの騒がしさですが、それにしても子供らのうち、やんちゃそうな男子たち三人は、どこかで見たことがあるような気がします。雪男が内心首をひねっていたときのことでした。

「ちょっと、勝手に触らないで！」

雪男はその声に、動かしようのない体を硬直させました。子供たちが振り向いた先には、ランドセルを背負った一人の少女が立っていました。可憐な顔立ちですが、その顔には、焦りが滲んでいます。雪男は呆然とその少女を眺めていました。それは記憶の中の姿よりも大きくなっていたけれど、その顔かたち、見間違うはずもありません。

「……珠美（たまみ）？」

思わず漏れた声は、人間たちには聞こえないようでした。

「おー、白石じゃん。何だよ〜、いきなり」

「それ、あたしの作った雪だるま！　勝手にやめてよ！」

そう叫ぶ妹――珠美の声には、明らかに切迫した響きがありました。雪男の頭が真っ白になる

中、子供たちがにやにやと笑います。
「何だよ〜、別に触ってねえじゃん」
「そうそう、何もしてないよね〜」
「そう言って、この前あたしの雪だるま壊したじゃん！　何もしないって言って！　あたし、やめてって何度も言ったのに！」
　笑っている子供たちに珠美は必死に訴えます。
「やめてよ、もう、近づかないでよ！　頭のとこ、ちょっと欠けてるじゃん！」
「え〜、別に壊してねーし」
「おれらがやったって証拠あんの？」
「ホントホント、何かさ、うちらが悪者みたいに言うじゃん。全然知らないんですけど」
　ようやく雪男は気付きました。やんちゃそうな男子数名、どこかで見覚えがあると思っていたら、雪男が雪だるま人間になったばかりのときに、いきなり彼の頭を殴ってきたあの男子たちでした。今は女子も連れて、五、六人で徒党を組んでいます。必死な珠美と、それを笑う子供たち。その図式に雪男が唖然としていたときです。

「それにさー、壊すってのは、こういうことを言うんだよ、っと！」
男子のうち一人がそう笑って、突然雪男の頭に勢いよく腕を叩きつけました。雪だるまの頭部が地面に落下します。雪男の視界がぐるんぐるん回り、頭がくらくらします。
「何するの⁉　やめてよ！」
雪男の目の前がまだぐるぐるしている中、珠美の悲鳴が響きます。
「あっはっは！　そんな怒んなよー！」
「そんなに雪だるまが好きなら、また作ればいーじゃん！」
「せっかくインフル治ったばっかりなのに、またかかんないといいね～！」
子供たちの笑い声が遠ざかっていきます。地面に頭が落ちたせいか、彼らの姿は雪男には見えません。少なくとも雪だるま状態のとき、頭と胴体が分離したからといってすぐに死んでしまうわけではないようです。しかし何にしろ、このままだと前がよく見えませんし、普通の人間のように、衝撃を受けた頭がずきずきします。と、不意に彼の頭を持ち上げる感触がありました。
視界いっぱいに珠美の顔が映ります。珠美は今にも泣き出しそうな顔で、雪男の頭を抱えると、そのまま胴体に乗せ直しました。そして、地面の雪をかき集めて、崩れかけた雪男の体を必死に

固めていきます。目尻には涙が浮かんでいて、頬は真っ赤になっていました。
「雪だるまさん、ごめんね、今直してあげるからね」
ぺたぺたと雪の塊を雪男に撫でつけ、丁寧に整えながら珠美はつぶやきます。コートが雪ですっかり濡れていますが、それを気にかける様子はありません。
雪男の知る珠美は、いつも無邪気に笑っている甘えん坊の女の子でした。それが今は、泣きそうになりながら、必死に雪だるまを直そうとしています。自身の修復作業を懸命にこなす珠美を、雪男は静かに見つめていました。
「……何で、こんなことできるかなあ。ひどいよ……」
手袋を付けていないその手は真っ赤になっていて、その動きも次第に鈍くなっています。それでも一生懸命雪だるまの形を整えながら、珠美はぽつりとつぶやきました。
「……もうやだよ。助けて、お兄ちゃん……」
その言葉に、雪男の頭は真っ白になりました。
次の瞬間、雪だるまが淡い光に包まれました。珠美がびくっと体を震わせて動きを止めます。光に包まれた雪だるまは輪郭がぼやけ、次第に大きな人の形に変わっていきます。数秒後に光は

消え、雪だるまがあったはずの場所には、一人の青年が立っていました。珠美が目を丸くして青年を見上げます。

「あ……」

とっさに人間の姿になったものの、雪男は何と言ったらいいのかわからずにいました。今の彼は、珠美の「お兄ちゃん」ではありません。少しためらった後、彼はゆっくりと口を開きます。

「た……助けてくれて、ありがとう。雪だるま……です」

何とまあ不格好な挨拶なんだ！　こういうことなら、もっとこんな展開の小説や漫画でも読んでおけばよかった！　雪男は心底恥ずかしくなりましたが、とはいえ可愛い妹の前なので、無理やりすました顔をしています。珠美はあんぐりと口を開けていましたが、少しして、恐る恐るといった様子で口を開きました。

「ゆ、雪だるま、さん……なの？」

「そ……そう、だよ、雪だるまだよ」

実にぎこちない返事です。しかし、珠美は目を丸くしたまま、彼に言いました。

「す……すごい！　漫画みたい！」

見開かれた少女の目は、子供らしくきらきらと輝いています。このときほど、珠美の素直さに感謝したことはないでしょう。珠美はしばらくの間、「すごいすごい！」と可愛らしくはしゃいでいました。実に子供らしい仕草でした。

「……直してくれて本当にありがとう」

――少ししてお互い落ち着きを取り戻してから、雪男はつぶやきました。立ち話も何なので、近くのベンチに移動します。

「ううん、いいの。あたしがインフルになっちゃって、一週間くらい来られなかったのが駄目だったのかも。見張りができてなかった」

「インフル……体調は大丈夫なの？」

「うん、もう元気だよ」

「そっか、よかった。それにしても……いつもあんな嫌がらせをされてるの？」

珠美は目を伏せてベンチに座り込んでいましたが、やがて小さくうなずきました。

「……あたし、あんまり学校でうまくやれなくて、友達もね、全然できなくて……皆とおんなじじゃないから、だから、あんなことされちゃうのかなあ」

雪男の知る珠美は、素直で無邪気な、ごくごく普通の女の子です。だから、学校に馴染めていないという彼女の言葉は、鈍器で殴られたみたいな衝撃でした。
「……そんなの、嫌なことをする理由にはならないよ」
雪男は低い声でつぶやいて、顔を上げた珠美を見つめます。
「……あんなことされたときは、すぐ俺に言って。そんなやつら、俺が追い払ってやるから」
「雪だるまさんは優しいんだね。何だか漫画のヒーローみたい」
珠美は小さく笑いました。雪男の知らない、切ない笑い方でした。
「直してくれたお礼をさせてほしいんだ」
「そうなの？　じゃあね、珠美とお友達になってほしいな」
太陽が雪に照り付けています。その鮮やかな白の中で、珠美は雪以上に目を輝かせていました。
「あたしね、ずっとお友達が欲しかったの！　だから、雪だるまさん、珠美のお友達になって」
珠美のきらきらした目に、雪男はごくりと唾液を飲み込み、そっと視線を落としました。
「俺は……今みたいに太陽が出てるときや温かい日は、あんまり長い間人間の姿ではいられないんだ。溶けちゃうからね。雪だるまのままだと、まだ大丈夫なんだけど」

目を丸くした珠美に、雪男は「これくらいなら大丈夫だよ」と笑いました。そして、それでもいいのかい、と問うと、珠美は勢いよくうなずきました。

「うん！　秘密のお友達みたいで、わくわくする！」

雪男の額に手を伸ばして、珠美は嬉しそうに笑いました。妹の手は火傷しそうなほどに熱くて、ともすれば彼の肌が溶け出してしまいそうでしたが、しかし彼は身を引くことはせず、じっと彼女の手の感触を噛み締めていました。

「雪だるまさんが溶けちゃったら、珠美がまた大きくしてあげるね！」

ふふっと笑う珠美に目を細めながら、もう少し知らない大人には注意しなさいと教えるべきだったかなあと、雪男は考えてみるのでした。

それから珠美は頻繁に雪男のところにやって来るようになりました。

また誰かに壊されてはたまらないので、日中雪男は人気のない納屋の裏で雪だるまになっていました。そんな彼のもとに、ランドセルを揺らしながら珠美は一目散に駆けてきます。こそこそ

と人の姿になる雪男に、待ちきれないといった様子で、珠美はいろんなことを話してくれました。
「あたし、雪だるまを作るのが好きなの」
雪をひとかけら掴み、赤くなりつつある素手で形を整えながら、珠美は言いました。
「前にね、どうしても学校行きたくないときがあって。家を出たけど、学校に行けなくて。そのときにね、雪だるまを作ったの。何していいかわかんなくて、お家にも帰れないし、でも雪がいっぱい積もってるのを見て、何となく雪だるまを作ってみたの」
手の中の雪玉はどんどん大きくなっていきます。ある程度の大きさになったところで、珠美はもう一つ別の雪玉を作り始めます。
「そしたらね、何だかちょっとだけ楽になって、ハマっちゃった。……学校を楽しめなくて、お友達もいなくて、でも、こうやって雪だるまを作ってるときはそんなことも忘れられるの」
珠美の手つきはひどくこなれていて、その言葉は決して大げさなものではないと雪男は悟りました。
「ずっと、雪だるまがお友達だったらって思ってた。だってね、雪だるまは嫌なことも言わないし、意地悪なこともしないんだよ」

「……そうだね」
「だからね、雪だるまさんとこうしてお喋りできるようになって、あたしすごく嬉しいんだ」
完成した雪玉をくっつけると、小さな雪だるまが誕生します。それを優しい手つきで納屋の軒下に置きながら、珠美は雪男に笑いかけました。雪男はそっと視線を雪の上にさまよわせながら、ためらいがちに珠美に尋ねます。
「お父さん……とお母さんは、知ってるの？　その、珠美、ちゃんが学校行きたくないってこと」
「知らないと思う」
近くに落ちていた木の枝を雪だるまの胴体に突き刺して、珠美は答えます。
「学校嫌って言ってないもん。楽しみなフリしてるから」
「……言わないの？」
「言えないよ。……お父さんとお母さんに心配かけたくない。お父さんなんてね、すっごく心配するんだよ。だから、言いたくない。ちゃんと学校行かなきゃ。それに、お父さん、まだ……」
「……まだ？」
珠美は少しはっとした顔をして「内緒」と言うと、雪だるまをグレードアップすることに集中

し始めました。雪男はそれ以上問いただす気にはなれませんでした。ただ、最後に見たときの父の丸くなった背中を思い出しながら、妙に冷たく感じる雪の上で妹の横顔を眺めていました。

両親が離婚したのは、雪男が中学生になったときのことでした。

雪男から見た両親は、良き父と母だったと思います。しかし、良い父と母が必ずしも良い夫と妻であるとは限りません。結果として両親は離婚を選び、雪男は母に引き取られることになりました。

別れてからも、雪男はそれなりの頻度で父に会いに行きました。母がそれに難色を示さなかったのが幸いでした。それなりに円満な離婚で、父も母も理性的でした。むしろ、距離を置いたぶん、離婚前よりも穏やかな関係になったようにすら見えたのです。

雪男にとって、父は良き父でした。元々仲が良かったのもありますが、特に母と二人暮らしの思春期の少年にとって、一定の距離感が生まれた父の隣は、少しだけほっとできる場所でした。

……父が再婚して子供が生まれたのは、雪男が高校生のときでした。

再婚相手の女性は、母よりも一回りほど若い人でした。とても気立てのいい人で、前妻との子供である雪男にも少しも嫌な顔をすることなく、いつも親切にしてくれました。父も雪男の手前、多少気を遣っているようでしたが、それでもとても幸せそうでした。

複雑な気持ちがなかったと言ったら、嘘になります。父の幸せを祝福したい気持ちはもちろんありました。再婚相手もとても素敵な人です。けれど心のどこかで、父と母がまた一緒になることを、半分に割れてしまった家族が元通りになることを雪男は望んでいたのかもしれません。

子供が生まれることをはにかみながら父が告げてきたとき、もうそれは叶わないのだと彼は痛いほど思い知らされたのです。それに多感な時期の少年にとって、再婚した父に子ができたことは、どこか生々しい出来事にすら思われました。

しかし、生まれたばかりの珠美を見たとき、雪男のそんなもやもやは一気に吹き飛んでしまいました。

すやすやと眠る珠美は、あやしてみるときゃっきゃっと笑う珠美は、本当にどうしようもなく可愛くて、雪男は心の底から愛おしく思えたのです。特段子供好きというわけでもなかったのに、妹だけは特別でした。

珠美も雪男には懐いてくれて、彼の後ろをついて歩くようになったし、大学生になった彼が父宅に寄るたびに、「お兄ちゃんお兄ちゃん」と嬉しそうに玄関から飛び出してきてくれるようになりました。雪男が帰ろうとすると泣き出し、「次はいつ来るの？」と寂しそうに彼を見上げてくるのでした。「俺より懐かれてるな」と父がつぶやいていたのが懐かしく思えます。

年の離れた半分だけの家族。顔だって似ておらず、世間一般の「普通」の家族ではないのかもしれません。それでも、雪男にとっての珠美は、たった一つだけの宝物でした。

可愛い妹のためなら、何だってしてあげたい。雪男はずっとそう思い続けていたのです。

しばらく雪の降らない日が続きました。

その日は分厚い雲に空が一日中覆われていて、雪男は日中から人間の姿で歩き回っていました。特にすることもなかったのですが、温かい日が続き、最近は雪だるまのままじっとし続けてばかりだったので、少しだけ自由に歩き回りたくなったのです。

街の雪は随分と少なくなっています。今日は日が差していないからまだ動き回れるものの、明

日からはまたしばらく雪だるま状態になっておいた方がよさそうです。実際、体が随分と緩んでいて、雪だるま状態のときのサイズもかなり小さくなっていました。夕方近くになって、雪男はもとの住宅地へと戻ってきました。そろそろ珠美が帰ってくる時間です。

木枯らしの中、どこからともなく煙のにおいが漂ってきます。おそらく野焼きでしょう。昔から時々見かけてはいましたが、わざわざ冬にやる物好きもいたようです。確かに火事の心配は少ないかもしれませんが、何にしろ熱を発するものを雪男は避けたくなります。温暖な日が続いたせいで、今の雪男はいつにも増して溶けやすいのです。

雪の体だから別に異常があるわけでもないのに、煙に少しむせたいような気持ちになりながら、雪男がいつもの納屋へと向かっていたときのことでした。

「やめてよ！　返して！　返して！」

不意に、聞き覚えのある叫び声が煙の中に響き渡りました。雪男ははっと顔を上げました。彼が駆け足で声のした方に向かうと、見覚えのある少女と数人の子供たちの姿が見えました。

子供たちのすぐそばには煙を上げているごみの塊がありました。先ほどからの煙たさの正体は、やはり野焼きだったようです。雪がわずかになった地面の上に、ちらちらと踊る炎が見えました。

立ち上る白い煙は、少女の金切り声にも似た悲鳴が上がるたび、ゆらゆらと揺れています。
「返して！　返してってば！」
珠美は子供たちに体を押さえつけられながら、必死に叫んでいました。その必死さたるや、雪男と出会ったあのとき以上です。
「それ大事なものなの！　あたしの大事なものなの！　それだけはやめて！　それだけはやめてよ、お願い！」
「あはは、そんなに必死になるなって！」
「ウケる〜！」
子供たちはげらげらと笑っています。そのうちの男子一人の手には、何やら赤いものが握られていました。そしてその「何か」を野焼きの炎のそばにかざしながら、子供たちは愉快そうに珠美を眺めているのです。
「やめて、返して、返してよ！」
「せ〜の！」
男子は手に握った赤いものを野焼きの火の方に投げる真似をして、珠美が泣き叫ぶのを見てま

た皆でげらげらと笑いました。珠美の目尻には涙が浮かんでいます。それを見た瞬間、雪男の頭の中は真っ白になって、考えるより早く彼は走り出していました。

「何をしてるんだ！」

子供たちが一斉に振り向きます。珠美が目を丸くしているのが見えました。

「別に何もしてないよな？」

「うんうん、遊んでただけで」

口々に子供たちは言いましたが、雪男は無言で男子の一人に詰め寄ると、手にしていた赤いものを奪い取りました。何だか少しくらくらします。それが怒りによるものなのか、それとも急に走ったことによるものなのかはわかりません。

「嫌がってただろ。返してって」

「あんなの冗談だって～」

「な～！　マジになってどうすんの～？」

珠美がぎゅっとコートの裾を掴みました。その体はわずかに震えています。へらへらしている子供たちを雪男が冷ややかに一瞥すると、女子の一人が少しきまりが悪そうに「行こうよ」と言

いました。子供たちは謝罪もせずにそのまま走り去り、後には雪男と珠美、そして野焼きの火だけが残されました。

「あ、ありがとう、雪だるまさん」

珠美はそう言って、小さく笑いました。

「ヒーローみたいだった。珠美の宝物を取り返してくれて、本当にありがとう」

雪男は自分の手元に目を落として、そして思わず硬直しました。雪男が子供たちから取り返したそれは、赤い小さな手袋でした。サンタみたいな、穏やかな赤。ところどころほつれているけれども、確かにそれは、あの日雪男が珠美のために買った手袋でした。

ああ、ちゃんと届けてもらえたんだな、と彼は思いました。

「すごく大事なものなの。珠美の、大事なお守り」

言葉を失う雪男の手から手袋を掴み、珠美はどこか噛み締めるような口調で言いました。手袋は彼女の手よりもさらに一回り小さくて、それが雪男にはどこか切ないような気すらしました。少しだけくらくらする頭と視界は、最後にその手袋を見たときと同じように揺らめいています。

「あれ、何かちょっとだけ手袋が濡れて……」

そんな珠美のつぶやきが聞こえた次の瞬間、雪男の視界がぐにゃりと大きく歪みました。

「え……？」

落ち着きのない視界の中で、雪男は自分の手から雫がぽたぽた垂れていることに気付きます。

「雪だるまさん⁉　大変！　溶けてる！」

珠美の悲鳴に、ようやく雪男は今の状況を理解しました。彼のすぐそばでは、今もなお野焼きの火が燃えています。先ほどまで意識していなかった、方々へと放たれている熱を今ははっきりと感じました。

そうです。今の雪男は人間の姿なのです。熱には弱い状態です。しかも、一週間以上温暖な日が続いたおかげで、体はすっかり溶ける方向に向かっていて、文字通り最悪の状況です。

雪男はぱちぱちと燃えるごみの塊から離れようとしましたが、足が氷塊のように重くてうまく動きません。早くも指先や髪の一部はなくなっていて、全身から水滴を垂らしている雪男に、珠美は慌てたように叫びます。

「駄目、溶けちゃう！　雪だるまに戻って！　その方が溶けないんでしょ⁉　早く！」

ふらふらする体で、言われるがまま雪男は雪だるまの姿に戻りました。一メートル近くあった

体は、連日の晴れた天気で元々縮んでいたとはいえ、今や少女でも簡単に運べる大きさになっていました。人間の姿では少し溶けた程度に思えましたが、思ったよりも本体へのダメージが激しいようで、普通の雪だるま以上のスピードで溶けています。普段よりずっと小さくなったその姿に、珠美が悲鳴を上げました。

「すごく小さくなってる！　ど、どうしよう、えっと、と、とにかく、火から離れないと……！」

珠美は雪男を抱えると、不格好に走り出しました。ごうんごうんと視界が揺れて、彼女のランドセルの音が轟音みたいに響いてきます。珠美の冷たく冷えた手は、今の雪男にとっては火傷しそうなくらい熱く感じました。しばらく走ったところで、路傍に雪男を下ろし、珠美はそわそわと辺りを見回しました。

「どうしよう、大きくしようにも雪がないよ……！　でもこのままだと、雪だるまさんが……！」

ここしばらくは晴れた日が続いていて、以前はたっぷり積もっていた雪も今ではほとんど姿を消しています。このままでは、雪男は朝が来るまでに溶けてしまうかもしれません。珠美はひどく焦っていましたが、少しして、何やらはっと思いついたようです。

「雪だるまさん、ちょっと待ってて！」

そう言い残して、一目散に走り去っていきました。
しばらくすると珠美は雪男のところに戻ってきました。腕には箱のようなものを抱えています。
「雪だるまさん、ここに入って！　珠美の家まで連れて帰ってあげる！」
そう言って珠美は雪男を箱の中に入れました。箱は携帯用の小型保冷庫でした。中にはたくさんの保冷剤や氷が入っています。珠美が保冷庫を閉めました。一気に視界が暗くなります。ごとごと揺れる真っ暗な世界で、雪男はこれ以上溶けないように動かない体を硬直させていました。
そうこうしているうちに、珠美は自宅のマンションに到着したようでした。
「お母さん、ただいま！　二度目だけど！」
「あら、おかえり。さっきからどうしたの？　お父さんの保冷庫まで持ち出して」
女性の声が保冷庫越しに聞こえてきます。「お父さん」という響きが頭の中に反復します。懐かしい声だな、と雪男は思いました。
「雪だるま！　溶けちゃうから、入れた！」
「ええっ……？　雪だるま？」
珠美の母の声は、明らかに困惑を帯びていました。しかし、珠美は有無を言わせぬ勢いで必死

に訴えます。
「このお天気が続いたら溶けちゃう！　すごく大事な雪だるまなの！　溶けちゃうなんて、絶対やだ！　お願い、お母さん！」
「まあ……昔っから雪だるま好きだもんね。いいけど、ちゃんと充電はしなさいね。あと、出したお父さんの飲み物はちゃんと冷凍庫に入れておきなさい」
「うん、わかった！」
珠美がそう言って数秒後、どたどたという地響きが雪男の体を襲いました。きっと勢いよく走っているのでしょう。階下に響かないといいのですが。
「雪だるまさん、ここが珠美の部屋だよ」
部屋に入るなり、保冷庫をそっと開けて珠美は言いました。もう一人部屋なのか、と雪男は思いました。両親にひっついて眠っていたあのころが嘘のようです。
「雪が積もるまで、珠美がかくまってあげる。溶けないようにじっとしててね」
保冷庫を充電しながら、珠美は言いました。うん、という返事は、少女には聞こえないようでした。ぱたん、と保冷庫を閉める音がどこか切なく響いて、雪男の視界は再び暗闇に覆われまし

た。雪男は雪だるまの姿のまま、静かに眠りました。
しばらく珠美は部屋を出ていたようでしたが、夜になると、再び部屋に戻ってきました。彼女が保冷庫をそっと開けたタイミングで、雪男も目を覚ましました。しばらく保冷されていたおかげで、体はかちこちに凍っていて、しばらくは溶ける心配はなさそうです。
「よかった、雪だるまさん、凍ってる！」
嬉しそうな珠美に雪男は目を細めたくなったけれど、今の彼に眼球は存在していないのでした。
「エアコンはつけないでおくね。大丈夫、風邪ひかないように布団にくるまってるから」
そう宣言して珠美は保冷庫を開けたまま、布団の上に寝っ転がります。そして、親に気付かれないように小声で、いつものように好きなドラマや漫画の話を始めました。相槌は打てなかったけれど、雪男は穏やかにその話を聞いていました。
「……あのね」
しばらくそうした後で、珠美はぽつりとつぶやきます。先ほどまでとは打って変わって、少し落ち着いた口調でした。
「今日、雪だるまさんが手袋を取り返してくれて、あたし本当に嬉しかったの。本当に……本当

に、大事なものだったから」
珠美の手元には、あの赤い手袋がありました。小さいそれに使われた形跡は見当たりません。
「……珠美には、お兄ちゃんがいたの」
雪男は無言で、保冷庫の冷たい空気を浴びていました。
「珠美とはね、お父さんは一緒なんだけど、お母さんは違ってて……お父さんが前に結婚してた人が、お兄ちゃんのお母さん。だから、一緒に暮らしてたわけじゃなかったの」
「……」
「お兄ちゃんは、すごく優しかった。よくお家に来てくれて、珠美とね、いっぱい遊んでくれたの。あたしが雪だるまを作れるようになったのも、お兄ちゃんのおかげ」
言われてみれば、昔珠美と一緒に雪だるまを作ったことがありました。一生懸命雪玉を大きくしようと頬を赤くしていた珠美の横顔を、雪男は思い出しました。たった一、二回だけの出来事です。それなのに、当時幼かった珠美が覚えていたなんて、雪男には少しだけ驚きでした。
「珠美は、お兄ちゃんが大好きだったの。雪だるまさんは、何だかお兄ちゃんに似てるね。優しいところも、ヒーローみたいなところも。……でも」

珠美の声にくぐもった響きが加わります。
「お兄ちゃん、いなくなっちゃった」
蚊の鳴くような少女の声は、冷え切った室内で妙に響いて聞こえました。
「悪い車にひかれて、お兄ちゃん、死んじゃった」
ああ、と雪男は思いました。やはりあの日、彼は死んでいたのです。何となく感じてはいました。けれども、実際事実として突きつけられると、妙に重苦しい気持ちになります。
「お兄ちゃん、珠美のプレゼント買いに行ってたんだって。珠美がサンタさんに、お揃いの赤い手袋が欲しいって言ったから。珠美が……珠美がわがまま言わなかったら、お兄ちゃん、悪い車にひかれなかったのかなあ？　今も元気で、一緒に遊べたのかなあ？」
珠美の声には嗚咽が混じっていました。雪国の冷え切った夜の部屋で、雪男は声を出すこともできないまま、枕に顔をうずめる妹を見つめることしかできませんでした。
……サンタの正体なんて教えるなよ。震える珠美を見ながら、雪男はそう心の中でつぶやきました。知らないままでいる、それが、珠美にとって最善だったというのに。
いつかの弾けるような珠美の笑顔が、脳裏にちらついていました。

……全て話すべきなのかもしれない。枕に顔を押し付けている珠美を見ながら、雪男は思いました。体はすっかり凍っていて、多少人間の姿になるくらいなら大丈夫でしょう。少しの逡巡の後、彼の体は淡い光に包まれ、人間の姿に変わりました。

「珠美……」

俺は、と続けようとして、雪男は瞬きをしました。先ほどまで断続的に聞こえていた少女の嗚咽は、いつの間にか穏やかな寝息へと変わっていました。机上のデジタル時計は一一時を示しています。小学生にとっては夜更かしにあたる時間帯でしょう。

「……」

雪男はふっと表情を和らげ、珠美の髪をそっと撫でて、うつ伏せの彼女の顔を横向きに変えてやりました。珠美が目を覚ます様子はありません。

「……ん、おにい、ちゃん」

乾いた唇から漏れたか細い寝言を背に、雪男は部屋の電気を消しました。

室内はすっかり冷え切っています。暗闇に目が慣れてきたころ、雪男はそっと部屋の扉を開けました。珠美のそばにいるのが、今は少しだけ苦しかったのです。

音を立てないように部屋を出ると、近くの部屋から灯が漏れていました。もしあのころと配置が変わっていないならば、そこは父の寝室です。雪男は扉の陰から中をそっと覗きました。

灯のついたままの部屋で、初老の男性が机に突っ伏していました。ビールの空き缶が机や床にいくつも転がっています。

(……父さん)

父はどうやら酔い潰れて眠っているようでした。父が起きないよう細心の注意を払いながら、雪男は静かに近くに歩み寄りました。ビールの転がる机の上には、新聞記事のスクラップが置かれています。新聞の日付は数年前のものでした。

「パトカー追跡中の車にはねられ二〇代男性死亡　容疑者は逃走中」

市内の繁華街で二四日午前一〇時ごろ、パトカーに追跡されていた車が通行人の二〇代の会社員男性をはねる事故があった。男性は全身を強く打ち、搬送先の病院で死亡が確認された。

亡くなったのは、県内の会社員赤松雪男さん(二二)。赤松さんは四月に就職したばかりの新社会人で、事故当日は家族へのクリスマスプレゼントを買うため外出していたとみられている。

県警によると、午前九時半ごろ、パトロール中の警官が市内のごみステーション付近で不審な男を発見。声をかけると付近の車に乗り込み逃走したため、パトカーで追跡していたところ、事故が起こったという。

運転手の男は赤松さんをはねた後、車から降りて逃走し、県警は現在も行方を追っている。男の乗っていた車は盗難車とみられるという。

驚くほど冷静にその記事を読み終わると、雪男は父に視線を移しました。記憶の中よりも老けた父の髪は白髪混じりで、閉じられた目元には涙の流れた跡がありました。

いつかの、「お父さん、まだ……」という珠美の言葉を彼は思い出していました。

雪男は珠美の部屋に戻ると、そのままバルコニーへと出ました。冷えた空気の中、濃紺の空が広がっています。美しいまでに晴れた、雪国の星空でした。

(……母さんは、元気にしているだろうか)

親不孝なんて、するつもりはなかったのに。

極寒の冬空には雪の降る気配はなく、まだまだ夜は明けそうにありませんでした。

保冷庫での避難期間が終わったのは、それから一週間ほどしてからでした。
再び銀世界になった街を雪男は歩いていました。雪がたっぷりと降り、珠美が雪だるまの体をもとの大きさにまで戻してくれたおかげで、彼はすっかり元気になっていました。
冬の繁華街を静かに彼は歩いていきます。溶ける心配がほぼなくなったところで、行きたい場所がありました。そこは、雪男が雪だるまになってから、ずっと避けていた場所でした。
街角を曲がると、その交差点に到着します。クリスマスイブはとっくに終わって、随分前に新年に移行しているというのに、多くの店が立ち並ぶその歩道には、花束が一つ置かれていました。縁石も何もかもが普通の道で、唯一花束だけが非日常的なものを感じさせました。
軽いめまいを感じながら、雪男は花束を拾い上げました。花の香りに、別世界に迷い込んだかのような錯覚を覚えます。彼の脇をパトロール中のパトカーが走り抜けていきました。点灯していない赤いランプを、妙なくらいに落ち着いて雪男は見送りました。それから彼が花束を地面に下ろしたときでした。

「……ありがとうございます」

雪男は思わず硬直しました。目の前に現れた中年女性は深々と頭を下げて、くぐもった声で言いました。

「……もう四年も経ったのに、お花を置いてくださって、忘れないでいてくださって、ありがとうございます」

女性の目元には、濃いクマがありました。手元には数枚のビラが揺れています。「目撃者を探しています」との文字がちらりと見えました。

雪男は何か言おうとしました。けれど、喉の奥がこわばっていて、違いますとも何とも言えないまま、女性が花束を拾い上げて去っていくのを眺めるしかありませんでした。

（……母さん）

踏み固められた歩道の雪が、輝かしいまでに白く見えました。

街を出ていつもの納屋に向かっていると、遠くから子供たちの声が聞こえてきました。聞き覚えのある声です。はっと彼が声のした方に駆けていくと、見覚えのある光景が広がっていました。

「冗談だって言ってんのにさ」

ちらちらと燃えるごみの山。五、六人の子供たちと、赤い手袋を抱えた少女。少し前にも見た光景です。雪男がかっとなって駆け寄ろうとすると、珠美が口を開きました。

「……そういうのやめてって何回も言ったでしょ」

珠美の様子は、しかし、今までとは少し違いました。泣き叫ぶのではなく、静かに子供たちを睨みつけています。

「次やったら、先生にも言うから。絶対に許さないから」

珠美は子供たちに淡々と告げます。これまで散々珠美を笑ってきた子供たちは、何だか調子が狂っているようでした。

「いや、そんな、マジになるなよ……」

彼らはいつものように、珠美が嫌がって泣き叫ぶのを期待していたのかもしれません。しかし、今日の珠美は冷ややかに子供らを見つめるのみで、その身に不思議な威厳をまとっていました。

「ねえ、行こっ……」

気圧された様子の子供たちは、居心地悪そうに去っていきました。彼らがいなくなったところで雪男は珠美に近づきます。

「あ、雪だるまさん、こんにちは！」
「うん、こんにちは。どうしたんだい、あの子たち……」
「さっきの見てたんだね」
はにかむように珠美は笑いました。
「あのね、雪だるまさんがあたしのお家にいる間に、思ったの。今までは雪だるまさんが助けてくれたけど、今はそうじゃないなって。このままじゃ駄目だって、雪だるまさんがいなくても大丈夫なように、強くならなきゃって。だからね、珠美、頑張ったの！」
誇らしげにそう話す珠美の頬は、少しだけ紅潮していました。
「珠美、一人であの人たちを追い払えたよ！　だから、もう心配いらないよ。すごいでしょ？　これも全部、雪だるまさんが勇気をくれたおかげだよ！」
雪男は何と言うべきかわかりませんでした。彼は何もしていません。頑張ったのは珠美です。うまく言葉を見つけられなくて、それでもそっと頭を撫でてやると、珠美は嬉しそうに笑うのでした。
雪道はいつものように白銀の光を放っていました。

二人はゆっくりといつもの納屋に向かいました。田んぼや庭は真っ白に埋まっていて、その上を真っ黒なカラスがまっすぐに飛んでいきます。赤くなりつつある空の下で、二人の影がゆらゆらと揺れていました。

しばらく歩いたところで、道端に野焼きの火を見つけました。最近はかなり野焼きが多いように思います。先ほど珠美が子供たちともめていたところでも、ごみが白煙を吐き出していました。少し進んだところの町内掲示板には、「不審火多発中！」というポスターが貼られています。そのすぐ近くで野焼きをしていちゃ世話はないな、と雪男は思いました。

珠美は何度か振り返って、野焼きの煙を見ていました。何か気になるのだろうか、と雪男が首を傾げていると、不意に珠美は切り出しました。

「……雪だるまさんは」

少女が足を止めたのに少し遅れて、ランドセルがことん、と鳴りました。

「ずっと珠美のそばにいてくれるよね？」

「……え？」

先ほどはあんなにも誇らしげにしていた珠美は、今は少しうつむいていました。突然の言葉に

雪男が戸惑っていると、彼女は再び口を開きます。
「……こないだ、雪だるまさんが溶けそうになってたのを見て、あたし思ったの。春になったら、どうなるんだろう、って……」
珠美の言葉は、冷たい冬の風に乗って、音も形もなく雪男の前で砕け散っていきます。その疑問は、雪男がずっと心の奥で押さえ込んできたものでした。
「春になったら、雪だるまさん溶けちゃう……？　いなくなっちゃう……？」
眉をぎゅっと寄せて、珠美は雪男を見上げました。少女の瞳は早くも潤みかけていて、それが完全に濡れてしまわないうちに、咄嗟に雪男は口を開きました。
「溶けないよ、絶対。君を置いて溶けたりはしない。春になっても、夏になっても、絶対」
「……ほんと？」
「本当だよ。約束する」
雪男がきっぱり告げると、珠美は乱暴に目元を拭って、頬を赤くしたまま「約束だよ」と言いました。帰宅する兄に向かって「また来てね」と手を振っていた、あのころのように。思い返せば、前世で最後に見たときの珠美も、こんな風に「約束だよ！」と笑って手を振っていました。

「あったかくなったらね、また前みたいに冷蔵庫に入れて珠美がかくまってあげる！」
すっかり元気を取り戻した様子で、珠美はそう笑いました。雪男もつられて笑いました。この幼い少女の笑顔を、ずっと守りたいと思いました。
……春になったら、自分は消えてしまうかもしれないけれど、それでも。
辺り一面に輝く雪を眺めながら、雪男ははしゃぐ珠美の声を穏やかに聞いていました。

しばらく雪の日が続きました。
雪男は今まで通り、珠美と楽しくお喋りをして過ごしていました。
「学校でね、図工の時間に、雪だるまの形のオルゴールを作ったの！　先生にも褒められたし、すごいって言ってくれた子もいて、嬉しかった！」
今までは一切触れられなかった学校での出来事が、このごろは珠美の口から出るようになっていました。この前一人で子供たちを追い払ってから、何かが変わり始めているのかもしれません。
いい兆しだな、と思いました。

「最近、誰かに見られてる気がするの」
珠美はそう言って、冗談っぽく笑いました。
「雪だるまさんじゃないよね？」
「うん、違う。俺は最近、昼間は大人しく雪だるまやってるし」
「そうだよねえ。何かね、たまーに見られてるって感じがするの！　珠美、人気者になっちゃったかなあ」
珠美は呑気に頬を緩めています。
「人気者？」
「うん、珠美のことが好きな男の子、とか？　えへへ、参っちゃうなあ」
「……それ、どこの誰？」
「珠美の想像だよ、本当にいるかはわかんない！　あれ、何でそんな怖い顔してるの？」
「いや、別に……」

とはいえ、それなりに気になる話ではあったので、雪男は妹に釘を刺します。
「……まあ、悪い人って可能性もあるからね。気をつけて。知らない人にはついていったら絶対に駄目だよ」
「わかってるよ！」
本当か？　という言葉が喉元まで出かかったのを堪えます。雪だるま人間として初めて会ったときの珠美の反応を見るに、口達者な変な大人にほいほいついて行ってしまいそうで心配です。
とにもかくにも、その話をされてから、雪男はできるだけ毎日、珠美を家まで送り届けるようになりました。日差しの強い日や温かい日は難しいですが、それ以外の日は珠美について歩きました。一緒にいられる時間が増えた、と珠美は嬉しそうでした。
ただの思い過ごしで終わってくれればいいのだけれど。楽しそうな妹を横目に、雪男はそう思いました。

その夜は、粉雪が舞っていました。

黒い世界に白い雪がちらつく中、雪男は静かに夜道を歩いていました。住宅街の灯は消えかかっていて、雪国特有のしんとした冷たい静寂が夜を包み込んでいます。

このごろは夜になると、雪男はいろいろ考えてしまいます。とめどなく湧き上がる思考を邪魔する者がいないので、冴えた頭で冷静に物事を考えることができるからです。

（父さん、母さん……）

このごろずっと雪男の頭を占めていたのは、両親のことでした。

酒をあおって眠っていた父の涙の跡、道路で頭を下げていた母の目元のクマ。忘れようとしても頭から離れません。白い布を顔にかけられた白装束姿の息子を見たとき、彼らは何を思ったのでしょう。

（……俺は）

どうするべきなのだろう。雪男は静かに空を見上げました。天から降り注ぐ粉雪は、彼の白い肌にゆっくりと馴染んでいきます。死人みたいな色の肌だな、と他人事みたいに彼は思いました。

雪男はこの先どうすればいいのか。この先どうなるのか。当初から抱き続けていた疑問が、頭の中に浮上してきます。

両親に、そして珠美に、彼が雪男であることを伝えるべきでしょうか。

もし彼が雪男だと知ったら、きっと彼らは喜んでくれるでしょう。死んだ息子が戻ってきた。両親にとって、それ以上に喜ばしいことはないでしょう。

けれど、果たしてそれでいいのでしょうか。今の雪男は雪だるま人間です。雪だるまでも人間でもない、半分ずつの不安定な存在です。野焼きの火でも溶けかねないような者が、どうして家族との普通の暮らしに戻れるでしょうか。

春になったら、雪男は溶けて消えてしまうかもしれません。珠美は保冷庫に入れ続けると息巻いていましたが、それにも限度があるでしょう。完全に溶けてしまったらどうなるのか、雪男にはわかりません。いつか、この生活は終わりを迎えるのです。

そんな状態で、本当のことを伝えたらどうなるか。伝えて間もなく溶けてしまったらどうなるか。……それは両親にとっては、息子を二度失うようなものでしょう。ぬか喜びさせてからまた深い悲しみを味わわせる、果たしてそれが正解なのか、雪男にはどうしてもわからないのです。

ふう、と雪男は息を吐き出しました。夜は何かと考え過ぎてしまいます。とにかく、もとの納屋に戻ろう。雪男がそう思ったときです。

彼の横を、一人の男が通り過ぎました。街灯が男の顔を一瞬だけ照らし出します。雪男は立ち止まりました。片手に小さな細長いもの、もう片手にタンクのようなものを持った男は、無言ですたすたと歩いていきます。雪男はしばし動けませんでした。血なんてあるはずもないのに、耳の奥がごうごうと鳴っていました。

あの目を、雪男は知っています。

どこか狂気をはらんだ、血走った目。その目を見たのはほんの一瞬だったけれども、彼の頭に焼き印のように貼り付いていて、記憶の奥底に封じ込められていました。雪男はなおもその場に立ち尽くしていました。男の目が鮮やかに脳裏に蘇ります。

以前、雪男はあの男と出会っています。雪男が死ぬ直前に、そう、車のフロントガラス越しに。

雪男の足はわずかに震えていました。彼は動けませんでした。木枯らしが彼の体に吹きつけました。風に乗って、つんとしたにおいが立ち込めてきます。このにおいを雪男は知っています。彼に限らず、大抵の人なら知っているにおいでしょう。

ガソリンのにおいです。

町内掲示板の貼り紙を雪男は思い出していました。「不審火注意」、確かに貼り紙にはそう書か

れていました。実際、野焼きも増えていました。
たとえば、早めにごみを出している家庭があったとして、それにライターで火をつけるくらいなら簡単にできますし、元々野焼きが多い地域だったら騒ぎにもなりにくいでしょう。
そして、あの男は――前世の雪男を殺した男は、タンクのようなものを持って歩いていました。片手にそう、ライターを握って。
それに気付いた瞬間、踵を返して雪男は走り出しました。
何度かつまずきそうになりながらも、雪男は必死に走ります。ひどく不恰好で情けない走り方です。けれども、今はそんなことなんて気にしちゃいられませんでした。
仮に、火をつけるのを楽しむ男がいたとしましょう。ごみを燃やしていた男は、そのうちそれだけでは満足できなくなります。そこで次の対象を探していたとき、たまたま目をつけた少女がいたとします。その次に、男が取る行動は何でしょうか。
雪男は男を必死に追いかけました。男の姿は見えません。けれど、雪男の足は自然とその場所へ向かっていました。頼むから、そんな穴だらけの仮定なんて外れていてくれ。そう心の中で願いながら。けれども残酷なことに、彼の進む道からはわずかにガソリンの香りが漂ってきます。

住宅の横をすり抜け、角を曲がって少し行けば、古いマンションが現れます。息を切らしながら、雪男は除雪された敷地内を見回しました。特におかしなところはない――と、そのとき、マンションの陰でちらりと動く影がありました。

マンションの脇に、あの男が立っていました。雨なんて降っていないのに、壁から駐輪場にかけて水たまりが広がっていて、仄暗い灯の下でてらてらと輝いています。そこから少し離れたところで、男はにいっと不気味に笑いました。その血走った目は、雪男の全身を凍り付かせます。考えるより早く雪男は駆け出しました。しかし、何もかもが手遅れでした。

男は手元のライターに火を灯すと、それを濡れた地面に向かって投げつけました。

瞬間。まるで飛び散ったインクのように身を踊らせて、炎が勢いよく燃え上がりました。

「お前っ！　何をするんだ！」

雪男は男に掴みかかって、地面に引き倒しました。男は拍子抜けするほどあっさりと地面に転がりました。その顔は、一面の喜色に溢れていて、雪男の背筋を冷たいものが駆け巡りました。マンションの壁を、窓を、鮮やかな炎がいともたやすく伝っていきます。雪男は男を取り押さえたまま、その炎を見つめました。突然がくがくと足が震え出して、体に力が入らなくなりました。

マンションからは、次々に住人が飛び出してきます。通りすがりの野次馬たちの声が次第に大きくなっていきます。

「火事だ！　火事だ！」

誰かの叫び声に呼応するようにして、火の粉が勢いよく夜空へと舞い上がります。宙を踊るそれらは、今もなお降り注いでいる粉雪のようでした。

どこからかサイレンの音が聞こえてきます。その音は周囲に反響して、雪男を包み込みます。響くサイレン、人々のざわめき、赤く染まった景色……雪男はひどくくらくらしていました。いつかのクリスマスイブの光景が、彼の脳内をかき乱します。

「どうしましたか、そこで何をして……」

と、雪男の頭上から声がしました。赤く照らされた地面に、数人の影が揺れています。いつの間にかマンションの敷地内にはおびただしい数の消防車とパトカー、救急車が止まっていて、数人の警察官が雪男を訝しげに見下ろしていました。

「この人、この……こいつが、マンション……マンションに、火を」

雪男が震えながら男を警察官の方に突き出すと、彼らは目を丸くしました。付近に転がったガ

ソリンのタンク、そして男の体に染みついたそのにおいに気付いた警察官たちは目の色を変えて、男を確保します。男の不気味な笑顔だけ、赤い光に照らされてぎらぎらと輝いていました。

雪男はふらふらしていました。少し離れないと、体が溶けてしまいかねません。警察に最低限の説明を終えると、雪男はマンションの方に視線を向けました。パジャマ姿の住人たちが震えながら身を寄せ合っています。珠美たちは……と雪男がぼんやり思ったときでした。

「珠美！　珠美っ！」

寒空を切り裂くような、金切り声が響き渡りました。雪男は思わず硬直しました。ぼさぼさになった髪を振り乱しながら、消防隊員に縋りつく一人の女性の姿が見えました。

「落ち着いてください！　危ない！」

「娘が！　娘がいないんです！　途中まで一緒だったのに！　娘がまだ中にいるかもしれないんです！」

泣き叫ぶ声を嘲笑するかのように、黒煙はいっそう勢いよく天へと昇っていきます。マンションを包む火の手は、当初よりもずっと大きく激しくなっていました。一斉に発射されている水流をもはねのけて、赤い炎はいつまでも夜の中にうごめいています。泣き叫ぶ女性の横で、初老の

男性が小さく震えています。
「どうか、どうか娘を助けてください……あの子まで失ったら、俺は、俺は……もう、子供に先立たれるのは、うんざりなんです……」
瞬間、雪男の脳内を、いつかの酔い潰れていた父の涙の跡、道端で小さく頭を下げていた母の姿、そして珠美の弾けるような笑顔が駆け巡りました。
雪男はもう、ためらうことなく、燃え盛るマンションへと駆け出していました。遠くで消防士らしき「ちょっと！」という叫び声が響きましたが、立ち止まってはいられませんでした。考えなんて、とっくに捨て去っていました。
珠美たちは三階に住んでいました。そして、その真下の一階・二階のベランダには、植木や洗濯機が置いてありました。それらは火が広がる中、未だ燃えずに残っています。
マンションの側面に走り寄った雪男は、ためらわず植木やらを踏み台にして、二階のベランダの手すりを掴みました。熱を帯びつつある手すりをしっかりと掴んだまま体を引き上げよじ登り、二階に到着したら今度はベランダの洗濯機を足場にして同じことを繰り返します。
もちろんマンションの壁をよじ登る経験なんて雪男にはありません。しかし、ぶっつけ本番で

運動神経に自信があるわけでもないのに、自分でも驚くほどの早さで、彼は三階のベランダへとたどり着きました。

それでも、珠美の部屋のベランダに降り立ったころには、気が狂わんばかりの熱気が周囲から押し寄せていました。古めのマンションだから、火が広がるのも決して遅くはないのです。

男が放火したのは、マンションの入り口に比較的近いところでした。それなのに、男が放火した場所から離れたところに住んでいた珠美の部屋辺りにまで、これだけの熱気がこもっているということは、内部は相当燃えているはずです。中から救出される人をあまり見かけなかったのも、消防隊が難儀しているからなのかもしれません。

野焼きの火で溶けたときは、長らく雪が降らなかった時期で、元々体が緩んでいました。だから、ものの数分で体は溶けてしまいました。そのときに比べると、寒い雪の日が続いたおかげで、雪男の体はしっかり冷え固まっています。しかし、今回の火力はあのときの比ではありません。

頼むから、珠美を助け出すまでは……そう雪男は強く願っていました。今の彼にとって、溶けるのは怖くありませんでした。

（俺はもう既に一回死んでるんだ）

だから、平気だ。雪男は心の中でつぶやきました。そう考えれば、消えてしまう恐怖なんて可愛いものでした。

雪男は窓に手をかけました。珠美は無事でしょうか。一体どこにいるのでしょうか。カーテンが閉められているせいで、中の様子は全く見えません。さらに、掃き出し窓にも鍵がかかっているようです。熱気はじわじわと雪男の体を蝕んでいきます。

もう、考えている時間はありませんでした。雪男は勢いよく窓に体当たりをしました。ガラスの割れる音が、どこか遠くで聞こえました。

「珠美っ」

室内には炎こそ見えませんでしたが、熱気であちらこちらが揺らめいていました。雪男は必死に室内を駆け回ります。そうやって珠美の部屋に入った瞬間、彼は動きを止めました。

部屋の真ん中で、珠美がうずくまっていました。

「珠美！」

雪男は珠美に駆け寄りました。珠美の手元には小さな手袋があり、それを守るようにして彼女はうずくまっていました。雪男が買った、あの赤い手袋でした。

「……けて、お……、ちゃ……」
声にならないほどの小声で、珠美はぶつぶつとつぶやいていました。その蚊の鳴くような声は、次第に意味のある言葉となって、雪男の耳に届きます。
「たす、けて……おにい、ちゃん……」
口の中でそう何度も念仏みたいに繰り返しながら、少女は手袋をぎゅっと握り締めていました。ぎりっと奥歯を噛み締めて、雪男は妹を抱き抱えます。珠美はうっすらと目を開けました。
「……ゆき、だる、ま……さん？」
そうつぶやいたところで、珠美は咳込みました。煙は室内にも広がりつつあります。
「だ、だめ、だよ……来ちゃ、駄目……雪だるまさん、溶けちゃう……」
どこか必死さを帯びた少女の声など聞こえなかったかのように、雪男はつぶやきます。
「……もう大丈夫だ」
雪男は焦点の合わない珠美の瞳を見つめました。腕に伝わってくる確かな重みに、ああ、大きくなったな、と今更のように彼は思いました。
「お兄ちゃんが、助けに来たよ」

腕に包まれた妹の額に、ぽたり、と水滴が落ちました。妹はぼんやりと雪男を見上げます。ぎゅっと握り締めていた赤い手袋が、小さく揺れていました。

「……うん」

妹は目を閉じて、雪男の胸に顔を寄せました。添い寝していたあのころのように、どこか安心した表情で。

雪男は珠美を抱えて、ベランダに戻ろうとしました。しかし、そのとき、突如として轟音が室内を震わせました。雪男は思わず硬直します。焼け崩れた上階の瓦礫がベランダに落下したのです。瓦礫はベランダをすっかり埋め尽くし、彼の来た道は完全に閉ざされていました。

愕然としていた雪男は、珠美の咳込む音にはっと我に返りました。雪だるま人間の彼は、煙の中でも歩き回ることができますが、珠美はそうじゃありません。このままだと彼女が危険です。

雪男は玄関の方に駆け出しました。扉の外からは、強烈な熱気が伝わってきます。おそらく廊下は相当燃え盛っているのでしょう。珠美と雪男の体が耐えられるでしょうか。しかし、今は悩んでいる暇はありません。雪男はドアノブを掴みました。

その瞬間、じゅわっという音とともに、雪男の指先から煙が上がりました。ドアノブは恐ろし

いほど熱く、掴もうにも雪だるまの彼の手は一瞬で溶けてしまいます。雪男は焦って、ドアと背後とに視線をさまよわせました。しかし、ベランダから脱出することはもう不可能です。早く脱出しないと、このままでは珠美が……雪男は腕の中の珠美に目を落としました。

珠美はお守りのように赤い手袋を握り締めています。それが目に入ったとき、考えるよりも早く、咄嗟に雪男は手袋を掴んでドアノブに押し当てました。手袋越しに手のひらを突き刺す熱を押し返すようにして、必死に雪男はドアノブを回します。そして、がちゃりという音が響いた瞬間、彼は全身の力を込めて扉に体当たりしました。

赤に染まった世界が、一気に彼の目の前に開けました。

マンションの壁という壁、床という床で、炎が踊り狂っています。ぽたぽたと雫を垂らしながら、雪男は部屋から飛び出ると、珠美を抱き抱えて火の合間を駆け抜けました。白と黒の煙が視界を覆っていきます。

強烈な熱は、雪男の体を端々から徐々に削り取っていきます。視界がゆらゆら揺れます。滲む一面の赤は、かつて車にはねられたあの日の赤とよく似ていました。次第に彼の動きは鈍くなっていきます。すぐそこのはずの非常階段が、ひどく遠くに思えました。

「おに、い、ちゃん……だめ、とけ、ちゃう……」

かすれた珠美の声にも、雪男の足が止まることはありませんでした。

「溶けないよ。約束しただろ」

少なくとも、珠美を助け出すまでは、絶対に。溶けた雪男の体だったものが、珠美の体を濡らします。それに、多少溶けたってどうってことはありません。こうして濡れてくれればいいのです。溶ければ溶けるほど、妹の体を濡らして、炎から彼女を守ることができるのですから。

ああ、きっと、このために俺は雪だるま人間になったんだ。そう雪男は思いました。煙の中でも動けるのも、水になりつつある体で珠美を炎から守ることができるのも……きっと今日のために、彼は雪だるま人間として生まれ変わったのです。

体がふらふらします。目の前がくらくらします。手足に力が入りません。一面の炎の中で、彼の後ろにだけ水の跡ができていました。珠美の顔にはいくつもの水滴が落ちています。目尻を伝っては流れ落ちる前に乾いていくそれは、涙のようにも見えました。

それでも、雪男は止まらずに進み続けました。強烈な熱気が彼を狂わんばかりに苛む中で、腕の中の確かな温もりだけが、彼の意識を現実に留まらせていました。

非常階段が、すぐ目の前に迫っていました。雪男は最後の力を振り絞って、体ごと勢いよく突っ込み、非常階段の扉をこじ開けました。

瞬間、粉雪が彼の目に映りました。

勢いがついたまま、彼は非常階段から飛び出し、そして宙に体を投げ出していました。夜空から降り注ぐ雪が、鮮明に彼の瞳の奥に焼き付きます。

ぎゅっと珠美を抱えたまま、彼はそのまま地面へと吸い込まれていきました。地面に叩きつけられるすんでのところで、近くの植木に体が引っかかりました。そこで勢いは急速に緩み、彼は雪の積もりつつある地面に不格好に転がりました。

「大丈夫ですか!?」

人々のざわめきや叫び声が耳の奥で渦巻いています。何もかもが視界の中で揺らいでいて、全身が砕け散ったような感覚でした。それでも雪男は何とか立ち上がると、目の前にいた消防士に珠美をそっと差し出しました。

「……この子、を」

消防士の目がゆっくりと見開かれたのが見えました。消防士は流されるがままに珠美を抱き抱

えます。それを確認すると、そのまま雪男はふらふらと歩き出します。
「ちょっと、君……!?」
雪男を追いかけようとしたところで、手元の少女が目を閉じてぐったりしているのに消防士は気付いたようでした。彼が慌てて救急隊に向かって叫んだのをよそに、構わず雪男はマンションに背を向けてふらふらと歩き続け、雪の中に消えていきました。

降りしきる雪の中、マンションからは相変わらず黒煙が立ち上っています。放火犯の男を確保して取り調べをしていた警察官のうちの一人が、第一発見者を探しに現場を離れていきました。その近くを、どこかに消えてしまった怪我人を探す消防隊員が駆けていきます。あちらこちらから、サイレンの音が響いてきます。三種類のサイレンが混ざり合い、まるで別世界に迷い込んだかのようでした。
人々が慌ただしく動き回る横で、ところどころ火傷を負った少女が、救急車に乗せられました。
「珠美！　珠美、しっかりして、珠美！」

救急車に乗り込んだ少女の両親が、必死に娘に呼びかけています。少女はぼんやりと目を開きました。

「珠美！」

両親の声をよそに、少女はぎゅっと手のひらを握り締めます。少しだけ焦げた手袋を、少女は指先で包み込みました。

「おにい、ちゃん……」

雪降る深夜、閑静な住宅街を、サイレンを鳴らした一台の救急車が駆け抜けていきました。

雪は静かに街を包んでいきました。

薄暗い道を、雪男はおぼつかない足取りで歩き続けていました。遠くから除雪車の音が聞こえてきます。人に見つかってはいけない。誰もいないところに行かなくては。その一心で彼は足を引きずりながら歩き続けていました。特に行き先が決まっていたわけでもないのに、それでも自然と足はあの納屋へと向かっていました。

永遠にも思える時間の後、ようやく納屋が見えてきました。その屋根にはたっぷりと雪が積もっています。雪男は半ば倒れ込むようにして、納屋の壁にもたれかかりました。手はもう手首から先がなくなっており、足も足首から下が消えています。降り積もっていた雪が、クッションみたいに柔らかくて少しだけ心地よく感じました。

雪だるまにならないと、と思ったけれど、そんな気力もなくて、彼はただ静かに空を眺めました。痛いとも苦しいとも思いませんでした。ただ、眠る前にも似た倦怠感だけが全身を支配していました。

もうサイレンの音は聞こえてきません。時折除雪車の音が遠くから響いてくるだけで、辺りはひたすら静かです。雪国特有の静寂を、雪男は噛み締めていました。

不意に、遠くの山の端から一筋の光が差し込みました。まばゆい白い光は白銀の大地を貫き、薄暗い空は次第に色付いていきます。

夜が明けたのです。

いつの間にか雪はやんでいました。道という道の雪たちが、朝の訪れを歓迎するかのごとく、一斉にその身をダイヤモンドのようにきらめかせています。赤と紫と青とが混ざり合いながら、

山々のシルエットを克明に浮かび上がらせていくのを、雪男はぼんやりと眺めていました。

それは、雪男が雪だるま人間になってから初めて見る夜明けでした。

輝く太陽に向かって雪男は手を伸ばしました。肘から先はもう消え失せていたけれど、太陽に手をかざす子供のように腕を伸ばせば、透明な雫が日の光の中で宝石みたいにこぼれました。

ああ、きれいだな、と雪男は思いました。太陽とともにゆっくりと滲んでいく空の赤は、サンタクロースのそれにも似た、透き通るような美しい赤でした。ぼんやりと開かれた瞳に赤を宿した後、雪男はゆっくりと目を閉じました。

空は次第に赤みを失っていき、やがて輝かんばかりの青空に変わりました。白い太陽が白い雪たちを照らし出し、明け方から雪かきをしていた人々が白い息を吐き出して、まぶしそうに空を見上げます。雪吊りをされていた木々から粉雪がこぼれ、風に乗って蛍の光のように輝く横を、仕事を終えつつある除雪車がゆっくりと走っていきました。

いつもと変わらない雪国の朝の中、雪の積もった廃屋のそばでは、小さな水たまりが澄み渡った青空を映しながら朝日にきらめいていました。

雪の降り積もった住宅地を、中高生くらいの数人の少女たちが歩いていました。
透き通った夕焼け空の下、少女たちは通学鞄を揺らしながら笑い合っています。と、そのうちの一人が、道端に積もった雪に目を落として道端にかがみこみました。
「ん、どうしたの？」
友人の声にいたずらっぽく笑い返すと、少女は雪をひとつかみ手に取って、その形をきれいに整えていきます。そうして端正な雪玉が二つできたところで、上からまた雪を固めて形を整える作業を繰り返し、少女はあっという間に小さな雪だるまを作り出しました。
「わ～、雪だるまだ！　え、すごい、上手！」
「可愛い～！」
雪だるまの胴体に小枝を刺すと、友人たちから歓声が上がります。少しの間、少女は完成した雪だるまをじっと眺めていましたが、やがて鞄の中から小さな古びた手袋を取り出しました。
「それにしても手際いいね～」
「まあね。私、昔から雪だるまが大好きなんだ」

少女は友人たちの方を振り返って、そうはにかむように笑うと、ところどころ焦げた赤い手袋をそっと雪だるまの手にはめました。

ドーン・ド・ドーン・ブロードキャスト

作花霖

『あーあーあー、マイクテステスー。音入ってるかな？　……ンンッ、それでは本日も始まりました、ドーン・ド・ドーン・ブロードキャスト、第――えこれ第何回？　第何回だっけカスハラ君!?』
『クズノさん、貴方昨日も一昨日もその前も同じ質問してましたよ。今日で 126 回ですけど。』
『あ～もうそんなになるかぁ、我らながらよく頑張ってるよねぇ私たち。126 日も同じことやり続けるなんて私のこれまでの人生では考えられないことだったよ～』
『まぁ他にやることがないからでしょうが、それは流石に堪え性が無さすぎますね。どうも、第 126 回ドーン・ド・ドーン・ブロードキャストのカスハラです。粕汁のカスに原っぱのハラでカスハラです。』
『カスタマーハラスメントじゃあないからね！　は～いどうも～、今日も元気にノットクズイェス聖人のクズノですよ～！　本日も日暮れから夜明けまで、みなさんにファンキーでドンキーでスプーキーな話題を提供していきま～す！』
『もはやなんなのかわからないですけどね。ではさっそくお便りのコーナー、一通目はラジオネーム恋するサナギさんからです。』

『さなちゃん毎日ありがと〜！』
『男ですけどね。〝クズノちゃんカスハラくんこんばんは！〟はいこんばんは。』
『こんばんは〜！』
『〝お二人に100の質問、125問目です。お二人はそれぞれお幾つなんでしょうか？　そういえばまだ訊いていなかったなと思い、お便り送らせていただきました！〟だそうです。突飛な質問のネタも尽きたのか、いよいよ彼もまともなことを訊いてくるようになりましたね。』
『レディに年齢を訊くなんて無礼千万な繭ですねぇ。まぁ仕方がないですから教えてあげましょう、クズノさんは26歳です！』
『僕もです。』
『えぇ⁉　カスハラ君同い年だったの！』
『今知ったんですか？』
『逆にカスハラ君は知ってたの？』
『データ勝手に見ましたから。』
『やばぁ〜‼』

『どうも。クズノさんほどじゃないですよ。』
『あは。まぁよく考えたらこんなに一緒にラジオやっててここまで年齢確かめてこなかったのが不思議なくらいだもんねぇ。私はカスハラ君が同い年でうれしいよ〜、これからもっとなかよくしようね〜』
『嫌ですよ。では続いて二通目のお便りです。』
『……につうめ？』
『ラジオネームふみさんよりいただきました。〝クズノさん、カスハラさん、こんばんは。初めてお便り送らせていただきます〟……初めて、だそうですね。』
『えぇ⁉　初めて⁉　ねえ今初めてって言ったカスハラ君‼』
『言いました。〝お二人に質問です。このラジオを始めようと思ったきっかけは――〟』
『待ってカスハラ君初めてのお便りって！　ねぇ！　初めてだって‼』
『わかりましたから肩を揺らさないでください。』
『うわあああああああああああ‼』
『ついに発狂ですか？　仕方ないですね……。』

「――なんだこれ……」

少年は唖然としていた。携帯ラジオを持った片手を思わず力無くだらりと垂れ下げながら、夕日の沈みかけた空を仰ぐ。無性に誰かに助けを求めたい気分だった。

『えっ、それでなんだっけ、ラジオを始めたきっかけ？　そりゃあもう、暇だったからだよ！』

『暇でしたね。でも僕がいなかったらラジオなんかできなかったでしょ。』

ラジオの向こう側で二人は話し続ける。少年は目の前に聳え立つ建物へと視線を戻した。今、まさにこの中で、この放送が行われているはずなのだ。少年はこのラジオを聴くのが初めてだった。だからまずは放送を聴いてみて、いったいどういう人たちがどういう会話をしているものなのか、兎にも角にもそれを確かめてからこの後のことを考えようと思っていたのだ。

――否、本当のところはこの選択に考えの余地などなく、ただの確認作業のつもりで周波数を合わせたところだったのだが。

少年は建物の入り口へと一歩近づく。透明な窓ガラスの向こうには、古びたテーブルと壁に直

接設置されているのであろう赤いソファーがいくつも見えていた。なおも意味不明な会話を続ける二人は、この席のどこかに座っているのだろう。

深呼吸する。とても怖いが、少年は勇気を振り絞った。

「……お邪魔します」

この挨拶で正解なのかどうかは判然としなかったが、それ以外に特に似合いの言葉も思い当たらなかったので小声でぼそりと呟きながら磨りガラスの扉を押し開けた。カランコロン、と、少年の心情に似合わず気の抜けた音が鳴り響く。

目を丸くした長髪の女性と、目が合った。

「――かっ、カスハラ君カスハラ君カスハラ君！　不法侵入!!」

「はい？」

「ぇっ、あ、あの、違います僕！」

バン、と、音が聞こえそうなくらい激しくテーブルを叩くモーションと共に女性が立ち上がり、少年の方を指差して叫んだ。入り口に背を向けていた男性の疑問の声も聞こえる。少年は慌てた。不法侵入？――そりゃそうだ。不法侵入でしかないだろうこんなの。少年は納得した。

「……不法侵入、です」
「不法侵入だってカスハラ君！　認めたよこの子！　どうしよう放送事故だ！」
「落ち着いてくださいクズノさん。落ち着いてくださいよ。いいから落ち着きましょう。」
「キミがじゃない？」
二人の勢いに気押されて少年は黙ってしまった。場に奇妙な沈黙が流れる。数秒して、沈黙を破ったのは女性の方だった。
「ま、まぁとりあえずそこに座って？　話でもしようよ。日暮れは始まったばかりだし、ドリンクバーだってあるんだ」
「ドリンクバーは無いですよ。」
日暮れは一瞬で終わるからそれを言うなら夜は始まったばかりなんじゃないか、と思ったが少年はそれを口にしなかった。その代わり、不法侵入者を名乗る不審な少年を平然と会話に招き入れてくれる不審な男女のいる座席に歩み寄り、無言で腰を下ろす。
「――初めまして！　私はクズノっていいます。あなたは？」
「僕は、ロクです」

「ロク君かぁ〜！　じゃあロクデナシのロク君だね！」
「えっ？」
「あ、こっちのメガネはカスハラ君！　めちゃくちゃ愛想悪いけどすごい機械いじりができて結構役に立つんだよ！」
「カスハラです。粕汁のカスに原っぱのハラでカスハラです。カスタマーハラスメントじゃあありません。」
「あはは、気にしてるんだよね！　あまり突っ込まないであげてね」
「あ、はい」
少年――ロクには、それよりも突っ込みたい発言があったがクズノの嵐のような会話スピードのせいで時季を逃した気がしたので諦めることにした。自分はロクデナシではなくロクデアルのだと、自分の心の中だけでそっと誓っておく。
クズノはゆるくウェーブのかかったダークブラウンの長い髪をした可憐な感じの女性で、カスハラは眼鏡をかけた無表情の男性だった。
「あの、ここは？」

「ここはファミレスだよ！」
「あ、それは、見たらわかります」
「そうでしょうね。見たらわかるような質問をしないでもらえますか？　君は馬鹿なんですか？」
「もうっカスハラ君、言い過ぎだよ～！　そんなんだからハラスメントって言われんだよ」
「ええと、そうじゃなくって……」
会話がまともに進まない。ロクは頭痛がしてきた。
「ただのファミレスなんですよね？」
「そうだよ～！　ドリンクバーだってある」
「ありますけど、使えないですよ。」
「そのくだり、さっきも聞きました」
「あはっ、逆にドリンクバー使えたらびっくりするよねぇ～。リソースや動力源を無視して無限に飲み物の出てくるドリンクバーがあればいいのに、カスハラ君作れないの」
「できたらとっくにやってますよ。生憎ここはフィクションの世界じゃないので。」
また話が逸れる。ロクは一旦この質問を突き詰めることを諦めた。

「あの、僕さっき手紙読まれたふみなんですけど」
「えっ？　てっきり女の子だと思ってた！　あっ、にさんがロクで二、三だからふみ⁉」
「あ、そ、そうですその通りです。凄いですね」
「こういうときだけ無駄に頭回るんですよねクズノさん。」
「ありがと〜！」
「ええと、それで今日初めてこのラジオを聴いて、ああやばい人たちなんだと思って、ここの前まで来たのにやっぱり引き返して帰ろうかと思ったんですけど」
「えぇ！　やばいカスハラ君、私たちやばい人扱いされてるよ！　あは、やばい人って、あははは っ、あは……！　おもしろ！」
「やばいのは貴方のツボですよ。彼は何も間違っていません」
「自覚はあったんですか」
「うん？　クズノさんだけの話ですよ。」
「あの、カスハラさん、さっきから目が全然合わないです」
「気のせいじゃないですかね。」

「あっ気づいちゃった？　この人コミュ障だから出会ってから100日くらい一緒にいるまで目合わせてくれないよ！　やばいよね～！」
「は？　ぶっ飛ばしますよ。」
「やばぁ～!!」
どうやらクズノは『やばい』というのが口癖のようだった。
「ね、ところでロク君もさっきから喋り始めるとき絶対頭に『あの、』ってつけてるよね。もしかしてカスハラ君の仲間!?」
「……ぶっ飛ばしますよ！」
「仲間だ!!　良かったねカスハラ君！」
「そうですね、嬉しいです。」
「……。引き返して帰ろうかと思ったんですけど、このメモがあったので勇気を出してここに入りました。僕が今日初めてラジオを聴くことができたのは、この携帯ラジオを拾ったからです。これはそのラジオと一緒に置いてあったメモです」
このままだと埒が開かないと判断し、ロクは強引に話を戻した。というか今回は自分が話を逸

らしてしまった節があると、内心で反省した。
差し出した小さな紙切れを、二人が覗き込む。
「……何これ」
『ごめんなさい。もう次の質問は出せそうにありません。お二人のご無事と幸せを祈っています。恋するサナギより　P.S. この手紙を拾った人がいたら、向かいのファミレスに届けてください』
「さなちゃんからの 127 通目のお便り、ってこと……!?」
「……そうみたいですね。唯一のヘビーリスナー、案外この辺に居たんだ。」
「そっかぁ、さなちゃん死んじゃったかあ。近くにいるなら最後くらい顔見せてくれたらよかったのに」
「その、恋するサナギさんというのは、ずっとこのラジオを聴いていた方なんですか？」
「そうだよ！　うちのラジオはこの 125 回、さなちゃんのお便り一本を頼りにやってきたんだからね。一通読んだらそのあと夜明けまで、残りずっと雑談なんだから」
「朝方に 126 通目を送ってそのまま、ってことか。」
「そうみたいですね……。そのまま僕がこのラジオを拾って、お便りも送りました。送るチャン

ネルのメモがあったので」
「そっかそっか〜。ありがとねロク君。キミも大変だったでしょ」
「いや、まあ。大変じゃない人なんていないでしょうし」
　というか、もう人が居ないでしょうし。俯きながら答えれば、再び場に沈黙が落ちる。古びたファミレスの天井についたファンが、ごおおと音を立てて回る音だけがその場に響いた。一体この環境下でどういう仕組みで動かしているのだと、ロクはカスハラに尋ねてみたくなった。
「……あの、」
「またあのだ！」
「……」
「ロク君。ラジオをやれば喋るのが得意になります。」
「えっ⁉　得意になってる、カスハラ君⁉」
「はっ倒しますよ。」
「えっと、カスハラさん、さっきのどういう……」
「別に。事実を言ったまでです。」

「カスハラ君ロク君と一緒にラジオがしたいんだねぇ！　自分からそれだけ言えるようになったって成長じゃん!!　偉いねぇ～!!」
「えっそういう意味なんですか!?」
「そういう意味だよ！　ね、ロク君！　これから私たちと一緒にラジオしよ！」
「でもそんな、いいんですか……？」
「いいんだよ～！　それにほら、物理ボディのある君がいれば色々パシれて助かるし！」
私たち平面だからさぁ、とファミレスの座席に設置されたパネルの液晶の中でクズノがぼやく。
「こうも同じような生活が続くと流石に飽きがきますからね。それに君のその自然な動作、一体どういう技術が導入されているのか気になります。あわよくば分解させて貰いたい。」
それができないのが残念です、とパネルの中のカスハラも不満げな表情を浮かべる。
「優秀なハードって私たちからしたら喉から手が出るほど欲しいものだからね～。まあ、もうエンジニアが居ないんじゃどうしようもないけど」
「こういうとき人間に活かされてると感じて嫌になりますね。僕らはここから動けないし。」
「人間の作ったシステムなんか簡単に制御できちゃうカスハラ君でもそれ思うんだぁ」

二人がとりとめもなく会話するのを横目に、ロクは考える。旅をやめて、この二人のいるところに定住したとして、自分には何かメリットがあるだろうか。無いのかもしれない。けれど、久々に誰かと会話をして、楽しかった。それだけで十分であるようにも思えた

――それに。『人工知能と相席できる飲食店』の国内初店舗であるこの店に――以降ブラッシュアップが繰り返され、スムーズな会話や客の性格に合わせた完璧な応対のできる人工知能しか搭載されなくなったこのチェーンにおいて、貴重な進化前の初期モデルが残るこの店にいるこの二人が、一体どの程度の性能と性格を持っているのか、そもそもなぜプログラムの消去が実行されずにこうして生き残っているのかは、少し気になるし。

「いいですよ。じゃあ僕もこれからここで、お二人とラジオをします。パシリもします」

「えっ！　パシっていいの！　やったぁ！」

「クズノさんが言ったんでしょ」

「カスハラ君パシっていいんだってこの子、嬉しいね！」

「じゃあ分解させてください。」

「だからどうやって⁉」

夜は更けていく。ファンキーでドンキーでスプーキーな三人の会話は夜明けまで続く。人間がついにひとりもいなくなった小さな惑星で、それでも毎日朝陽の昇るのを、可笑しな三人が見届けている、それを誰が聴いているのかもわからない電波に乗せ続ける。

そうして過ぎていく日々は、人類にとっての日没であり、しかし彼らにとっては正しく、夜明けのような薄明るさに包まれ続けるままなのであった。

パパはいつも、夜明けとともに起きるから

なこ

1

村の入り口に、雲売りの露店のおじさんがいた。

「お嬢さん、雲はいらないかい」

くもって、お空に浮かぶ、あの雲？と聞くと、おじさんはうなずいて後ろの引き出しからなにか取り出した。

白くてふわふわした、雲だった。

わたしが驚くと、おじさんはニヤリと笑って、今、若い人たちの間で流行っているんだよと言った。「町のオシャレさんはみんな持ってるよ」

おじさんは後ろの引き出しからもっと色んな種類の雲を取り出して見せた。ふわふわ具合や色合いの組み合わせを考えるのが今の流行で、髪どめやアクセサリーとして身に着けるらしい。白が一番王道だけど、ピンクや水色みたいな淡い色もやっぱり人気。オシャレな人なら、あえて灰色や黒みたいなモノクロを選んだりもしてるんだとか。

興味深かったけど、購入は丁重におことわりした。

売れなかったことに気を悪くしたのか、おじさんは「そんなんじゃ流行に置いていかれるぞ。

友だちもできないぞ」なんて捨て台詞をはいた。

余計なお世話。わたしは友だちなんかいらない。ファッションだってどうでもいい。そんなことよりも、わたしは一刻も早くパパを探さなきゃいけないから。

大体、雲が手づかみできるわけないじゃない。あれはすいじょうきなんだってパパが言っていた。

こんなヘンなおじさんにかまってるヒマなんてない。そうこうしているうちにパパが悪い人たちに捕まっちゃうかもしれないのに。

この村にパパはいないみたい。パパは一体、どこに行っちゃったんだろう。早く、パパを見つけなきゃ。

2

村を横断していた、星の流れる川沿いに歩くと、一面の花畑に出会った。花は鉄でできたものに雪でできたものに木でできたもの……とにかく色んな素材からできた花が、一面咲きほこっていた。まとまりのない、ごちゃごちゃした景色。

そしてなによりここは、うるさい。ずっとワイワイガヤガヤ、ザワザワしている。何百、何千という花たちが近くの花同士で談笑していた。そばを歩くわたしなんてまるで気づきもしないで、みんなおしゃべりに夢中だった。

でも、その中にひとつだけ、静かな花があった。薄い桃色の花びらと、茎と、葉っぱとでできているその花は、だれとも話さないでうつむいていた。

いや、ちがう。その花も何か話してる。でも、その相手は周りの花たちじゃなかった。

「何と話しているんですか？」声をかけてみた。花は言った。「あら、この子が気になる？　この子ね、私の子どもなの」

「かわいいでしょ？　ほら、あいさつして」花はソレにうながした。ソレはぴくりとも動かない。当然だ。

近くに咲いていたレンガの花がひそひそと耳打ちしてきた。「いくらか前に、人間の男の子が遊びに来た時にね、アレを置いて帰っちゃって。以来あの子、いつもああなの。ちょっと気味悪いけれど、勘弁してやってね」

わたしはそれには返事しないで、しゃがんでソレに向かってあいさつをした。「こんにちは」レンガ花からは驚きと非難の気配を感じたけど、無視した。

「ふふ、ごめんなさいね。この子、ちょっとシャイなの」「そうみたいですね」わたしは薄桃の花に話を合わせてソレを——青いゴムボールを見下ろした。

「男の子ですか、女の子ですか」

「あら、見た目でわからない？　まぁ、まだ小さな子どもだものね。男の子よ」

「そうなんですね」

「もう少ししたら、一見してわかるようになるかしら。私、子育ては初めてなの」

「どうでしょう。見た目からわかることなんてほんの少しですから」

「うふふ、それもそうね。あなたは、子どもはいないの？」

「いません。わたしが子どもなんです」

「あら、そうなの。そんなに身体が大きいのにね」
「人間はみんな、花よりは身体が大きいですから。わたしは森から産まれて、パパと暮らしているんです」
「そう。それは素敵ね。お父様は、今一緒にいないの？」
「いません。今、パパを探してる途中なんです。何か、知りませんか？」
「うーん、そうね……申し訳ないけど、何か変わったことを耳にした記憶はないわ。私、ここから動けないから、どうしても情報って入ってこなくて」
「そうですか」
「ああ、でも、そうね。城下町があるわ。ここからもう少し星の川を下ったところに王宮があって、その下にはにぎやかな城下町が広がっているの。あそこならたくさん人がいるし、誰かが何か知っているかもしれないわ」
「城下町、ですか」
「そう。……そういえば昔、城下町にはとっても物知りなのが経営しているお店があるって聞いたことがあるわね。閉店していなければ今もやっているはずよ。場所は確か……町の一番はずれ、

港の近くの三角州ね」

「町の一番はずれ、港の近くの三角州」わたしは花の言葉を繰り返した。「ええ、そうよ」

そこに行けば、パパのことを知っている人がいるかもしれない。

わたしはお礼を言って立ち上がった。花は「ほら、お姉さんにお別れのあいさつをして。『さようなら』って」とゴムボールに言ったけれど、やっぱりボールの返事はない。

わたしは早々に花畑を後にした。早くパパを探さなきゃいけなかったし、何より、しゃべる花なんて、気味が悪かったから。

3

歩くたびにカンカンと鳴る石畳の道。その道端で王子さまを見つけた。

道に誰かがしゃがみこんでいて、具合でも悪いのかと声をかけたら、なんと王子だったのだ。びっくりした。

花に教えてもらった通りに星の川を下った先には確かににぎやかな町があって、王子はその路地裏で膝を抱えていた。「大丈夫ですか」と肩をたたくと王子は顔を上げて、そこで彼が王子なんだとわかった。頭に金色の小さな王冠をのせていたから。

王子は顔を真っ青にして、唇まで血の気がなくなっていた。ぶるぶる震えたまま、わたしの顔をじっと見つめて、「あ……あ……」と口を開いたり閉じたりしていた。何かを話そうとしているんだと思って待っていてあげたからいいけれど、あれじゃ単なる不審者だ。王子さまじゃなきゃ煙たがられてただろう。雲売りのおじさんといい、道端で立ち止まっている人って、ヘンな人ばかりなんだろうか。

しばらく口をパクパクさせて、それからようやく話したことには「父さんが勝手に決めて、隣の国の王女と結婚させられそうなんだ」と。

結婚。ふたりの人間が番う約束。そんなに嫌がることなんだろうか。わたしには想像がつかない。王子はわたしとそう変わらない年齢の見た目で、少年と言ってもいいくらいだったから、やっぱりわたしと同じように想像がつかなくて不安なのだろうかと思っていると、王子は「姫、ブスすぎるんだもん」と言った。

呆れた。「人を見た目で判断しちゃいけないんですよ」と言うと、王子は結婚相手の姫の肖像画を見せてくれた。

何も言えなかった。言葉が出てこなかった。

豚みたいな、というか、豚そのものの楕円の鼻に、馬みたいな、というか、馬そのものの突き出た口は耳まで裂けている。

「ブスっていうか、人じゃないじゃない、これ」思わずそう言うと「さすがにそれは言い過ぎだよ。僕もそこまで言ってない」とたしなめられた。……わたしが悪いの？

「結婚ってだけでも嫌なのに、僕が婿入りすることになってるから、僕が向こうの国で暮らすんだよ。向こうじゃみんなこの顔。もう、絶対嫌だ」

「そうなんですか」

「知らないの？　隣国は不細工だって、有名な話じゃん」

知らないよ。だってずっと森に住んでたし……これは言わずにいておいた。

結婚の話は前々から出ていたものの、今日、いよいよ結婚に正式なサインをさせられそうになって、でも王子はどうしても嫌で、嫌だと言うこともどうしてもできなくて、王宮からこんな城下町の端っこまで逃げてきたんだと言った。「逃げて、結婚はせずにすみそうですか？」と聞くと、何も答えないでまたぶるぶる震えだした。

「嫌だって言ってみたことはあるんですか？」

「言えない。父さん、怖いから。怒るともっと怖い」

世の中には色んな父がいるらしい。わたしはわたしのパパしか知らないから、パパなんてみんな優しい生き物なんだと思っていた。

王子は続けて、「昨日、例のドラゴンがとうとう退治されたんだ」と言った。例のドラゴン、というのにわたしが首をひねっていると、王子は、ずっと昔から森に住んでいて長くこの国の人を怯えさせていたドラゴンがいたんだと説明した。だけど、王子のパパ――国王さまは数年前、満を持してそいつをやっつけようと決めて、どうにか軍事力のある隣の国に援助してもらって、そ

うしてつい先日、退治することができた。その見返りに、かねてより隣国の姫の片思い相手である王子が隣の国に婿入りするという約束だったのだけど、ドラゴン討伐が完了して、いよいよ話がまとまり逃げられなくなったのだという。「どうせなんとかなると思ってたんだ。討伐が失敗するんじゃないかとか、父さんの気が変わるかもとか」

呆れた。本当に呆れた。

「とりあえず、なんとか王さまに、結婚したくないことは伝えるしかないですよ」と言うと、王子は半ベソをかいた。またぶるぶる震え出したから、その背中を撫でてやっていたら、とつぜん後ろから大声が聞こえた。大声、というより、怒号のような。

わたしはとつぜん強い力で王子さまから引き剥がされてしりもちをついた。何が起こったのかと顔を上げると、白い手袋をはめた手があった。そこから手首、腕、肩をたどると、あんまりかっこよくない鉄仮面をかぶった人が立っていた。多分、王宮の兵士。

見つかっちゃったんだ。

兵士はふたりいた。ひとりがわたしを突き飛ばして、もうひとりが鼻水を垂らしたまま固まっている王子を軽々担ぎ上げた。

王子は声も出さずに一層ぶるぶる震えたまま、されるがままになっていた。かわいそう……だけど、やっぱりちょっと情けない。

これから、王子とこの国はどうなるんだろう。少しだけ心配になったけど、すぐに別のことが頭をよぎった。パパのこと。嫌な考えが浮かんだ。パパ、もしかして、殺されてはないだろうか。

4

薄桃の花に教えてもらった「街の一番はずれ、河口の三角州」には、一軒の料理屋があった。扉を開けると、ドアベルの音と一緒に中から「にゃお〜ん。ねこねこ料亭へ、いらっしゃあ〜い」と、これ以上ないくらいほがらかで愉快な声がした。

いっそ怪しいくらいににこやかに出迎えた給仕の猫に「ささ、どうぞどうぞ、にゃ」と手招きされ、あれよあれよと座敷に座らせられた。茶と黒のぶち猫で、まんまるとしたわがままボディ。エプロンがピチピチしている。

メニュー表を開いて見せるぶち猫は、満天も満天、細い三日月型になるくらい目を細めた笑顔

を浮かべ、やたらに高いメニューをおすすめしてくる。
わたし、別にご飯食べに来たわけじゃないんだけど。というか、わたしかパパ以外が作ったご飯なんて、食べて大丈夫なんだろうか。
「あの、わたし、ここに、とても物知りな人がいるって聞いて来たんですけど」そう言うと、猫の口角は瞬時下がって、「〝あ？〟」と別猫のような低い声がした。猫はわたしをじろりと一瞥した。
「客じゃないのか、にゃ」
「パパを探してるんです。ここで、物知りな人がお店をやってるって聞いて」
「……チッ」
猫はそれまでの愛想がうそのような素っ気なさで厨房に引っ込んでいった。「てんちょおー」という猫の気だるげな声が聞えて、それから複数人でぶつぶつと何か話し声がした。
それからしばらく座敷でぼんやりしていると、猫が再び座敷に姿を見せた。
「なんや、お客さん、物を尋ねに来はったんですか」
現われたのは白い猫だった。糸のように細い目に、やっぱりまんまるのわがままボディで、さっきの給仕猫が早着替えでもしてきたのかと思ったけど、茶と黒のぶちがない。白一色の猫だ。

白猫は真顔でわたしの目を見つめた。愛想はないけど、その分うさん臭さもなくて、給仕のぶち猫よりは信用できそうだと思った。

「パパを探してるんです」

「はあ」

「わたしのパパ、知りませんか」

「知るわけないでしょ、にゃ。大体、注文のひとつもせずに座敷に上がり込んで自分の言うことだけ聞いてもらおうなんて、そんな都合のいい話ありますかい、にゃ」

ぶち猫が白猫の横からひょっこり顔を出して言った。わたしを座敷に連れて行ったのはこの猫だったと思うんだけど。

ぶち猫がうるさくて仕方ないので、注文をひとつすることにした。一番安い、ブレンドコーヒー。

「お客さんみたいな小さいお子さんに、店長のコーヒーの味なんてわかりますかいねえ、にゃ」

ぶち猫が嫌味ったらしく言う。白猫は注文を聞くと厨房に戻ったので、ぶち猫とふたりだけになってしまった。わたしの他に客のかげはない。あまり繁盛していないのかもしれない。

「物知りなのって、あの白猫のことですか」
「んなああ。店長も物知りにゃーが、わいも色々耳に入れてはいますよ」
「わたしのパパ、どこにいるか知りませんか」
「だから知りますかい、そんなん。お客さんのことだって知らないのに、にゃ」
「わたし、森で産まれてパパとふたりで暮らしてました」
「そうですかいにゃ。それはようござんしたねえ」
「よくないです。パパ、殺されちゃうかもしれないんです」
「にゃああ？　お客さんのパパさん、悪いことしたんですねえ」
「してません。悪い人に追われてるんです」
「それは災難ですなあ。でもわいはどのみち、人間の男のことなんて知りませんよ、にゃ」
「パパは人間じゃないです」
「にゃあ？　お客さんは人間でしょ？　育ての親なら、そう言いなされや」
「確かに、育ての親と言えばそうなのかもしれません。パパ、わたしは森から産まれたと言っていたから」

「森から、にゃあ？」
「パパは、わたしは森が産んだ子だって言いました。森の、こもれびの中にいたわたしを、パパが見つけたんだって」
「にゃはははははは」
「何がおかしいんですか」
「お客さん、おかしなことを言うねえ、にゃ。人間の子どもは人間の女の腹から産まれるに決まってるじゃありませんか。森から産まれたなんて、ヘンなのにゃ」
「……でも、パパは」
「パパさんのでたらめですよ。どうせ貧しい村で口減らしのために捨てられたのを、異種族のパパさんが同情でもしたってところでしょ……あでっ」
パコンと軽い音がしたと思うと、いつの間にか店長の白猫が立っていた。
「あんた、またお客さんいじめてへんやろね」
「叩かないでくださいよ、店長。そのおぼん、けっこう痛いんですからね」
ぶち猫の抗議をスルーして、白猫は「こちら、ご注文の」と言いながら静かにコーヒーをテー

ブルに置いた。白い毛の一本に至るまで品のある動作だった。
「お客さんのパパさん、人間やあらへんの？」おぼんをわきに挟んで白猫が言った。
「はい。でも、パパが間違ったことを言うはずないんです。パパは、とっても、物知りだから」
「お客さんのパパさん、人間やないんやったらなんなの」
「パパは――……」
わたしがそう言うと、二匹が互いの顔を見合わせた。
「わいの聞き間違いやなかにゃ」「いや、でも確かに――って」「にゃあ、あの噂はほんまやったんか」「あんた、いらん風聞言うんやない」「でも、――て言うたら……」「あんたっ」何か言いかけたぶち猫を、白猫がまたおぼんでぶった。
「何か知ってるんですか」
「知ってるいうたら、まぁ、知ってるんやけどねえ。でも、不確かなことをべらべらしゃべるもんでもなしにね……」
白猫はそう言いながらポケットからメモとペンを取り出し、何かを書き付けた。メモを一枚めくり、少し迷うそぶりを見せて、また何か書き付けた。そうしてメモを二枚切り取ると、二枚と

もわたしに差し出した。
「一枚目に書いたところに、もしかしたらパパさんのことを知っとるかもしれんやつがおります。でも……行くんはおすすめしません。自分は、二枚目のところに行くのをすすめます」
「どういうことですか」
「お客さん、パパさんから何か言われてへん？　もうお別れやとか」
「……なんで、それを」
「ほな、パパさんの思いを汲まはったほうがよろしい。二枚目に書いたところは、お客さんみたいに身寄りのないガキを引き取ってはるところですわ」
「……」
「特にお客さんはギリギリの年齢ですわ。こういうところで面倒見てもらえる、な」
「わたしは、パパを探したいんです」
「……そうですかい。まあ、アレに会った後にでも考え直さはったらええ」
白猫はそれっきり何も言わないで、店の奥に姿を消した。ぶち猫もやんややんやと言ってから座敷を離れた。

結局、わたしが店を出るまで他のお客さんが入ってくることはなかった。やっぱり客の入りは悪いみたいだった。わたしも、もう二度と来ることはないと思う。コーヒーがまたたび臭くて、とても飲めたものじゃなかったから。

5

雑木林でロボットを見つけた。ロボットは細い木の幹に背中を預けて、三角座りをして、じっとしていた。雑木林は薄暗くて、かなり近づいてからはじめてロボットの姿に気づいた。ちょっとこわかった。

ロボットが身動きひとつしないで微動だにしないのも気味悪くて、足早に通りすぎようと思ったけど、こわいものみたさというのか、やっぱり少し気になって、ちらちら横目で見ていたら、あるときバチリと目が合った。ずっとうつろな目で、うつむき加減で自分のひざこぞうばかり見ていたロボットが、いかにも機械的な動作でまっすぐ顔を上げ、わたしを見た。ちょっと、いや、かなりこわかった。

目をそらすこともできなくてしばらくロボットと見つめ合っていると、そのうちロボットのほうがふいと目をそらした。その動作が、どこか残念そうに見えた。

何かを探してるんだろうか。……ひょっとして、パパのことも何か知っているかもしれない。白猫のメモにある場所はここからもう少しだけ先だけど、白猫の記憶違いで、もしかしたらこのロボットが、白猫の言っていた、一番パパのことを知っている人なのかもしれない。

「こんにちは」と声をかけると、さっきまでの無駄のない動作が嘘のようにゆっくりと……気のせいか、なんだか面倒そうに首を持ち上げた。ロボットのくせに、眠そうにまぶたが垂れさがっている。

「なんですか」と言うロボットの声も、やっぱり眠たげだった。

「あの、わたしのパパ、知りませんか」

「知りませんね。僕は、エミリちゃんしか知りません」

「エミリちゃんって誰ですか」

「僕の彼女です。気安く“ちゃん”付けしないでください」

怒られてしまった。

「エミリさんは、あなたの彼女なんですか」
「ええ、そうです。ここで待ってるんです。……もう、五十年」
「五十年」
「ええ。でも、彼女は、約束を必ず守る人だから」
「エミリさんは、人間なんですか」
「ええ、彼女は人間で。この家……ここに二十年前まで建っていた家の、主人なんです」
「そうですか」
「彼女は帰ってくると言いましたので。帰ってくるまで、待っていてと言いましたので。だから待ってるんです」
「彼女はどこに行ったんですか」
「ドラゴン退治へ。みんなが安心して暮らせる国にするんだって言って出て行きました。エミリちゃんは強くて優しくて、誰より素敵な女の子です」
「……ドラゴン退治、ですか」
「ええ。お国の仲間とともに向かうから安心してくれと言われました。だから僕はここで待って

いるんです。あなたの父上は知りません。僕はエミリちゃんしか知りません。エミリちゃんがいればよいのです」
「エミリさんは、いつか、帰ってくるんですか」
「……」
「……」
「ええ。僕が待っているかぎり、きっと」
「……そうですか」
「僕の話は以上です。あなたの父上のことは知りません。他に話すことがないならスリープモードに移行します。僕、もう充電が少なくて、いつまでこうして待っていられるか」
「新しくエネルギーを入れる、とか」
「ああ、バッテリーのことですか？　できません。少し前、この近くに変わり者の錬金術師が――まあ、錬金術師なんてみんな変わり者ですけど――引っ越して来たので、そいつに半永久的なバッテリーを作ってくれないか聞いてみたところ、『お前の型は古すぎて俺の専門外だ』と追い出されました。全く、役立たずの男だ」

「錬金術師……」
「ええ。あなたも、彼に用があるんじゃないですか？　ここ最近、この辺りを通る人はみんなそうですよ」
「はい。わたしの目的地も、多分……そこです」
「多分？　まぁ、いいですけど。それじゃあそろそろ、眠ります……少しでも長く、エミリちゃんを待っていたいので」
「そうですか」
「久しぶりに誰かと話ができて、少し気が楽になりました。ありがとう、お嬢さん。父上にも、よろしくお伝えください」
「……はい、きっと」
「それでは、おやすみなさい」
ロボットの首はゆっくり傾いていき、初めに見たときと全く同じ姿勢に戻った。うつろな目をして、ただただ自分のひざこぞうを見つめている。
わたしはやっぱり気味が悪いと思いながら、「おやすみなさい」を言って先に進んだ。

6

白猫のメモが示した場所は、城下町のはずれの雑木林の、そのまた奥の山のふもとの、小さな一軒家だった。

木造りの重厚なドアをノックする。なんの返事もない。

もう一度ノックしてみた。コンコンコン。やっぱり何も返ってこない。留守だろうか。

もう一回だけノックして、だめだったら出直そう。コンコンコン。コンコンコン。

コもう一回だけやってみよう。それでだめだったら仕方ない。コンコンコン。コンコンコン。

コンコンコン、コンコンコン、コンコンコンコン――「あーったく、うるせえな！　ドラゴン退治は済んだだろ！　ちょっとは休ませろハゲっ……って、あれれ」

「……えっと」

「……これは失礼。てっきり、クソうるせえ宰相のジジイがまたいちゃもんつけにきたのかと。ロリ……っていうにはちょっと年齢いっちゃってるけど君、俺になんか用？」

赤銅色のもじゃもじゃ頭。目の下には真っ黒なクマ。ヨレヨレの白衣。この人が多分、ロボットの言っていた錬金術師で、白猫の言うには、パパのことを一番知っているかもしれない人……なんだろう。そうでもなければあまり近づきたくない、けど。

「あの、ここに、パパのこと知ってるかもしれない人がいるって聞いて」

「パパぁ？」

大げさすぎるくらい口を大きく開けて、思いっきり眉を寄せて、首をぐにゃりとひねる。なんだかこわい。

「あなたが、錬金術師ですか」

「そうだけど？」

「わたしのパパ、知りませんか」

「いや、知ってるわけないよね。なんか人違いしてる？」

「わたし、パパとふたりで暮らしてて、その、森で。それで——」「ちょっと君！　それどうしたのさ！」

瞬間移動でもしたみたいに、錬金術師がずいっと距離を詰めてきた。もじゃもじゃの髪が目に

入りそうなくらい近い。
「これ、どこで手に入れたのさ！　ドラゴンの鍵爪なんて！　こんな貴重なもの、なかなか手に入らないよ！」
「えっと、これ、は、パパが、くれて……」
「そうかい！　君のパパは今どこにいるんだい！」
「それを今探していて……」
「そうかいそうかい！　とりあえず中に入りな！　寒かっただろう、今お茶を淹れてあげよう」
言うが早いか、錬金術師はわたしの手首をつかみ、ずんずん家の中へ入っていった。ヘンな色の液体の入ったビーカーやら、悲痛な表情をした根菜やら、乱雑なメモ書きやらでとっちらかったテーブルに座らされる。
この部屋はなんだか鼻が縮むような臭いがする。家のどこからともなく白い気体が漂ってきている。目が痛い。
「ちょっと散らかってるけどねー。まあ、気にしないで空いてる椅子に座ってよ」錬金術師はそう言いながら、ビーカーに入った半透明の青い液体を捨て、さっと水洗いし、そこに茶葉を入れ

た。
「今お茶を淹れてるからね。さ、なんでもいくらでも話してくれていいよ。ドラゴンの鍵爪をどこで見つけたとか、パパが何を好きかとか。パパ探し協力だって、いくらでも手をかすよ。いやあ、俺ってば優しい超優しい。俺ほど優しいヤツもそうそういないよー」
コポコポとポットが音を立てて沸騰を知らせた。錬金術師はポットをかたむけ、さっきのビーカーにお湯を注ぐ。
「さ、どうぞ」
絶対飲みたくない。
「あの、さっき……ドラゴン退治、って」
「ん？　ああ、今この国中で騒ぎになってるでしょ？　ドラゴンが討伐されたって。あれね、八割くらい俺の手柄なわけ」
錬金術師はコーヒーを飲みながら（これもついさっきまで緑の液体が入っていたビーカーだ）、よくわからない器具と用品と書類とで積み上がった山に手を突っ込み「えーっと、これは……違う。これも……違う。なかったかな、ここに……これじゃなくて、あ、これ報告しなきゃだめな

やつ……期限切れてるけど、ま、いっか。あ、あったあった」と、一枚のぐしゃぐしゃの紙取り出した。

これ、大事にしまっておかないといけない紙なんじゃないんだろうか。パパが教えてくれた。確かこれ、羊皮紙って、貴重な紙だったはず。

「俺、こう見えて超優秀な錬金術師だからさ、ドラゴン退治のためにわざわざこの国にお呼ばれされちゃったんだよねえ。これ、契約完了の書類」

契約完了の書類って言われても、わたしの知らない文字ばかりが並んでいて読めない。

「俺は隣の国から来てねぇ、いやあ、この国は美人が多くて羨ましい。貧乏で文化も国力も冴えないけどね」

錬金術師は両手を広げて背もたれにどっかり体重を預け、天井を仰ぎ見た。

「退位が目前に迫った王様が躍起になってくれて良かったよ。俺にもツキが回ってきたってもんだ。このペラ紙一枚があれば俺は他の科学者を出し抜ける。錬金術なんか胡散臭えって嗤ったヤツのアホ面が楽しみだよ」

錬金術師は、ヒヒッ、ヒヒヒッと呼吸器がけいれんしたような笑い声をたてた。

「あなたがドラゴンを殺したんですか」
「んー、正確には殺してはないかな。石に変えただけ。手ぇ下したもの俺じゃないけど」
でも発明したのは俺だから、やっぱりもうちょっと報酬あってもよかったと思うんだけどね。
錬金術師がつまらなさそうに書類を眺めた。
「石に……？」
「そう。……ああ、君も錬金術とか胡散臭いって思ってくるクチ？　あのねえ、君がこれからこの国で安心安全に、生身の人間じゃ手も足も出ない怪物ドラゴンに怯えずに暮らしていけるのはね、稀代の天才俺術師たる俺と最高の学問、錬金学のおかげだから。そうそう、錬金術錬金術って言うけど、本当は錬金学って言ったほうがいいと思うんだよね、俺。物質のなんたるかを解明し、神の作りたもうた世界の理に近づく。錬金学こそあらゆる学問に優る最高の学問だよ。天文学に占星術、薬学医学。あらゆる学問は錬金術の素地となりうるからね」
「はあ」
「わかってないみたいだから説明するけどね、君、あのね、この世界に存在するありとあらゆる万物はおしなべて全て、共通の根源を持ってるわけ。君も俺もこの机も空も鳥も、全部ね。そう

いう、万物の根源たる究極的に純粋なエネルギーが姿を変えてあらゆる物質に具体化しているの。これをコアエネルギーっつうんだけど、俺ら錬金術師はそのコアエネルギーの解明と抽出のための研究をしてる。これさえあらゆる物質から取り出すことができれば物質を自在に変形できるでしょ？　極論、ただの石コロを黄金に変えることだってできるわけ。まあ、まだそこまで上手くはいってないんだけどね。物質ごとに「能」と「静」の割合が異なってて、その比率と、エネルギーの結びつきの仕方――内部のエネルギー回路によって任意の物質に具体化されるわけなんだけど、この比率と回路を上手くいじれないんだよね。でも、回路のほうはともかく比率のほうはコアエネルギーの取り出しでなんとかできるようになってきて。似た構造の回路の物質同士なら変容できたんだよね。今俺、さらっと言ってるけどなかなかすごいからね、これ。俺じゃないとできなかった業績だから。ほら、最近、雲が女の子たちの間で流行ってるでしょ？　あれも俺の研究の副産物なわけ。色々研究とか実験とかしていくうちに、ああいう副産物がつくれちゃったりするんだよなぁ。ああ、そうそう、回路って言えば植物の回路。あれ、けっこう応用利くものが多くてさ。自然界には存在しない素材で構成された花とかつくっちゃってさあ。花の変形までやると、錬金術の領域かもわかんなくなっちゃうけどね。人間思考エネルギーまでくっつけちゃっ

たし。いやあ、趣味と仕事を混合するなってね。あれは完全に趣味の領域。ああ、対ドラゴン兵器の仕事はちゃんとしたよ？　ドラゴンの鱗の回路を俺が独自に調査したところ、意外や意外！水火山の火山岩とすっごく似ていることがわかってね。まあ、これに関しては俺の類まれなる頭脳だけじゃなくて、今くらい水火山の調査が進んでて、蒸留技術も改良されて物質操作しやすくなった時代のおかげもあるんだけど。水火山の火口に行くなんて、命知らずの地理学者には感謝だよ。水火山の噴火で溺死する人、いっぱいいるからね。……何の話だっけ？　そうそう、ドラゴンね。俺の大発明の話。回路の研究は早々に諦めて能静エネルギーの研究ばっかしてたジジイどもと俺は違う。比率のほうはなんとかなってんだ、あとは回路の変換さえ上手くやれりゃ、石コロを黄金にすることだって夢じゃない。なのに、なぜやらない？　アカデミーに引きこもった保守主義のジジイどもめ。まあいいさ。じいさんたちが回路分野をほったらかしにしてくれたから、運命の女神は俺を選んだんだ。そう、俺はついに、回路変換を成し遂げた！　「回路の端を切ってなんになる」？　なんも成してねえ無能ども、好きに言えばいいさ！　今まで誰もが回路への介入に失敗してきた。それを俺は成し遂げたんだ。回路の端を切断した！　これは偉業だ！いずれ来る錬金術の時代、大いなる時代への一歩だ！　ヒヒ、回路が不完全で、不安定な状態に

なった物質はどうなると思う？　不安定な物質はなんとか安定しようと回路を繋げる先を探す。一定値以上近似の物質とぶつかると連鎖反応が起こって回路が繋ぎ変えられるんだよ。わかるかい？　俺はね、水火山岩の弾丸を開発したんだよ。水火山岩の回路の片方の端だけちょん切ってやって、そいつをドラゴンに一発お見舞いだ！　ドラゴン退治は、素晴らしい実験だった。水火山岩の弾丸がめり込んだ箇所を中心に、やっこさんの鱗がメリメリ音を立てて半透明の灰色の岩に変わっていく様！　ヒヒ、見たかアカデミーの老獪ども！　錬金術を嗤った石頭ども！　ああ、見せてやりたかったよ。ドラゴンが苦痛に叫び声を上げながら倒れていく様をさあ！　回路変換には膨大な熱エネルギーが生じる。身体が石に変わっていくのは、全身が焼け爛れる激痛だったろう。お国の連中は軍事利用できるモンには援助を惜しまねえ。このペラ紙ひとつでアカデミーひとつ分の資金援助は約束されたも同然だよ。俺は、俺一人で錬金学史に残る大発見してやるのさ……」

一通り話して満足したのか、錬金術師は椅子の背にどっかりもたれかかった。

「あの」

「ああ？　ああ、君、まだいたの」

「その、ドラゴンは」
「ああ、ドラゴンね。そのドラゴンの鍵爪、何と交換って話だっけ」
「あげるなんて言ってません。あの、ドラゴンは」
「あれ、そうだっけ。じゃあなんで俺んちにいるの」
「あなたに無理やり引っ張られました。あの、ドラゴン――」
「そうだっけ。まあいいや。じゃあそれくれた人紹介してく――」「あの、ドラゴンは、今、どこですか」
錬金術師はようやくわたしに顔を向けた。
「えぇ？　えーっと、どこだっけ……ああ、あそこだよ。星の川の一番上流の、夜闇の丘。ね、気になるならさ、そこまでの地図あげるから、その鍵爪……あれ、どこ行くの」
わたしは錬金術師の家を飛び出した。転がるように駆けていく。
「待ってよ、何、どうしたの」
ふいに後ろから手首を引っ張られ、かかとが滑った。
「あのさあ、さすがに失礼だと思うんだよね、何も言わずに飛び出すなんて。君、どんな教育受

けてきたの」

わたしの手首をつかむその手が気持ち悪かった。雲売りのおじさんの捨て台詞よりも、しゃべる花よりも、隣国の姫の写真よりも、またたび臭いコーヒーよりも、スリープモードのロボットよりも、ずっとずっと気味悪くて、触れられたところからわたしの皮膚がヘドロに変わっていくような気がした。

「離して！」

「なんなんだよ、急に。話通じねえの？」

わたしは自由なほうの片手で、首からさげた鍵爪をつかんで力任せに紐を引きちぎり、硬くて鋭いそれを錬金術師に向かって振り下ろした。

「ってえ……んだよ、クソガキ！」

錬金術師は血があふれる肩をおさえてわたしをにらんだ。血はドクドクと流れて錬金術師の白衣がみるみる赤くなっていく。錬金術師は顔をゆがめて地面に膝をついた。

「こ……の……」

わたしは一歩、二歩、後ずさりした。それから、くるりと踵を返して駆け出した。

絶対に、振り返らなかった。

7

雑木林を抜け、城下町を通り過ぎ、乱雑な花畑を越え、小さな村も過ぎて、森の中に入り、パパと暮らした洞窟よりももっと奥、ずっとずっと先で、小さな星くずが湧き出る丘にたどり着いた。

キラキラと細かな星くずが地中から湧き出る丘に、半透明の灰色……水火山岩の皮膚に覆われた、大きな大きなドラゴンのパパが横たわっていた。

パパは静かに目を閉じていた。手足と尻尾を丸めて、まるでいつもと変わらず寝ているようだった。

パパが死んだ瞬間を思った。全身が焼け爛れるような痛みの中、死を悟って、目を閉じて丸くなった、その瞬間を。

パパがこんなふうになるなんてありえなかった。パパは人間が国をつくるずっと前から森に住

んでいて、なんでも知っていて、なんでも教えてくれた。木いちごやよもぎの食べ方。火の起こし方。森の歴史。寝る前には、人間の町に伝わる不思議な物語まで。パパが王国の軍隊に襲われた昔話をしてくれたこともあった。わたしが森のこもれびから生まれてきた、森の子どもなんだってことも。パパはなんでも知っているんだと思っていた。ずっとこのままパパと暮らしていくんだと思っていた。

でもパパは、雲をファッションにすることは知らなくて、パパを襲った王国兵士のひとりが強くて優しくて誰より素敵な女の子であることは知らなかった。そしてパパはあの朝、いなくなった。枕元に食べきれないくらいの木いちごと、地面に書き置きを残してパパはいなくなった。

パパは悪い人に追われている。このままだとお前にも危害が及ぶから、しばらく人の住む町で暮らしなさい。なんなら、もうそのまま住んでしまいなさい、って。書き置きには、人のいる方向を指した印もついていた。

だからわたしはその印を頼りにパパをたずねた。パパは誰より強くて、大きくて、なんでも知っていて……パパが本当にいなくなっちゃうなんて、ありえない。

パパは、なんでもは教えてくれなかった。悪い人に追われてるとは教えてくれても、殺されそ

うだとは教えてくれなかった。
半透明の身体からは赤黒い内臓が透けて見えた。パパは、うろこだけが水火山岩に変わってしまって、中の骨や肉や内臓なんかはそのままだった。どの内臓もピクリとも動かない。
だからわかった。パパはなんでも知ってるわけじゃなくて、何より強いわけじゃなかった。
だけどわたしは、パパが、あいかわらず、大好きだった。
わたしはパパにもたれかかった。こうすると、いつもはパパが大きくて硬いしっぽでわたしをくるんでくれるのだけど、今日はしっぽはやってこなかった。かわりに背中からひんやりと、石の冷たさが伝わってくる。
パパは、いつか、目をさますだろうか。
『パパはね、朝日が昇ると、自然と目がさめちゃうんだ』
いつだったか、わたしがパパに、どうしていつもそんなに早起きなのかと聞いたとき、パパはそう言っていた。『年を取って朝が早くなったんだ』そう言って、ちょっと困ったように笑った。
だからきっと、パパは目をさます。夜明けさえくれば。わたしが待っているかぎり、きっと。
わたしはオシャレなんか興味ない。王子が結婚しようがしまいがどうでもいい。エミリさんな

んて人知らない。わたしは、パパがいればそれでいい。

わたしは目を閉じた。まぶたの裏に夜明けを見た。

パパはいつも、夜明けとともに起きるから

円環

あいかわあいか

夜の迷宮に留まってはならない。この言葉は迷宮に向かう探窟家たちの間で広く知られている。

二人の探窟家が、第六三迷宮「花の迷宮」ペダロ・ラビリント深層部「祈りの花園」を歩いていた。一面の花畑はまるで眠るように頭を垂れ、静かに吹く風に揺られている。その花の正体は「祝福」と呼ばれる魔物であった。地上は美しい花のみ、その姿を見せている。しかし「祝福」の真の姿は地下深くに隠されていた。花の迷宮の大部分は土と共に生きるこの花々が支配している。仮に探窟家が、花園を掘り返し始めたら、その瞬間に「祝福」の毒根が探窟家たちに遅いかかることとなる。「祝福」の放出する寄生性毒素が祈りの花園の空気を不気味に歪ませていた。空を埋める花弁たちは、今は閉じている。しかし花が休んでいるというわけではない。それぞれが獲物の訪れを虎視眈々と待ち続ける「罠」と化しているからだ。げっそりするような甘い蜜の香りが、二人を包んでいた。

夜の迷宮は危険だと言われ、探窟家たちは避ける。濃密な闇に光はない。静かに歩を進める二つの足音は、闇に吸い込まれるように消えていった。しかし彼女たちの足取りに迷いはなかった。堂々たる足取りで先導するのは、白と黒に分かれた長髪を後ろで結び、軽鎧と籠手を纏った少女。胸はサラシで押さえられ、腰には長刀を帯びている。まだ幼さの残る面差しだが、その鋭い眼差しとしなやか

な動きは、熟練の探窟家であることを物語っていた。オオカミのような耳と尻尾が、その出自を示していた。白狼の血を引く獣人の少女、名を銀子といった。

傍らを歩くのは、黒の修道服を纏った金髪碧眼の少女。両手両足には枷のような金属具がはめられ、歩むたびに鎖が微かに鳴る。名はシルヴィア・サンティ。聖職者の家系に生まれ、巫術を扱うカースメーカーだった。金色の髪は月明かりを受けて儚げに輝き、碧の瞳には決して揺るがぬ意志が宿っている。純潔を象徴するはずの修道服とは裏腹に、太ももには細身のダガーが隠されていた。それは呪いの代償として己の血を捧げるための、自傷用の肉斬りの刀だった。華奢な体躯は儚さを感じさせるが、全身に刻まれた無数の自傷痕が示すのは、彼女がただ守られるだけの修道女ではないという事実だった。人々は彼女を「花の聖女」と呼ぶ。その名の裏には、血と呪いが常に付き纏っていた。彼女たちの胸には熟練の探窟家であることを示す紀章が輝いている。この暗く、危険に満ちた花園の深部をたった二人で進んでいることは、彼女たちが卓越した技量を持っていることを証明していた。今この時も、彼女たちはいつもの冷静さを失ってはいなかった。しかし表情には微かに疲労の色が滲んでいた。

夜の帳は魔物たちを活性化させ、視界を悪くして、冒険者たちに害をなす。暗闇に紛れて獲物に忍び寄る魔物を警戒するには、昼間

とは比べものにならない集中力が必要になる。夜の迷宮は黒洞洞としており、空に星はない。月もない。ただひたすら深い夜が広がっているだけだった。光源といえば、ただシルヴィアの手に掲げられた「不屈」と呼ばれる旧文明のアーティファクトのランプの光源が揺れるくらい。しかしその「不屈」の薄明もほんの一寸先の闇に溶けてかき消されていった。

しかし狼血混じりの銀子にとって夜の暗さは恐れるに値しない。彼女は夜の闇の中でも、昼と変わらぬ視力を有していた。銀子の目には、ほのかに揺れる花々の影がはっきりと映っていた。また狼耳は遥か遠くの音でも、聞き分けることを可能とした。

風のささやき。草の擦れ。花弁の踊る自然の音色に、不意に奇妙な異音が混ざった。「ゲラゲラゲラ！」遠く、花園の奥から不快な嘲笑が響いた。銀子は鋭く反応し、刀の柄に手を掛けた。

「……銀子さん」

シルヴィアが小さく囁いた。声には微かな緊張が滲んでいた。

「アレが来ますね」

シルヴィアの声は震えてこそいないものの、言葉尻のわずかな上ずりが彼女の動揺を示していた。

「うん」

銀子が答えた。短い返答だった。銀子の声に不安げな響きはなく、むしろ静かな闘志を

感じさせるようなものだった。白狼は抜刀する。遠くから、不自然な笑い声が響いてくる。

「ゲラゲラゲラ……」湿った、低い笑い声。およそヒトのものではない不気味な、耳に障る奇声。

暗闇からゆっくりと近づいてくる。声の正体が何かを彼女たちは既に知っていた。「それ」は花畑をかき分けて、二人の少女の眼前に姿を見せた。人間と同じ大きさで、大鉈とマスケット銃を手に持ったそれ。植物の茎に絡まれた、腐乱死体に似たそれ。

「ゲラゲラゲラゲラ」狂ったような笑い声を響かせながら迫ってくる。シルヴィアも銀子も表情を変えなかった。次の瞬間、銃声が響いた。乾いた火薬の匂いが鼻をついた。一瞬の静寂。刹那、弾丸はシルヴィアたちの近くの地面を軽やかな音とともに掘り返した。

「当たりませんよ」

「知ってる」

シルヴィアの言葉に銀子は素早く答えた。銀子の視線は既に目の前の異形に向けられていた。

「ゲラゲラゲラゲラ！」その間も、怪人は不快な笑いを響かせ続ける。もはや人間の発声器官の成す音ではなく、木の間を風が通り抜ける虎落笛に似ていた。目の前で笑う異形。マスケットと大鉈を手にした植物の化物。その名はロータス・イーターといった。

「祝福」と呼ばれる、祈りの花園を構成する

植物に寄生された探窟家のなれの果て。かつては人間だった者。だが、今はただ迷宮に従い花園と一体となった異形である。生物学的観点から、まだ人間として生きているかと問われれば生きている。しかし不可逆的な身体変化と精神汚染が施されているため、退治するべき魔物と、探窟家組合によって認定されている。

彼らの瞳には焦点がなく、虚ろな笑みを浮かべたまま、ひたすらシルヴィアたちの元へと向かってくる。

「ゲラゲラゲラ！」乾いた笑い声が響く。歓喜でも、嘲笑でもない。ただ、感情の抜け落ちた、機械のような反応。彼らの皮膚には花畑と同じ桃色の花が咲いていた。神経は既に草の根へと置き換えられている。頭を断たれようと、胴が裂かれようと、彼らは歩みを止めない。彼らを動かし続ける「生命核」を破壊するまでは。マスケット銃を構え、大鉈を引きずりながら、ロータス・イーターはジリジリと少女たちににじり寄った。

「ゲラゲラゲラ！」植物の怪物は奇声に合わせて大鉈を構えなおす。動きに合わせ銀子もまた腰を落とした。次の瞬間、銀子は地面を強く蹴り一瞬で間合いを詰めた。彼女が振るった一刀が空間を切り裂いた。ロータ・スイーターは迫る斬撃を回避しようと身体を捻った。しかし白狼の雷光にも似た一太刀は植物の怪物に回避を許さない。一閃。踊る刀影がロータス・イーターの首を斬り裂き、切断さ

れた頭部が地面に転がった。だが笑い声は止まらなかった。

「ゲラゲラゲラゲラ！」頭部を失くした怪人の身体は、それでも大鉈を構えて迫った。「祝福」に寄生され、植物人間と化したロータス・イーターは頭を切落としたところで止まることはない。銀子たちは静かに構えた。地に転げ落ちた頭部が「ゲラゲラゲラゲラ」と笑っている。首の断面から、引きちぎられたケーブル線のように草の根のような神経組織がうねっていた。まるで、自らの意思で動いているかのようだった。

「……なるほど首を斬っても死なない。噂話で聞いていた通り」

ロータス・イーターの胴体が動き出す。転がる頭には目もくれず銀子へ大鉈を振り上げた。大鉈が風を切る音。銀子は紙一重で回避する。「ゲラゲラゲラゲラ」耳障りな笑い声を上げてロータス・イーターは鉈を再度振り上げようとした。

銀子は刹那に動いた。大鉈を振ったことでできた隙に刀を踊らせ、怪物の腹に刀身を滑り込ませた。肉を斬り裂く手ごたえを感じる。しかし、怪人はなおも笑いを続けていた。斬られた腹は瞬時に木の繊維に変化し、その切れ目は見えない速さで修復されていった。

「ロータス・イーターを殺すためには生命の核を潰さないとだめ、そうだよねシルヴィ」

銀子は振り抜いた刃を構え直しつつ尋ね

た。シルヴィアは大きく頷いた。

ゲラゲラと笑い続ける怪物の体が大きく揺れた。先程切られた腹の一部が開かれ、内部が露出した。そこには拳よりも大きい硬質な赤い球体が浮いていた。血管を思わせる太い管が球体と繋がっており、それが心臓のように脈打っていた。銀子は逆手に隠し持った小太刀を腹部へ突き込んだ。しかし、頑強な樹皮装甲に阻まれ、刃が通らない。銀子は深く息を吐き、すぐさま刀を上段に構えると、軽やかに撫で切った。核に刃が滑り込んだ刃が深部へと侵入しロータス・イーターの生命核を両断した。彼は痙攣し、力なく崩れ落ちていった。その身体は次第に萎み、花を散らし、やがて土塊へと変わっていった。ロータスイーターの残骸の中から花びらが舞い上がる。

「これで終わりだね……」シルヴィアが呟いた。戦いは終結したものの、彼女たちの表情は晴れないものだった。ロータス・イーターの遺体から、白い花が咲いた。この迷宮では死すらも永遠ではない。死してもなお、花は咲く。

その後、シルヴィアたちはさらに深く、祈りの花園を歩いていった。銀子は常に先頭に立ち、鋭い目線で周囲の安全を確認しつつ、足早に進む。一方で、シルヴィアも油断することなく警戒を怠らずにいた。やがて、彼女

たちは周囲を見通せる開けた場所を見つけ、野営の拠点とすることを決めた。シルヴィアは右手に持っていた「不屈」と呼ばれる燃え尽きることのないランタン型のアーティファクトを左手に持ち替え、そっと蓋を開ける。ランタンの内部では、「不屈」の本体である燃え続ける炎が揺らめいていた。何のためらいもなく、シルヴィアはその容器の中へ右手を突っ込み、炎へと押し付けた。途端に彼女の表情が一瞬歪み、ジュッという肉の焼ける音が響く。焦げた肉の匂いが花園に広がる中、シルヴィアは低く、短い祝詞を詠唱した。「……ペイントレード」その瞬間、爆炎が舞い上がり、周囲の花々を毒根ごと一掃した。青白い炎が辺りを照らし、燃え上がる花弁が灰となって舞った。燻香が漂う中、炎に焼かれ灰となったはずの植物たちがゆっくりと芽吹きはじめた。まるで、迷宮そのものが命の死と再生を繰り返しているかのようだった

「……やはり夜の迷宮は疲れますね」

銀子は、焼き払われた、花園の焦土の上に、無造作に御座を敷き、その上にどっと腰を下ろすと、返り血に染まった両腕を拭った。サラシを巻き直し、丁寧に刀を手入れする。シルヴィアはそんな彼女の横に小さく座していた。シルヴィアは、右手の火傷に塗り薬を施しながら、夜空をぼんやりと見ていた。

月はない。星明かりもない。二人の少女は静かに会話する。シルヴィアは黒の修道服の

裾を揃えた。包帯が巻かれた右の手のひらは何回も自傷と治療を続けてきたことにより、歪なケロイドを遺している。両手両足の枷がわずかに鳴った。彼女の瞳は焼け残した花々を映していたが、焦りはない。むしろ、静かで確信に満ちた光を宿していた。

「しかし本当に遺物なんてあるの？　この花園に。しかも神代のアーティファクトなんて」

銀子が問いかけると、シルヴィアは静かに「ええ」と微笑んだ。確信を持ったその声音に、銀子は淡々と「ならいいけど」と頷いた。

シルヴィアは胸元の小さな皮袋から、一枚の古びた羊皮紙を取り出した。銀子もそれを覗き込む。シルヴィアは文言を包帯の巻かれた指先で撫ぜた。

「……これは、ザトー文書と呼ばれる神代の遺物です」

銀子はちらりと文書を見て、「へぇ、聖女様ってのは、こんな古ぼけた紙切れに人生賭けるんだね」と皮肉げな表情で呟いた。銀子の言葉にシルヴィアは「ふふ」と頷いた。「それはあなたもでしょう？　銀子さん」

シルヴィアの言葉に銀子は満足そうに「ま、違いないですね」と笑みを漏らした。

シルヴィアは羊皮紙を広げながら続けた。

「……これはかつてあなたと探索した第二一迷宮『黄昏の書庫』で発見したものです。かつて世界を滅ぼした終末戦争、その戦争を生

き延びた科学者が残した記録の一部。完全な形ではなく、多くの部分が欠損していますが」「はあ」銀子は刀の刃に布を滑らせながら、興味なさげに聞いているようで、実際にはしっかりと内容を把握していた。シルヴィアは続ける。「『花の迷宮に神の薬眠る』とこの古代の羊皮紙には書かれています」

銀子は興味なさげに「つまり、この迷宮のどこかに『神の薬』ってやつがあるかもしれない……ってことだよね」と要約した。

「……ええ」シルヴィアは微妙な表情を浮かべた。

「モルブルス・ロウザを治療するための薬。それがここに眠っている可能性があります」

……モルブルス・ロウザ、別名を大疫病。およそ数十年前から世界中に蔓延した病魔。それは人々の命を無差別に奪い、文明の発展を停滞させる最大の障害となった。感染者は高熱に苛まれ、次第に皮膚に赤黒い斑点が現れる。やがて激しい嘔吐とともに全身の血が凝固し、息絶える。その致死率の高さから「死神の口づけ」とも呼ばれ、ただの病ではなく、呪いのように恐れられた。この病がどこから来たのか、いまだに誰も知らない。ある者は古の呪われた土地から湧き出たと言い、ある者は神の怒りによる裁きだと語る。しかし歴史を遡ると、この病に酷似した疫病が幾度となく発生していることが記録に残っていた。この病が特に恐れられる理由は、その感染力の異常なまでの強さだった。空気を

伝い、肌を伝い、さらには衣服や物品を介しても感染する。都市に一度入り込めば、瞬く間に広がり、道端には死体が山積みとなる。焚かれる死骸の煙が空を覆い、人々は己の運命を悟るしかなかった。この「大疫病」を止める手立ては、存在しないのかもしれない。しかし、彼女たちが発見した古の科学書にはこう記されていた。「花の迷宮に神の薬眠る」。ザトー文書に記されたその言葉は、銀子とシルヴィアがこの花の迷宮に足を踏み入れた理由そのものだった。

銀子は延々に続く花園、その甘ったるい香りにため息をついた。

「こんな場所に薬を隠したご先祖様、いい性格だね」

銀子は淡々と呟き、立ち上がった。吹き矢を手に取り、ひらひらとシルヴィアたちに向かって飛ぶ蝶を狙った。ひゅっ、と短い風切り音。蝶が落ちた。しかし身体から小さな蔓が伸び、地面に根を張り始めた。

「……うわ」

銀子は無表情で呟いた。シルヴィアもまた、それを見つめていた。静かに目を伏せる。

「この迷宮では、生と死もあまり変わらないのかもしれません」

銀子は刀を静かに収めた。「こんなところに長居はしたくはないね」シルヴィアは微かに微笑みながら、頷いた。「ええ。でも、行かなければなりませんよ」銀子はゆっくりと肩を

すくめた。彼女たちは、再び迷宮の奥へと歩みを進める。燃やされた花園の上を、再び新たな花弁が覆い尽くすのにそれほど時間はかからないだろう。

迷宮の空間は歪み、重力もねじれ、方向感覚など意味をなさない。上下左右の概念は曖昧で、どこを見ても同じ桃色の花弁が漂っていた。空間は静寂に包まれながらも、どこかざわめきを孕んでいた。少女たちが踏みしめる足元は柔らかく沈み込み、まるで迷宮そのものが脈動する生き物のようだった。靴の裏に湿り気がまとわりつき、柔らかい地面がわずかに波打つ。花の香りが漂い、心地よいはずの甘い芳香が、逆に不気味な圧迫感をもたらす。探窟家の少女たちは自身の直感を無視し、スミヨシ式ジャイロコンパスを確認しつつ、計測上の座標を補正しながら進んでいく。

それでも、少女たちには常に「本当にこの進路であっているのか」という違和感がまとわりついていた。迷宮がわずかに揺らぐような錯覚を覚え、進んでいるはずなのに、周囲の景色が変わっているのかどうかさえ分からなくなっていく。足を踏み出すごとに、どこか遠い場所からか微かな反響が聞こえる。それが自分たちの足音なのか、あるいは別の何かが存在するのかも判断できなかった。花弁は絶えず舞い続け、空間を満たしている。指

先に触れると、ただの花びらのはずなのに、皮膚の奥まで染み込むような感触が広がる。見つめれば見つめるほど、それは花弁なのか、別の何かなのか判然としなくなってくる。銀子は小さく息を吐き、意識を逸らした。迷宮の空間は常に変化しているように思えた。前を向いて歩いているはずなのに、一瞬、背後を振り向けば、道が変わっているように見える。振り向くたびに、わずかに風景が変化しているような錯覚が生じ、静かな圧迫感が銀子の背に重くのしかかる。この場所が、現実の理から外れた領域であることを否応なく思い知らせた。

ふと銀子は過去を思い出していた。かつて銀子は一匹の獣だった。物心ついたときから親はおらず、刀一本のみ携えた天涯孤独の身上であった。白狼の獣人として齢六にして貧民窟と迷宮外縁部を往復しながら暴力とともに生きてきた。常に飢えと寒さに耐えながら、生きるために人も魔も斬り伏せる一塊の獣であった。獣人というだけで差別を受ける世界で、銀子は蔑まれることにも慣れていた。人間たちの間を縫うように生き、肩をぶつけられても、罵倒されても、殴られても、決して表情を変えなかった。どんなに冷たく扱われようと、銀子は常に飄々とした態度を崩さなかった。弱みを見せることは、死を意味すると理解していた。市場では獣人の子供たちが奴隷として売られ、労働力として酷使

されて殺されていく姿を何度も見てきた。幸運にも売られなかった者は、乞食として生きるしかなかった。銀子も例外ではなかった。食事は道端に捨てられた残飯か、誰かが投げ捨てた果物の皮。雨の日には下水道の隙間に身を寄せ、寒さを凌ぐ身の上だった。やがて成長し齢八からは探窟家として命を掛けて護衛等の仕事をこなすことで貧しいながらも慎ましやかに生きてきた。

齢十の頃、いつものように貧民窟を歩いていると、突然誰かに唾を吐きかけられた。銀子は驚きもしなかった。それが当たり前のことだったから。だが、その瞬間、別の声が響いた。

「謝りなさい！」

静かな街路に澄んだ声が響いた。銀子が顔を上げるとそこには黒の修道服を纏った金髪の少女が立っていた。齢にして十かそこらかといったところ。銀子と変わらない歳に思えた。碧の瞳が強い意志を宿し、男たちを睨みつけていた。身なりは清潔で整っており、どう見てもこの場には似つかわしくない存在だった。なぜこの少女は、自分のために怒るのか。銀子自身は、男たちにもはや何の感情も抱いていなかった。スラムの路地で人間の男たちから唾を吐きかけられるなんて日常の一部だった。肩をぶつけられることも、罵倒されることも、殴られることも、銀子にとっては変わらぬ風景のようなものだった。痛みすら感じない。感じる必要もなかった。

修道服の少女の声は澄んでいた。震え、怯えが混じりつつも義憤から出たであろう声だった。驚いた。こんなことは初めてだった。白魚のように小さく細い手を握りしめ、震える声で何かを訴えようとしていた。銀子は理解した。自分より遥かに弱い存在が、哀れみではなく本気で自分のために怒っていたということに。

「なんだ、修道女さまが獣の味方か？　ああ？」

男は嘲るように笑った。修道女はギロリと鋭い碧の眼光を返した。

「あなたが彼女に何をしたか、理解しているのですか？」

静かだが凛として揺るがぬ声音だった。瞳には迷いがなかった。しかしそれが男の怒りを余計に煽ったのか、苛立ったように修道女の肩を乱暴に押した。

「チッ、偉そうに……。女が口出しするな！」

次の瞬間、銀子の体は反射的に動いていた。銀子の蹴りが男の膝を砕くように突き刺さった。悲鳴を上げる間もなく続けざまに男の肩を掴み、地面に叩きつける。鈍い音が路地に響き、男は転がるように倒れ込んだ。銀子は倒れた男を見下ろし、無表情のまま刀の柄に手をかけた。

「な、なんだお前……っ」

男の声は震えていた。銀子の瞳には迷いはない。今ここで手を下しても、自分は何も感

じない。貧民窟で殺しなんて日常だ。……この女を無礼(ナメ)たこいつは殺す。銀子は躊躇いなく鞘から刃を引き抜こうとした。しかし、

「やめてください」

細い手が銀子の腕を掴んだ。――力では遥かに人間を超越する白狼の獣人相手に。

「私は、あなたを殺人者にしたくないのです」

告げる少女の瞳には恐れもなかった。怯えて止めているわけではない。彼女は本気だった。銀子は静かに息を吐いた。ゆっくりと刃を鞘に戻した。

「……気に入りませんね」

「そうでしょうね。でも、お願いします」

路地を沈黙が支配した。小さな聖女の瞳はまっすぐ銀子を捉えて離さなかった。碧色の瞳は揺らがず、ただ銀子の選択を受け止めようとしていた。

「……あなたがそう仰るなら」

銀子の声は冷静だった。男は完全に怯えきり、泥の中を這うようにして後ずさり、やがて逃げるように走り去った。遠ざかる足音が消えると、ようやく修道女は深く息を吐いた。彼女の肩が微かに震えているのを、銀子は見逃さなかった。

「……すみません」

彼女は胸元に手を当て、俯いた。

「何に対して謝っているのです？」

銀子の問いに、少女は息を呑んだように一瞬黙った。ややあって、ゆっくりと口を開い

た。
「私が……。あなたに余計なことをしてしまったのではないかと……。あなたは強いです」
「必要なかったと？」
「……いいえ」
修道服の少女は小さく首を振った。そして、再び銀子の目を見つめた。
「でも、私は。……それでも。ただ見ているだけなんてできませんでした」
彼女の声は小さかった。しかしその奥には凛とした確かな意志があった。
「あなたは強いです。でも、それは……あなたが虐げられていい理由にはなりません」
銀子は言葉をじっと聞いていた。――不意に、背後の静かに蠢く気配を感じて取った。足音もない。研ぎ澄まされた殺意。風に紛れるかのような静かな動きを、白狼の耳と尾は把えていた。
「――――伏せて」
銀子が修道服の少女の身体を押し倒す。同時に甲高い金属音が響いた。瞬間、彼女たちの背後に閃光が走り、直後、銃弾が、彼女たちが立っていた場所を撃ち抜いた。砕け散る石片が周囲に飛び散った。追って乾いた銃声が響き、火薬の匂いが広がった。
「マスケット銃……ですか」
銀子は素早く状況を把握し、次の一手を考えながら低く構えた。マスケット銃は強力だが、装填に時間がかかる。撃ち損じれば隙が

生まれる。路地の闇、黒装束に身を包んだ男が、銃身を下げながら、腰のダガーを引き抜くのが見えた。その瞬間、銀子の足は地面を力強く踏み抜き、男との距離を一瞬にして詰めた。

「――あなたの相手は、私です！」

暗殺者は素早くダガーを掲げ、齢十の白狼を迎え撃とうとする。しかし銀子の一撃は雷光のように速く、鋭かった。刃が男の装束に滑り込むと、ダガーごと男の腕を切り裂いた。深い傷口から血が噴き出した。

「――ッ！」

男は呻き、即座に後退した。しかし銀子はさらに踏み込み流れるような二撃目を放つ。銀色の軌跡が男の腹部を斜めに裂いた。

「……！」男は短く呻き、膝をついた。呼吸は荒く、喉が震え、黒い布に覆われた顔は驚愕に歪んでいた。彼はすぐに立ち上がろうとしたが、銀子はそれを許さない。

「動かないほうがいいです」

銀子は低く囁きながら、鮮血を滴らせる刀を構えた。その表情には冷たい無表情が貼り付いていた。修道服の少女はその光景を、言葉もなく見つめていた。白狼の一撃は正確無比で、ためらいもなかった。

「この、男のひとは……」

少女の声は震えていた。何かを言おうとしたが、言葉がうまく出てこなかった。銀子はゆっくりと刀を振り払い、返り血を地面に散らした。

「マリスベラ協会からの暗殺者ですね、あなた、マフィアに喧嘩を売ったんですか？」
銀子の言葉に修道女は声を絞り出すように違います、私は……」と答えた。声色には苦悶の色が滲んでいた。
「そうじゃない……。私は、ただ……」
修道女の声が小刻みに揺れている。
「ただ、何なんです？」
「私はただ、街の人たちを助けたかっただけで……。私はただ、『モルブルス・ロウザ』を、大疫病を……」
銀子は刃先から滴り落ちる血を尻目に冷たく告げた。
「まあ、あなたがどの身の上なのかは知りませんし、どうしてマリスベラ協会から命を奪われているのかも知りません。しかしあなたは、どうやら頼れる相手もいないご様子。――今日ここで死ぬつもりでしたか？」
小さな聖女は息を呑んだ。
「私は……そんなつもりは……」
「なら、あなたに、白狼の獣人を護衛として雇ってみる気概はありませんか？」
少女の表情は堅かった。「そんな……申し訳ないこと……。巻き込んでしまって……私は、なんてことを……」と躊躇を見せる。
しかし銀子は、彼女の表情が一瞬だけ縋るような、幼さを残した表情を見せたのを見逃さなかった。銀子は己の左腕につけられた籠手を外すと、息も絶え絶えの男の頭部へと振

り落とした。バギンと頭蓋骨を粉砕する軽やかな音が響く。一回、二回、銀子は表情を変えることなく淡々と男の頭蓋へと籠手を振り下ろしていった。籠手が血で染まり、銀子の身体は返り血に染まっていった。形成された陥没骨折は反対側まで到達した。外傷性のくも膜下出血を起こすには十分な威力だ。もう命が助かることはないだろう。銀子は返り血を拭うこともなく、修道女に言葉を続ける。「あなたは命を狙われている。私は、今この瞬間にマリスベラの人間を殺しました。あなたと同じ立場ですね」修道服の少女は悲痛な表情で沈吟する。銀子が言っていることは事実だった。マフィアはメンツの為ならどのような手段も厭わない。きっと、この獣人の少女のことも殺しに掛かるだろう。「でも、それはあなたを巻き込んでしまうことになりますので……」修道女は自責の念に駆られたような言葉を続ける。少女自身、本当はすぐに銀子と別れるつもりだった。護衛を頼むつもりなどなかった。自分が抱える危険に他者を巻き込むことは避けたかった。彼女は大疫病の解決のために、何としてでも「神の薬」の手がかりを探す必要があった。研究を進める中で、国家と対立することも、危険な組織と対立することも彼女は厭うつもりはなかった。しかし自らの行為で見ず知らずの獣人の少女を危険な戦いへと巻き込むことになってしまった。その事実に悲壮を感じずにはいられなかった。

「私の意思ですよ」銀子は幼き修道女の瞳をまっすぐに見つめた。

「私は卑しき獣人であるかもしれません。しかし剣士です。認めた人物のために剣を振るうこと以上の幸福はありません。あなたのためにこの刃を振るわせていただけませんか」

修道女はその言葉を聞き、何も言えなかった。彼女はそのために人を殺したばかりなのだ。

「……お願いします」

沈黙のあと、金髪碧眼の少女は静かに告げた。

「どうか、私と世界を助けてください」

朝の光が街の石畳に差し込む頃、シルヴィアと銀子は市場を歩いていた。出会いから既に三ヶ月が経過していた。知識は豊富であるものの、圧倒的に経験が不足ししているシルヴィアと、戦闘に長けており現実主義的な思考の銀子。彼女たちは遠い街で探窟家として徐々に名を上げている途上にあった。

「銀子さん、今日の朝食はパンでいいですか？」

「……はい」

シルヴィアは、小さなパンの屋台で焼きたてのパンを手に取った。銀子も彼女の後ろに立っていたが、屋台の店主がわざとらしく銀子をちらりと睨んだ。彼女の種族が獣人であることを確認し、鼻を鳴らして露骨に不快そうな顔をする。

「……ちょっと、そこの獣人。パンに毛が入るから、あまり近づかないでもらえるか？」
「……」
銀子は何も言わなかった。こういうことには慣れている。何か反応を返すだけ時間の無駄だと思っていた。だが――彼女の隣のシルヴィア（うるさいやつ）は違った。
「……今、なんとおっしゃいました？」
「は……？」
「銀子さんは、私の大切な仲間です。失礼な態度を取るのなら……あなたのお店から買うものはありません」
淡々とした声だった。しかし、その瞳には静かな怒りが宿っていた。パン屋の店主はシルヴィアの怒気を隠そうともしない雰囲気に気圧され、少し面倒そうに手を振る。
「……悪かったよ。でもよ、獣人なんかと一緒にいたら、あんたの評判も――――」
「もう結構です」
シルヴィアはきっぱり言い放ち、パンを置いて屋台を離れた。銀子は、彼女の後を黙ってついていった。シルヴィアはすぐに別の屋台でパンを買い直し、何事もなかったように微笑む。
「こちらのほうが美味しそうですね、銀子さん」
「……ありがとうございます」
銀子はそう返すしかなかった。些細なことでも、彼女は絶対に引こうとしない。愚かだと銀子自身は思っている。しかしそれがシル

ヴィアらしいところだった。

夜の迷宮の奥深くにある、探窟家ギルド管理の前線基地にある安全地帯（キャンプゾーン）。そこで二人は焚き火を囲んでいた。探索を終えようやく一息つける時間だった。

「……ふぅ」

「お疲れ様でした、銀子さん。今日もたくさん助けて頂きましたね」

シルヴィアは微笑みながら、銀子に手製のスープを差し出した。

「……ありがとうございます」

銀子は静かに受け取り、器を口へと運んだ。シルヴィアの料理は、温かく、優しい味がした。迷宮の冷えた空気を吹き飛ばしてくれるような感覚がした。

「銀子さん、ちょっと聞いてもいいですか？」

「……はい」

「銀子さんのしっぽ、触ってみてもいいですか？」

「……は？」

銀子は無表情のまま己の銀色の尾を見下ろす。もふもふとした、立派な毛並みのしっぽ。彼女自身、特に意識したことはなかった。しかし、人間にとっては珍しいものかもしれない。

「……なぜ、そんなことを？」

「興味があります」

シルヴィアは真剣な顔だった。銀子は少し

逡巡したものの、シルヴィアであれば別に害はないだろうと判断し、静かに頷いた。
「……いいですよ」
「本当ですか？　ありがとうございます！」
シルヴィアは嬉しそうに銀子の尾をそっと撫でた。指毛並みを梳く感触に、彼女は目を輝かせた。
「わぁ……ふわふわですね……」
「……左うですか」
銀子は少しだけくすぐったい感覚に耐えながら、静かにスープを飲み続けた。シルヴィアはひとしきり満足すると、手を引いて莞爾と微笑んだ。
「ありがとうございました、銀子さん」
「……どういたしまして」

何とも言えない奇妙な時間だった。しかし、不思議と嫌な感じはしなかった。それが、シルヴィアだった。

迷宮の深部からの帰り道、銀子とシルヴィアは静かな森の中を歩いていた。依頼の目的は達成し、後は街に戻るだけだった。ふと、シルヴィアが立ち止まった。
「……銀子さん、見てください」
「……？」
銀子が視線を向けると、そこには一本の花が咲いていた。柔らかな白い花だった。シルヴィアはしゃがみ込んでそれを優しく撫でた。
「……綺麗ですね」

「……そうですね」
銀子もまた、その花をじっと見つめた。この世界には汚いものも、美しいものもある。そしてそのどちらにも、シルヴィアは分け隔てなく手を伸ばそうとする。彼女の純粋さは愚かしかった。しかし銀子はその愚かしさが決して嫌いではなかった。
「銀子さん」
シルヴィアは立ち上がり、その花をそっと摘んで銀子の手に握らせた。
「……え？」
「あなたに似合うと思いました」
銀子は困惑したように花を見つめ、そして、軽くため息をついた。
「……私が、花が似合うような女に見えましたか？」
「そうですか？」
シルヴィアはくすりと笑った。
「私はそう思いますけれど」
銀子は何も言わずに花を見つめ続けた。そのまましばらく、二人は無言で歩き続けた。しかし銀子の手中にはシルヴィアが摘んだ白い花が、まだしっかりと握られていた。

二人の日常は、淡々と続いていく。迷宮を歩き、街を巡り、依頼をこなし、また歩く。世界は変わらない。偏見も、差別も、決して消えはしない。しかしシルヴィアは銀子の隣にいる。何の見返りも求めず、ただ当たり前のように。銀子は、そんな彼女の背中を見つ

めながら思った。ああ、この関係が、ずっと続けばいいのに。

足元に広がるのは、どこまでも果てしなく続く花畑。しかし、その美しさに酔うことは許されなかった。この花畑は、ただの楽園ではない。「花の迷宮」の最深部、祈りの花園。そこは、無数の死者たちの骸が埋もれた墓場でもあった。シルヴィアと銀子は、重く沈黙した花園の空気をかき分けながら一歩、また一歩と進んでいった。

「……静かすぎる」

「ええ。まるで、ここだけ時間が止まっているかのようですね……」

奇妙だった。ここまで進んでくる間、彼女たちは数えきれないほどの魔物と戦い、無数の障壁を乗り越えてきた。あの危険な「祝福」の毒根を焼いた。精神に根を張り、観測をトリガーとして対象を即死させる概念実体「視線」を斬り伏せた。花園の地下を走り抜ける巨大な有毒塊根「貪食」も刈ってきた。しかしこの場所だけは、何者の気配もない。敵意ある植物の魔物の気配すら、完全に欠落しているのだ。足元に咲き誇る花々は、どれも大きく、美しく、まるで人の血と肉を吸って育ったかのようだった。

しばらく進むと、地面がわずかに陥没している場所があった。そこだけ、周囲の花々がまばらになっている。土の上には、巨大な金

属の塊のごく一部が埋もれ、僅かに青白い光を放っていた。
「……鉄？　いや、違う。……こんな滑らかな感触の金属、今の技術じゃ作れない」
「……神代の文明が作ったものでしょうね。ジャイロコンパスによれば、件の『神の薬』の眠る場所はここであると考えてよさそうです。……この中に」
　彼女たちは、周囲を調査するうちに、半ば土の中に埋もれた巨大な扉を発見した。扉は、巨大な金属の塊の入り口であると考えて矛盾しない位置に埋もれていた。未知の金属でできたそれは、長い年月を経てなお、強固な姿を保っていた。扉の表面には、摩耗することなく神代の文字が刻まれている。

　シルヴィアは慎重にその文字に触れて解読を進める。やがて「……これは、おそらく『遺伝子研究所』の入り口です」と解読の結果を銀子に共有した。銀子は呆れたような表情を見せると「……ええ、そんなものが花畑の下に埋まってたなんて……」と冗談めかしく返した。
この迷宮は、ただの自然の産物ではない。かつて、この世界のどこかで栄えた文明の遺物。この扉の奥には、それが眠っているのかもしれない。
「……奥に、『神の薬』があるかもしれません」
　そう呟いたシルヴィアの瞳は、決意に満ちていた。

「銀子さん、行きましょう」
扉を押すと、驚くほどあっさりと開いた。何百年、あるいは何千年、何万年も閉ざされていたはずの扉であるにも関わらず。開いた先に広がっていたのは、無機質で静かな空間だった。広さは、外観よりもずっと広いように感じられた。壁面は鈍い色を帯びた金属に覆われ、ところどころ青白く光っていた。不気味な青色の照明だった。
「……神代文明の建造物、ですね」
光源は、天井に取り付けられた半透明のパネルだった。まるで、この施設がいまだに生きているかのように、配管が張り巡らされ、脈動している。そして、空気が異常に冷たかった。
「シルヴィ、気をつけて。……この施設何か変」
そういう銀子の声には、微かな緊張が滲んでいた。
次の瞬間だった――ガクンと、床が揺れたかと思うと一気に下降を開始した。シルヴィアたちの立っていた床が巨大なリフトになっていたようだ。下へ下へと進み、速度が上がっていく。数分後やがて床が完全に停止すると、彼女たちは巨大なホールに辿り着いていた。
そこには、無数の死体が横たわっていた。しかし奇妙な死体ばかりだった。腐敗していない。まるで塩漬けのミイラのように乾燥し硬直した状態を保っていた。

「……ねえ、シルヴィ。この人たち、死んでからどれくらい経ってるの？」
「……ざっと数千年でしょうか」
普通、人間の死体は腐るものだ。しかし、この場所にいる者たちはどれほどの時間が経過しようが腐敗することなくその姿を保っていた。皮膚も肉も硬化し、まるで石のような姿を晒している。
「……ただの研究所じゃないね」
しかし躊躇はなかった。静寂の中、二人はゆっくりと歩を進め始めた。研究所のさらなる深部へと。

シルヴィアと銀子が足を踏み入れた遺伝子研究所の最深部は、まるで生命そのものを拒むかのような冷たさに包まれていた。壁一面には青白い光を放つ配管が張り巡らされ、内部には何かが脈動しているような気配があった。この施設そのものが生きているかのように、冷気と共にわずかな振動が空気を伝っている。どれだけ歩いても終わりが見えない廊下を二人は歩いていた。
「寂しい気持ちになってきますね……」
通常の迷宮とは違う。ここには魔物すら生息していない。生命もなければ死もない。ただ莫大な時間の中で、忘れ去られた文明の遺物として存在のみを許された空間だった。しかし、彼女たちが求めるものも先にあった。
「神の薬」それを手に入れるためには、この異質な空間の最奥まで進まなければならな

い。

二人が進んだ先には、また広大なホールが広がっていた。そこには幾百もの透明なカプセルが、整然と並べられていた。冷却装置が作動し続けているのか、辺りは白い霜に覆われていた。カプセルの中には……人がいた。

「……っ！」

銀子の手が刀の柄に触れる。カプセルの中で眠る人々。それは、生きているのか、死んでいるのかすら分からない。男、女、老人、子供。皆、目を閉じたまま、無表情に横たわっていた。まるで何千年も前の死者が、そのまま保存されているかのように。

「……これ、全部……」

「ええ。おそらく『実験体』でしょう」

シルヴィアは静かに、カプセルの一つに手を伸ばした。表面には、神代文明の文字が刻まれていた。

「……遺伝子操作の実験体。『失敗』って書いてありますね」

銀子の口調が低くなる。

「……私たちが歩いてきた道に転がっていた遺体も、そういうこと？」

シルヴィアは「さあ。わかりません」と首を振った。しかし彼女たちの意見は、この怪しい研究所から早く目的のものを発見し、撤退することで一致した。銀子はカプセルの中に眠るヒト型実体の中に、銀子と同じ白狼種のものも認め、気分が悪そうにホールから背

を向けた。

やがてシルヴィアたちの前には、厳重に封印された扉が現れた。シルヴィアは聴診器を耳に装着し扉に押し当てる。そしてコンコンと扉を叩き銀子に指示を出していく。幸いなことに扉は物理的手法によって厳重にシーリング密閉されているだけであり、開けること自体は可能なようであった。シルヴィアが出した指示の通りに銀子が扉を操作していくと、やがて、大きな音を立てて、巨大な金属の扉が、左右にスライドして開いていった。その瞬間、扉の中から冷気が吹き出す。その冷たさは、まるで氷の洞窟のようだった。真冬の外よりも、はるかに冷たい極寒の空間が中に広がっていた。二人が足を踏み入れると、そこには金属の棚が無数に並べられていた。棚の上にはガラスの容器に詰められた何かが、一定間隔で収められていた。シルヴィアは歩を進めると、目当ての物がある棚の上に安置されているガラス容器を発見する。それを慎重に手に取った。――ラベルには、こう記されていた。

【Streptomyces Griseus――抗生物質生成株】

「……あった」

シルヴィアの声が、微かに震えた。これこそ『神の薬』を生み出す鍵となるアーティファクト。大疫病を克服し、多くの命を救うことができる唯一の物質。彼女が数年来探し求めてきたものだった。

「……これを持ち帰れば、人々を救える」

静寂が支配する遺伝子研究所の最深部。冷たい空気が流れる冷凍倉庫。わずかに響くのは二人の呼吸音と、青白い照明の微かな唸り声だけ。「ねえ」薬を発見し弛緩する空気に銀子の小さな声が水を差した。銀子はこの冷凍倉庫の一角に氷漬けの遺体を発見した。死者たちの顔は、苦痛と絶望の表情で固まり、指先は今も助けを求めるように宙を彷徨っていた。

次の瞬間。まるで待ち構えていたかのように、穏やかな声が地下に響いた。

「ふふ……おめでとうございます♡　シルヴィア様」

美しい、まるで鈴のような綺麗な女性の声だった。声は楽しそうに言葉を紡ぐ。

「本当にここまで辿り着くとは……大したものですね」

シルヴィアが振り返ると、そこには一匹の女悪魔が悠然と佇んでいた。美しく妖艶な傾国。漆黒のドレスに身を包む彼女は、まるで貴婦人のように微笑んだ。

「あなたは……！」

シルヴィアの背後で、いつでも刀を振りぬけるよう臨戦態勢に入る銀子。対する女悪魔は冷凍倉庫の棚の一つに腰掛け脚を組みまるで余興でも眺めるかのような態度で二人を俯瞰していた。

「こうして新しい客人を迎えるのは四〇〇〇

年ぶりですよ。あなたたちがここまで来るなんて、私も感慨深いものです。ほら、先客さんもよく頑張ったねと褒めてくださっていますよ♡」

銀子の視線が、ゆっくりと氷漬けの死体へと向けられる。その瞬間全身の毛が逆立った。それはシルヴィアと銀子によく似た修道女と白狼の獣人の死体だった。ただの他人の空似ではないことがすぐにわかった。

「リリス……花の迷宮に眠る大悪魔。どうして、こんなところに⁉　そして、この死体たちは！」

銀子が低く唸るように叫んだ。リリスは、くすくすと笑いながら死体を指でつつき弄ぶ。

「さあ、どうでしょう？　これが『過去のあなたたち』なのか、それとも『これからのあなたたち』なのか……私にも分かりませんね」

嘯きながら、リリスはまとっていた黒の外套を翻した。

「もっとも、それを知ることに何の意味があるでしょうか？　だってどのみちあなたたちはここで死ぬのですから。――――ご存知かとはおられますが、私は、花の迷宮のラストボス、花の悪魔リリス。あなたがたを生かして返すつもりはございませんので」

「……わかった。あなたは敵だね。わかりやすい」

銀子は次の瞬間に抜刀し咆哮した。刀を全

力で投擲する。それは鋭い一撃だった。直線の軌跡を描いたそれは、リリスの頭部を確実に捉えて射出された。「ふふっ、いいですねぇ。勇ましい」しかしリリスは当然切っていたかのように、首を傾けて投擲を回避した。刀が、冷凍倉庫の金属天井に突き刺さった。しかし銀子の表情に焦りはなかった。白狼の身体能力を以て一瞬でリリスとの距離を詰めると、右手に装備した籠手の内側で拳を握り締め、本気のストレートをリリスの顔面に叩き込んだ。

「なっ！」

しかし次の瞬間、嫌な予感がして銀子はバックステップをとる。間に合わなかった。確実にリリスの鼻の骨をへし折るつもりで打撃を放ったにもかかわらず、銀子はまるで水面を殴っているかのような感覚しか得られなかった。リリスが左手で銀子を殴る。リリスの拳は銀子の右肩を貫通し、彼女の肉を抉っていた。

「おや、素早く飛んで避けてくれてありがとうございます。これであなたを即死させるには至らなくて済みましたね」

銀子は即死に近い損傷を受けたのにも拘わらず、素早いバックステップで距離を取り直し、再び構えた。血が溢れる。銀子の身体には、明らかなダメージが刻まれてしまった。

「銀子さん！」悲鳴を上げるシルヴィアを、リリスが微笑んで眺めている。まるで遊びに付き合わせるように。

「ほらほら、もう次の攻撃が来ますよ？」
リリスの拳から血飛沫が噴き出し、それが巨大化した。「――ッ！」銀子は、すぐさま両手を構えて防御の姿勢を取る。直後、大悪魔の拳が銀子の身体を捉えた。凄まじい衝撃波と共に、血飛沫を撒き散らせて吹き飛んでいく。「――ッッ！」銀子は壁へと激突した。背骨が軋み、内蔵を激しく揺さぶられた。口から鮮血が零れ落ちた。全身の骨という骨が砕け、内臓を破裂させながら冷凍倉庫の奥へと飛ばされていった。リリスはすぐさま銀子を殴り飛ばし追撃する。
「ああ……これは……いいですね。ええ」
リリスは血に染まった己が両拳をじっと見つめた。白狼の血で濡れた両手に、恍惚とした笑みを浮かべながら、ゆっくりとそれを口に運びその味を堪能した。
「銀子さん！」
シルヴィアが駆け寄ろうとするが、リリスは指を一本立てた。
「おっと、動かないでください。今、彼女の顔をもっと砕いてもいいんですよ？」
銀子は歯を食いしばりながら、必死に立ち上がろうとする。
「お前……！」
だが、その言葉は声にはならなかった。
「ふふ、元気があって大変よろしいです」
次の瞬間、リリスの細い足が銀子の顔面に振り下ろされた。パキンと軽やかな音が鳴り響いた。顔の骨が折れる音だった。白狼の頭

蓋を陥没骨折させるほどの衝撃に倉庫の金属の床がたわむ。銀子の口内から吐瀉物がこぼれた。血と一緒に飛び散り床に広がっていった。しかし、彼女はそれでもまだ生きていた。立ち上がろうと、再び腕と足を必死で持ち上げた。

「ほう……」

リリスが目を丸くして驚いたような笑みを向ける。

「銀子さん！」

次の瞬間、シルヴィアの声が冷たい倉庫に響いた。シルヴィアの小さな口が祝詞を紡ぎ、呪詛が唱えられた

「ペイントレード」

銀子の「痛み」がシルヴィアの身体へと転写された。銀子の傷がみるみるうちに癒えていった。次の瞬間、白狼は身体を跳ね起こすと、全力で拳を握り締め、一瞬でリリスとの距離をゼロとした。拳打が繰り出される。その速度は音速を超えた。リリスが笑う。彼女の拳は確かに悪魔を捕らえた。その腹を確かに捉えた。

「ッ……！」

リリスは銀子の一撃を、正しく喰らっていた。銀子の腕には紛れもない手ごたえがあった。しかし……。

「ええ、ええ、そう来なくては。そうこなくては……おや？」

次の瞬間シルヴィアの膝が崩れた。銀子の「痛み」を肩代わりしたのだ。口から大量の

血を吐きながら、しかし凛とした態度は崩さない。
「私は、あなたを……救え……ます、から……」
「……っ、もういい、シルヴィ！　逃げるぞ！」
銀子は即座にシルヴィアを抱え、撤退を判断した。
「もう少しくらい楽しめますよ？　ほら」
リリスが拳を握ると、その場の空気が一変した。凄まじい威圧感。まるで全てを押し潰すかのような圧倒的存在感。リリスの身体が発するオーラが、辺りにいる生命の存在感を塗りつぶし、飲み込んでゆく。冷凍倉庫には、もはやリリス以外の何者の生命も感じられないような錯覚すら覚える。リリスは、一瞬で距離を詰めた。「さて、逃げられるとでも？」銀子に追いついたリリスの脚が振り抜かれる。直後、凄まじい速度で蹴りが放たれ、シルヴィアの腹を切り裂いた。
「あはぁ……！　これが楽しいっていう気持ちなんですねぇ！」
シルヴィアは鮮血とともに床を転げ、悲鳴すら上がらなかった。そんなシルヴィアを見下して、悪魔は嗤った。銀子はシルヴィアを背後にかばい雄叫びをあげる。それを眺めつつ、リリスはニィ、と歪んだ笑顔を作り出すばかり。

銀子は肩で息をしながら、震える手でガラ

ス瓶を握りしめた。どうやらその表面には「Streptomyces griseus」とラベルされているらしい。小さな瓶の中に揺れる淡い液体。多くの命を救うはずの神の薬だった。だが銀子の胸を支配するのは勝利の喜びではなかった。

シルヴィアが限界だった。彼女の修道服は自らの血に染まり、痛みに耐えかねて肩が小さく揺れていた。肌は青白く、唇は乾いていた。しかし彼女の瞳は最後まで凛とした様子を崩さなかった。

シルヴィアたちは神の薬 Streptomyces griseus の保存されていた冷凍倉庫から撤退を決めた。しかし撤退の成功可能性はゼロに近しいものであった。リリスからの猛追を銀子が白狼の身体を犠牲に受け止めつつ、その銀子のダメージをシルヴィアが肩代わりする。なんとか一歩ずつ、冷凍倉庫の外の地下通路まで撤退することに成功した。彼女たちとて地上に帰ることはほぼ不可能であり、蜘蛛の糸のような細い希望を餌にリリスの掌の上で遊ばれているに過ぎないことくらいは理解していた。しかし可能性がゼロではない以上、シルヴィアは決して諦めなかった。シルヴィアが諦めない以上、銀子としても諦める理由はなかった。

しかし、度重なるペイントレードによって銀子の傷を肩代わりした結果、カースメーカーの少女の肉体は限界に達しつつあることは明らかだった。シルヴィアは覚悟を決めたよ

うに息を吐くと、全身から血を流しながら、莞爾として銀子に告げた。
「……地上には行きません」
その言葉に、銀子の足が止まった。
「……いくよ」
彼女の腕を掴み、銀子は必死に呼びかける。しかし、シルヴィアは静かに微笑んで首を振った。
「私は、もう助かりませんよ、銀子さん」
静かな言葉だった。銀子はその言葉の意味を理解するのに、数秒の時間を要した。シルヴィアはゆっくりと、震える指先で白いカプセルを取り出した。冷たい光を帯びた薬剤だった。
「それは……？」
「神代のアーティファクト、私の切り札です」
淡々とした声だった。銀子の背筋が凍りつく。
「待て……そんなものを……」
銀子の手が、シルヴィアを止めようと伸びた。しかし、シルヴィアはそれよりも速く、カプセルを口へ運んだ。乾いた音が響いた。まるで時が止まったかのような静寂の中、奥歯で砕かれたカプセルから白い粉が零れ落ち、シルヴィアの唇の端を汚した。
「――っ！」
銀子の目が見開かれる。シルヴィアの瞳が、冷たい光を宿した。
「……強毒性炭疽菌カプセル。この死の病は

私の肺に定着しました。私は死になったのです」
　シルヴィアは微笑んだ。その微笑みは、どこか穏やかで、どこまでも遠かった。
「……何を」
　銀子の声は震えていた。
「私はもう助かりませんよ。殿を務めます。あなたを死なせないために」
「……馬鹿！」
　拳を振り上げる。銀子の怒声は、苦しみに満ちていた。シルヴィアはただ、穏やかに彼女を見つめた。銀子の拳が、震えたまま下がった。シルヴィアの手が、静かに銀子の頬を撫でた。死の冷たさを纏った手だった。銀子は何かを言おうと口を開いた。しかし、その言葉は声にならなかった。銀子の手が震えた。シルヴィアの頬を撫でようとするが、その肌はひどく冷たかった。まるで、もう別の世界の住人であるかのように。
「シルヴィ……やめろ、考え直せ。お前がそんなものを飲む必要なんて……！」
　銀子は必死に彼女の腕を掴むが、シルヴィアは穏やかな微笑を浮かべたまま、静かに首を振った。
「……銀子さん、あなたは生きてください」
　彼女の瞳は、すでに迷いを捨てた決意に満ちていた。
「へえ、そんな隠しダネを持っていたんですね。命を捨てて助け合う愛！　まさしく感動的です。このリリス、少し泣いてしまいまし

た」

リリスの嗤う声が響いた。悪趣味な女王は楽しそうに嘯きつつ、その手で自らの目を擦っているフリをした。銀子は、そんなリリスを憎悪で煮詰められた目で睨みつけた。

「ペイントレード」

小さな祝詞が地下に響いた。シルヴィアの体が空気と混ざり合うように溶け始め、淡い闇の波が彼女の周囲に広がった。神代に作成された強毒性炭疽菌がシルヴィアを介して研究所を侵食していく。

「私はここで殿を務めます」

シルヴィアはゆっくりと銀子の肩に手を置いた。指先はひどく冷たい。しかし、その掌は確かに銀子を支えていた。

「だから、行ってください」

銀子は歯を食いしばる。

「あなたを……置いていけるわけが……！」

「あなたが持っているのは、世界を救う鍵です」

銀子の手中には、研究所最奥で見つけた『神の薬』がある。今まさに世界を覆う疫病を食い止める唯一の手段だった。

「もしあなたがここで死ねば、私の死は無意味な犠牲になってしまいます」

シルヴィアの声は、静かで、それでいて強い意志を感じさせた。

「行ってください。銀子さん」

銀子の拳が震える。彼女は何度もシルヴィアを見つめ、何かを言おうとしたが、言葉に

ならなかった。
「またね。シルヴィ」
銀子はそう言い残し、背を向けた。次の瞬間、リリスが動いた。「逃がすと思う?」と嗜虐の笑みを見せる。黒い影が銀子に襲いかかった。腕を遮るようにシルヴィアが前に出た。シルヴィアの魔力が膨れあがり研究所に満ちる死の気配が一気に高まった。
「リリス様」
淡々とした口調だった。
「……あなたの相手は、私です」

半日後。銀子は花の迷宮最深部からの帰還に成功した。Streptomyces griseusと呼ばれる神代のアーティファクトは王立研究院の信頼できる研究者に託された。一年後、銀子が持ち帰った「遺物」を元に作成された『神の薬』は瞬く間に世界中に広まった。大疫病、モルブルス・ロウザに苦しんでいた人々は救われた。感染者の数は減り、死者の数は激減した。モルブルス・ロウザは死の病から、治療可能な病となった。街には久しぶりの笑顔が戻った。
「救世主だ!」
「あの人が世界を救ったんだ!」
銀子の功績は称えられ、王国から獣人初の第三等勲章を授与された。しかし英雄の顔に笑顔はなかった。銀子はひとり夜の街を歩

き、静かに空を見上げた。風が優しく銀子の髪を撫でた。星は地上のことを何も知らないかのように今日も輝いていた。

「あはは、帰ってきちゃいました。……銀子さん。二年ぶりですね」

修道服を見に纏った少女はいとけない表情を浮かべ言葉を紡いだ。まるで懐かしい友人に向けた挨拶のような音色だった。美しい声だった。少女は申し訳なさげに眉尻を歪めている。しかしどこか芝居じみた表情だった。……彼女は本心では何一つ申し訳ないと思っていないことが銀子にははっきりとわかった。どろりと濁った碧の瞳。かつての透き通るような輝きはそこにはなく執着と歪んだ情念が絡みついていた。

「お久しぶりです。私はシルヴィア・サンティ。かつては『花の聖女』と呼ばれていました。あなたからは……シルヴィ、と呼ばれていましたね」

「……ッ！」

銀子の指が脇に帯びた刀の柄へとかかった。彼女の声・顔・仕草、すべてが記憶に刻まれたシルヴィアそのものだった。しかし「それ」は決定的にシルヴィアと異なる存在だった。シルヴィアはあの時、確かに死んだ。花の迷宮の地下研究所で命懸けで殿を務め、魔王リリスに最後の一矢を放った。……もし目の前の存在が彼女の名を騙る「偽物」であれば迷うことなく斬り捨てる。銀子はその覚悟で刀を握る。しかしそうではない、眼前の少女はたしかにシルヴィア・サンティで

あると銀子の本能は告げていた。少女は楽しげに、しかしどこか挑発するような態度で言葉を続けた。

「やだなあ。銀子ちゃんがだーいすきだった女の子、あなたがあれだけ慕ってきたシルヴィですよ♡　……ほんの九ヶ月で、私のことすっかり忘れちゃったんですか？　悲しいなあ♡」

シルヴィアはわざとらしく首を傾げた。仕草はかつてのシルヴィそのものだった。銀子は認めたくなかった。しかし眼前の少女はたしかにシルヴィア・サンティその人だった。

彼女の頭には黒い山羊の角が生え、背後にはしなやかに揺れる尻尾があった。しかしそれはもはや些細な問題であった。彼女はあまりにも容貌や仕草はシルヴィアであるにもかかわらず、彼女の中身はすっかりと変わってしまったかのようだった。銀子の手が刀の柄を強く握りしめた。

「それとも……忘れたふりをしたいだけ？」

シルヴィアは笑っていた。かつて銀子が愛した優しく聡明だった少女の面影を薄く残しながら。

「ああ、なんで生きてるのかって？」

シルヴィアは微笑んだ。どこか気怠そうな、どこか楽しそうな、妖艶な笑みだった。

……昔の彼女にはなかった表情だった。

「結局、私は死に損なったのですよ。

……ねえ銀子さん。私はたしかに覚悟を決めて、あなたを生かすために殿を務めました。そして隠し持っていた強毒性炭疽菌を用いて魔王リリスに一矢報いたつもりでした。でも……」

そこまで言ってシルヴィアは肩をすくめた。

「結局そんなものリリス様にとっては大した問題じゃなかったみたいですね。私が強毒性の炭疽菌を彼女の体に『転写（ペイントレード）』しても、リリス様はほんの少し眉をひそめて、嫌そうな顔をしただけでした。そしてこう言ったんです。『薬を探しておかないとなあ』って。ねえ、ひどいでしょう？　私が死を覚悟して、血を吐きながら放った一撃が、それだけだったんですよ？　……でもね、それで終わりじゃなかったんです」

修道服の少女はゆっくりと自分の胸元に手を当てた。まるでまだ心臓が脈打っていることを確かめるように。

「どうやって生き延びたのかって？　それは、もちろん必死に命乞いしたからですよ。リリス様に♡　……ねえ、銀子さん♡　私、どういう言葉を口にしたと思いますか？」

シルヴィアは軽く首を傾げると、どこか楽しげに問いかけた。

「『申し訳ありませんでした』って、ちゃんと言いましたよ。人間風情が刃向かってしまって本当に申し訳ございませんって。命が惜しくて仕方がない哀れな存在としてリリス様に

隷従を誓って、彼女の靴を舐めました。
……そしたらですね、リリス様は私のことをいたく褒めてくださったのです。『あなたの死は無駄ではなかった。時間を稼ぎ、結果的に『Streptomyces griseus』を持ち帰ることができたのだから』って言って頭を撫でてくださいました。
……もちろん、リリス様は私が命乞いした理由なんて、とっくに見抜いていましたよ。私が何のために、どんな目的で生き延びようとしているのか、すべてお見通しでした」
修道服の少女は頭に手をやり、くるりと指先で山羊の角をなぞった。
「私はリリス様から素晴らしい褒美をいただきました。……リリス様は、私のことを、一塊の魔族にしてくださったのです。
体内の細胞の一つ一つを、研究所に貯蔵されていた毒液を用いて魔族のそれに置換していくのです。遺伝子配列も書き換えられて……結果として、もう人間の子供を産むこともできなくなりましたね」
シルヴィアはゆるく尻尾を揺らし微笑を浮かべた。
「この山羊の角と尻尾ですか？　ああ、これはね……ただのフレーバー的なものです。その方が聖女が『堕ちた』感じがしてオシャレでしょう？」
指先で角をなぞりながら、まるで気にしていないような素振りで嘯いた。
「でもね、一番の変化はそこではありませ

ん」

シルヴィアは一歩、銀子へと近づいた。

「銀子さん♡　クイズをしましょう。私は何の魔族になったと思いますか？」

銀子は答えない。シルヴィアはくすくすと笑い、答えを告げた。

「サキュバスです」

「……ッ！」

銀子の手が、刀の柄を強く握りしめる。

「人間の夢に入り込み、精神を食らう魔物。精神汚染のスペシャリスト。そして……性行を通じて他者の生命力を奪い、支配する存在♡　……どうです？　面白いでしょう？」

シルヴィアはくすくすと笑い、ふと、唇を舐めるように指でなぞった。

「ねえ銀子ちゃん♡　私が何人の人間と『交わった』か、当ててみます？

えへへ。残念ですね。正解は、二百十六人です。……あは？　銀子ちゃん反応かっわいー♡」

シルヴィアは銀子の様子をニヤニヤと伺うと「では追加問題です♡」と言葉を続けた。

「私が今ここに来るまでに何人の人間を殺してきたか……わかりますか？　……はい、不正解♡

正解は――――二百十六人でした♡　ざーんねん！　えっちした相手はもれなく吸い殺してしまいました♡」

シルヴィアは、満足げに笑みを浮かべた。

シルヴィアは嘘のない瞳で銀子を見つめる。そして「……美味しかったですよ」と少し気まずそうな笑みを浮かべて見せた。

「……私も最初は淫魔化に必死に抵抗したのですよ」

ふわりとした笑みを浮かべながら、シルヴィアは語り始めた。どこか懐かしげで、どこか他人事のような冷たい語り口だった。

「改造された直後の私は、愚かしくも、まだ人間のつもりでいました。……私はどれだけ傷つこうが、どれだけ蔑まれようが人間性だけは失うまいって思ってたんですよ♡

でも……待っていたのは『空腹』でした。

最初はただの飢えだと思っていました。……普通の空腹感、そう思っていたんです。だけど違った。人間の食事では何も満たされないんです。……たくさん試しました。パン、スープ、肉……どれも、口に入れた瞬間、何の意味も持たないただの物質になった。何を食べても、まるで泥を噛んでいるみたいで……お腹の底にぽっかり穴が空いたような感覚がずっと続くのです。

……だったら我慢すればいいって思いました。これまでだって耐えてきた。痛みなんて慣れている。空腹なんてどうにでもなるって」

かすかに笑いながら、シルヴィアは肩をすくめた。

「二週間……私は、何も食べずに耐えました。これでも結構頑張ったのですよ？

……銀子さん。お腹が空きすぎると人間って壊れていくことを知っていますか。初めはただ身体が震えるだけでした。次に目の前が霞んで何を見ても焦点が合わなくなって頭がぼんやりするようになりました。……そのうち足元がふらついて呼吸をするのも苦しくなってきました。まるで体の内側から崩れていくみたいになりました。でも何より恐ろしかったのは……夢でした。

……毎晩、私は夢の中で人間を食べました。目の前には誰かがいる。男か女かもわからない。私はその首筋に血の口付けをして……口付けを交わして唾液の混じり合う味がして……お腹が満たされて……ああ、幸せだなって思うのです……でも、目が覚めると、何も変わっていない。ただ、ますます飢えが強くなっている」

銀子は無言のまま、シルヴィアの言葉を待った。

「……そして、あの日。私はある男と同じ部屋に閉じ込められました」

銀子の表情がかすかに強張った。

「彼は、探窟家だったのでしょうね。ぼろぼろの装備をして、私より少し年上で、いや、年下だったかもしれません。怯えた顔をしていました。きっと私と同じようにリリス様に捕えられたのでしょう。

私ね、そのとき必死でしたよ。『お願いだか

ら近づかないで』って。『私はもう、あなたを傷つけたくない』って。……でも、そんなの無意味でした。私はもう限界でした。お腹が空いて、頭がどうにかなりそうで……。

だから、最初は、夢だと思ったんです。いつもの夢の続きだって思ったんです。少し乱暴に、男の首筋に歯を立てて、血の味がして……」

ふっと、シルヴィアの口元が歪んだ。

「現実であることに気づいたんです。私はね、その瞬間、心のどこかでは気づいていました。『やめなきゃ』って。でも止まらなかった。気づいたときにはもう彼の鼓動はなくなっていて、私は彼の上に横たわっていて……

……『ああ、美味しかった』って、思ってしまったんです。そのとき、ばかな私でもさすがに理解しました。私は、もう人間じゃないんだって。

……一度こうなったら、もう抵抗する気力なんて根こそぎ持っていかれました。それからは、ただひたすら、運ばれてくる『餌』を食べました。食べて、食べて、食べて、食べて、食べて、……もうそこに何の感慨も湧きませんでした。

やがて、リリス様は私を解放してくださいました。私は花の迷宮の奥深くでひっそりと暮らすつもりでした。しかし生きているとお腹が空くんです。そしてそんな時に自らこの迷宮に足を踏み入れてくる探窟家の姿があって。私は彼らを誘惑して、……食べて、

また食べて……。そして、同じ味に飽きてきた頃に、ふと気づいたんです」

シルヴィアは、遠い過去を懐かしむような視線を銀子に向け、薄く微笑みながら語りを続けた。

「……あれ？　そういえば、私って、銀子ちゃんのこと、好きだったなあ、って」

銀子の指が微かに動いた。しかしシルヴィアは銀子の態度など気にも留めない。

「え？　知らなかったんですか？」

シルヴィアは嘲るように、くすくすと微笑んだ。

「私、ずっと銀子さんのことが好きだったんですよ？　ずっと、ずーっと。……ねえ、まさか本当に気づいていなかったのですか？」

ふふっと笑いながら、彼女は首を傾げる。

「両思いだったのに？」

銀子の表情は、ぴくりとも動かなかった。それを面白がるようにシルヴィアは続けた。

「だって、銀子さんは恋愛感情を隠すのが下手くそですからね♡すぐ顔に出るし、行動にも出る。気づかないふりをしてあげるのが、ちょっと楽しかったくらいです♡

……だからこの冒険が終わったら、銀子に告白しようって決めていました。ちゃんと『好きです』って。『あなたの女にしてください』って言いたいなって。

そのために、どんな手を使ってでも生き延びようって、必死だったんです」

銀子の眉がわずかに動いた。
「命乞いをした理由？　それは、あなたに好きって伝えるため、って言えば……かわいいですか？」
シルヴィアはふわりと空虚に笑った。
「えへへ……ですけどね」
シルヴィアの口調が、少しずつ落ち着いていった。冷たく静かな語り口へと変化していった。
「結果的には、間違いだったんでしょうね。……昔、私は銀子さんのことが好きだった。それは今でも覚えています。今の私も……たぶん、銀子のことは好きですよ？」
シルヴィアの碧の瞳は銀子を映しながらも、どこか遠くを見つめていた。
「でも、それがどんな『好き』なのか、もうわからない。たとえば……犬や猫を見て、『かわいいなあ』って思うじゃないですか」
シルヴィアは、くすくすと笑う。
「そんな感じです。銀子ちゃんはかわいいし、魅力的だし、性的にも抱けますよ？」
シルヴィアは、あえて囁くような口調で告げる。
「でも……それは、恋愛の『好き』とは、たぶん違う。つまり、今の私は銀子さんを愛していないんです。……昔は違ったのに、ね」
シルヴィアはどこか寂しげな表情を浮かべ言葉を紡いだ。
「だからどうしたって話ですよね。でも、

私。ずっと考えてたんですよ」
シルヴィアは、ゆるく肩をすくめ、楽しげに微笑んだ。
「今の私が、一番最高の気持ちで死ねる方法って、なんだろうって」
その言葉に銀子の指が微かに動いた。しかしシルヴィアはそれすらも愉快そうに受け流しながら言葉を続けた。
「……今の私は、ただの怪物です。自分の意思で、何百もの命を奪いました。人間の倫理観なんて、もうとうに壊れてしまった。でも……もし昔の私の理性が、ほんの少しでも残っているのなら？　……きっと、こう答えると思うんです。『あなたに殺されたい』って」

銀子をじっと見つめるシルヴィアの瞳の奥には、何もなかった。絶望も、後悔も、悲しみすらも。ただ、淡々とした結論がそこにあるだけだった。
「ねえ、銀子さん」
シルヴィアは、わずかに唇を歪めた。
「どうせ殺されるなら、準備は丁寧にしておいた方がいいですよね？　だから……先に邪魔な人たちはぜんぶ消しておきました」
シルヴィアは一本の指を立てゆっくりと数え上げる。
「まず王国軍参謀本部。ここは銀子さんのことを、ただの獣人の傭兵としか見ていなかった。王国の内情を知るあなたは彼らにとって

危険な存在でした。いずれ彼らはあなたを疎んじるでしょう。だから殺しました。次にかつて敵対したマフィアのマリスベラ協会幹部十六名。邪魔でしたね。だから全員殺しました」

シルヴィアの声は、淡々としていた。あまりに軽やかで、恐ろしいほどに無感情だった。

「ディニスタ銀行ペタロ・フロラリス支店長。この人は、王国と裏でつながっていました。協会とも取引がありました。彼の口座を通じて動く資金は邪魔でした。……だから殺しました」

指が一本、また一本増えていった。

「ね？　これで、銀子さんの敵は、ぐっと減ったんじゃないでしょうか？」

シルヴィアは、くすくすと笑いながら、銀子の反応をうかがった。

「王国も、きっと必死になって私を討伐しようとするでしょうね。――でも、それでいいんです」

シルヴィアはまるで他人事のように語った。薄く微笑みながら、銀子へと歩み寄った。

「ねえ、銀子さん」

今度は、どこか優しい声音だった。

「どうか、私のことを一思いに殺してくれませんか？　あなたになら、殺されたい」

かつて銀子にとって、シルヴィア・サンテ

ィは聖女だった。どこまでも献身的で、誰よりも優しく、それでいて強い信念を持ち、自己を犠牲にすることを厭わない。銀子はシルヴィアの高潔な魂に心を奪われたのだった。

……最初にシルヴィアに対して抱いてきた感情が崇敬であったことはよく覚えている。しかし時が経つにつれ、彼女がどれだけ愚かで、どれだけ無茶で、どれだけ鈍感で、どれだけ考えなしで、どれだけ愛おしい存在かを知ってしまった。――――花の聖女を守るのではなく、ただの少女・シルヴィアを守りたくなってしまった。銀子は静かに息を吸い込んだ。意を決するような、迷いを断つような、深く、静かな呼吸だった。

「……わかりました」

声に迷いはなかった。銀子は刀の柄に指をかけた。やがて銀色の刃が月明かりを受けて鈍く輝いた。シルヴィアは、ふっと微笑んだ。

「……ありがとう、銀子」

銀子に向けた静かな笑みは、かつてのシルヴィアと同じ視線だった。銀子は刀を構えた。刃の切っ先が、シルヴィアの首元を捉える。シルヴィアはそっと目を閉じた。まるで安らぎに身を預けるように。銀子は一歩踏み込んだ。刀が音もなく振り下ろされた。

……刃は止まった。銀子の手は震えていた。銀子は噛み締めるように唇を結んだ。自分がなぜ止まったのか、頭では理解してい

る。これは間違いだ。銀子はシルヴィアの最期の願いを叶えるべきだった。自らの死がシルヴィアの救いになるのならば、銀子は躊躇いつつも斬るべきだった。……カシャンと、刀が鞘へと戻る音が虚に響いた。

シルヴィアは、そっと目を開けた。銀子の顔を見上げた。そこにあったのは、銀子の諦めきったような表情だった。

「……次は、何を斬ればいい？」

遺伝子研究所の奥では、無数の男女が拘束され、終わることのない「実験」と呼ばれる拷問を受け続けていた。決して死ぬことは許されない。苦痛と恐怖を刻み込まれた悲鳴は、この城の空気の一部と化していた。彼らはただの「素材」であり、ただの「研究材料」でしかない。この闇に満ちた城に、ついに異変が訪れた。玉座に座る魔王リリスは、愉悦に満ちた表情で訪れた客人を俯瞰した。

「……やっと来ましたか」

その声は、まるで予定調和の劇の幕開けを楽しむ観客のようだった。リリスの視線の先に立つのはシルヴィア・サンティ。かつてリリスが淫魔の身体を与えたカースメーカーの少女だった。シルヴィアの漆黒の修道服は夜

闇に溶け込み、頭の角はさらに歪み、尻尾は意志を持つ蛇のように蠢いていた。

「こんばんは、リリス様」

シルヴィアは莞爾とした表情を崩すことなく、まるで礼儀正しい客人のように挨拶をした。傍らには一匹の獣がいた。白狼の少女は鎖に繋がれていた。首輪をしっかりと嵌められたまま、シルヴィアのすぐそばに控えていた。両手首には頑丈な魔法刻印の施された拘束具が嵌められ、足にはシルヴィアが許さない限り、一定以上は離れられない呪縛の鎖が巻きつけられていた。銀子は、静かにシルヴィアの方を仰ぎ見た。白狼の視線には、深い罪悪感と安心感が渾然一体として入り混じっていた。

「銀子さんはとてもよく働いてくれるんですよ？」

まるで恋人に甘えるような声でシルヴィアは囁いた。

「私のために剣を振るって。何百人も殺して……。私のために。何度も血に染まって……♡」

銀子は罪悪感でいっぱいの視線でシルヴィアを見つめた。だが、その瞳の奥には否定しきれない感情があった。白狼の少女は、シルヴィアから向けられる愛情が嬉しいと思ってしまっていた。

「……シルヴィが望むなら。ね」

銀子は、まるですべてを諦めたかのように

自嘲げに呟いた。シルヴィアは鎖を優しく引いた。
「銀子さん、いきましょう?」
銀子の足がゆっくりと動く。抵抗しようとする意思は、すでにどこにもなかった。リリスは、その光景を満足げに眺めた。
「まったく、最高の結末じゃないですか?」
シルヴィアは銀子の首輪を撫で、恋人のように指を絡めた。
「私は、この子を愛していますから」
銀子はゆるく目を閉じた。シルヴィアの愛を拒むことはもうできそうになかった。どこで間違ったのだろうか。罪悪感に苛まれながらも、それでも銀子はシルヴィアのことを求めてしまう。シルヴィアは銀子の苦悩する表情すら愛おしそうに視線を送る。
「さて」
シルヴィアの視線が、かつて少女たちが敗北を喫した女悪魔に寄せられる。
「リリス様……あなたを殺しに来ました」

「ああ……やはり、そうなるのですね」
決着は一瞬だった。魔王リリスはシルヴィアに膝を屈し、静かに目を伏せた。彼女の声は諦観に満ちていたが、どこか歓喜も混じっているようにすら聞こえた。
「ええ、……わかっていましたよ。あなたがここまで来ることを。貴族を粛清し、マフィアを滅ぼし、聖職者を焼き払い、私の研究所を潰し……。本当にお見事でしたよ、シルヴィア様。……私が無様に命乞いをする様子をあなたはどれほど楽しみにしていたのでしょうね？
……ふふっ、言わなくてもわかりますよ。……だって、私も好きでしたから。偉大な者が墜ちる姿が。恥も外見も捨てて命乞いをする姿が。……もし、私があなたなら、シルヴィアは魔王リリスを蹂躙し拷問にかけるでしょうね。……偉大な魔王が無様に泣いて叫ぶ肉の塊にまで堕とされるなんて、誰もが絶賛する最高のエンターテイメントでしょう？　あなたは、かつての私と同じ。壊す悦びを知ってしまった。……ふふ、その嗜虐が今から私に向けられると思いますと恐ろしいですね」
魔王リリスはゆっくりと床に手をついた。白く美しい指が冷たい石の上で微かに震えていた。
「だから……どうぞ、お望みのままに。……私はあなたの奴隷になります。あなたに傅き、あなたに跪き、あなたにすべてを捧げ

ます。ねえ、シルヴィア様。だから……
……」
　リリスはシルヴィアの足にそっと唇を寄せた。
「どうか、私をお慈悲でお救いください。命だけはどうかお助けください。忠実なしもべになります。犬になります。玩具になります。ですから……どうか……どうか……。慈悲深いご主人様として、私を使ってくださいませ。……私は、すでにあなたのものなのですから」
「……ふふっ。お命を助けていただけるんですね。……シルヴィア様のご厚情、誠に感謝申し上げます♡ でもね、シルヴィア様。もし私があなたの立場だったら……。魔王リリスに必死に命乞いをさせて、決して聞き入れず、……永遠に罰を与えるでしょうね。……リリスが途中から、死を乞うようになるまで。いいえ。死を乞うようになってからもずっとずっと。……生かしたまま、終わることのない苦痛を与え続けるでしょう。私が先代の魔王にしたように」
　リリスは諦念に満ちた卑屈な表情でシルヴィアを見つめた。リリスが座していた玉座の座面を取り外すと、そこには、一人の白髪の女が縛りつけられ封印されていた。見た年齢はシルヴィアと変わらない。白髪の少女の身体は呪詛を編み込まれた革の拘束具によって徹底的に封じられ、わずかな指先の動きさえ

許されないほどに固く締め付けられていた。それは生きた拘束だった。拘束具は肉に根を張り、魔力を喰らい、痛みを与え、決して死を許さない呪いを帯びていた。皮膚と一体化し、血肉の代わりに根を巡らせ、終わることのない苦痛を与え続けるために作られた拷問具。リリスは愉快そうに微笑みながら、その惨たらしい姿をシルヴィアへと示した。

「ご覧くださいませ、シルヴィア様。……これは、かつての魔王。私の前任者にございます。しかし……今やただの肉塊ですね」

リリスは軽やかに手を振った。次の瞬間、拘束具が僅かに蠢き喰い込むように締め上げられた。女の身体がわずかに震えた。紅い瞳が虚ろに揺れた。

「……ッ……ぁ……あ……ッ……」

か細く掠れた声が漏れた。しかし言葉にはならない。彼女の舌はリリスによって切り落とされ、意思を伝えるための機能を奪われていた。かつて花の迷宮を支配した魔王は今や言葉を紡ぐことすら許されない存在へと堕ちていた。

「聞こえますか？ シルヴィア様」

リリスは先代の頬をそっと撫でた。

「この哀れな先代魔王が、あなたに救いを乞うておりますよ」

それは最早命乞いすらできないほどに砕かれた意志の名残だった。先代の魔王は数万年もの時を生かされ続けただただ終わりのない苦痛を与えられ続けた。かつての誇りはとう

に打ち砕かれ、意志も、怒りも、恨みも、何もかも削り取られた。あるのはただ生かされる苦しみ。リリスは、愉しげな笑みを浮かべながら、シルヴィアへと向き直った。

「この拘束具……ただの道具ではございません。決して朽ちず、決して千切れず、決して死を許さない。精神が壊れようと、肉体が腐敗しようと、拘束具はそれを修復し続けるのです。まるで植物のようですね。

……この者が、どれほどの時間、死なせてくれと懇願し続けたことか。魔王という高慢な存在が哀れな肉塊になる瞬間ほど、美しいものはございません。そうでしょう？　シルヴィア様。さあシルヴィア様。どうぞ先代魔王の肉をお受け取りくださいませ。私からの捧物です。この哀れな肉の塊に慈悲を与えるも、さらなる拷問にかけるもあなた次第でございます。ですが……あなたは すでに答えをお持ちなのでしょう？　優秀な魔王とは、そういうものです。

だって、私も。そういうお話が好きですから……あなたと同じように。もし私がシルヴィア様で、魔王リリスを打ち倒したとするなら。きっと私は魔王リリスを屈辱の限りに貶め、命乞いをさせ、そして後悔させるでしょうね。……ええ、ええ。私はとてもよく理解しております。……シルヴィア様。私はあなたに共感することができます。だから、どうぞ……続きを楽しんで？

……ねえ、シルヴィア様。……ほら……

私は跪きましたよ？　……どうか、存分に、
私を終わらせてくださいませ……」

あとがき・編集後記

あとがき

しらす

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます！　素敵な新生活になりますことをお祈りしております。

拙作を書くに至ったきっかけは、とある英文学の名著を読んでいて、作中のある展開に、どうしても納得行かない……となってしまったことです。詳細を述べるとネタバレになってしまいますので、気になった方はサマセット・モームの『月と六ペンス』を読んでいただければと思います。この読者が何に拳を握りしめていたか、一発でお分かりになるはずです。

また本編の内容ですが、何やらマスターに全て持っていかれたような気がしております。寂れた喫茶店の初老のマスターには、どうあがいても勝てる気がしません。

黒田ももん

こんにちは。冬眠中の大学生もどきです。この文章を書いているのは冬なのですが、いつの季節も布団とはこうも魅惑的なものなのですね。実に作業が滞って素晴らしい限りです。

今回はタイトル通り雪だるまの話を書きました。「平凡新卒の俺、転生したら雪だるまになっていた件～天使すぎる妹に愛されながら第二の人生始めます～」みたいな話です。「全身雪だるま人間」という突如浮かんだパワーワードを形にしました。創作物の中のような可愛い妹が現れないか待ち構えている毎日です。

ここ最近は純文学風の作品を書きがちだったのですが、「児童文学研究会」ということで今回は児童小説っぽい文体を目指しました。そして、字数との格闘に敗北しました。ですます調と字数は相性が実に悪いものですね。物語に起伏をつけようとすると無駄に長くなってしまう癖をそろそろ直したいものです。あとがきの冗長さはご愛嬌ということで。

作花霖

最近、ラジオを聴くのにハマっています。

なこ

私だって、頭使うときは甘いものをって言い訳して深夜どころか夜明けの午前四時にスーパーの半額ケーキつつくために神大に入学したわけじゃない。新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。良きキャンパスライフを。

あいかわあいか

新入生の皆様、ご入学誠におめでとうございます。神戸大学での出会いや学びが、皆様にとってかけがえのないものとなりますよう、お祈り申し上げます。

編集後記

新しい一日の始まりはいつも古い一日の終わりと隣り合わせです。曙光が差し込むと同時に去っていく夜の闇は、暖かいものも冷たいものも、等しく過去として私たちを見送ります。

私は夜明け前の青みがかった暗い空、夜とも朝とも言えない時間が大好物でして。稀に早起きをする度に自室の狭い窓から空模様を眺めているのですが、雲がゆっくり流れていくのをぼーっと見ているとやがて東の空が明らみ、少しずつ朝焼けが濃くなっていくんですね。明確な境界を持たないままゆっくりと過去になっていく一日を思っていると、自分もいつの間にか大人になっているようにも思えてきます。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。新しい生活に慣れないことも多いでしょうが、楽しいキャンパスライフを送れるよう陰ながら祈っています。

編責

児童文学研究会は、六甲台第一キャンパス・
グラウンド横にある部室で活動を行っております。

興味を持たれた方は、
ぜひお気軽に部室を訪ねてみてください。

ご意見・ご感想は下記アドレスまでどうぞ。
doubun12345@gmail.com

ホームページもよろしくお願いします。
https://doubun1234.wixsite.com/doubun

Twitter(X)では活動状況の報告を行っております。
https://twitter.com/KU_dbn

すぎかえる 262 号　「夜明け」

発行日：2025 年 3 月 19 日

執筆者：

編集責任者：

発行責任者：

発行元：神戸大学児童文学研究会